マラリヤ蚊のやうに、美候補者から血を吸つて、病毒を選擧人にまで傳染させる。農村にはこの弊が特に甚だしく、辨當を喰べさせてくれる候補者に入札する。ひどいのになると双方の辨當を喰くらべて味のいゝ方に投票したものがある。——

辨當でもブローカの受負制度になつて候補者から金を取つて、その中から頭をはねて頭のないお肴を選擧者に喰べさせる。從つて選擧費用がかさむ、表面では平均一萬二千圓だが、實際は法定費だけでは保證金を返してもらへない。三萬と五萬の金をつかふ。

千圓の印刷費を支配つて七百圓の受取書を取り、二千圓の辯當代を支配つて五百圓の領收證をとる選擧費の辻褄を合せるぐらゐは何でもないことである。といふのは、こんな連中はいつも稅金の屆で稅務署にもこの手でやつてゐる。選擧費の公開でも狡い奴が狡る勝ちであり、悪い奴が悪るどくである。

それで當選すれば、すぐ利權をさがして運動費を取りもどさうとする。落選したら先祖から讓られた家藏を飛ばしてしまふ、まるで相場をしてゐるやうなものである。そこに罪悪が潜む。彼らのいふ憲政の常道といふ道を歩んで行つたら刑務所の門へ直通である。すべての道はローマに通じる。

今度の選擧は、どういふ意義の下に行はれるかといふに、正しい議會をつくらうとするのでもなく又た政策をもつて爭ふといふのでもなく、その事實は民政黨が最大限に、頭數を殖やさうとし、政友會は最小限に頭數を減らすまいとする。要するに頭の爭奪戰に過ぎないのである。

悪い頭でも、善い頭でも質の善し悪しは問ふところではない。數さへ多ければいゝといふ——數でこなす戰法である。現内閣も果して安達さんの狸算用どほりに頭數がふえたら、それは粗製頭の陳列であり濫造頭の大量生產であるから、產業合理化の原則にもならず、能率の增進にもならない。これは政黨として意義はあつても、國家として又た吾々國民として何の意義も期待もないのである。

かくの如き方法で選擧戰に勝つことは、政黨内に未來の禍根を殘すことであるから、選擧者は投票の力で、こんな頭を陶汰してしまはねばならぬ。投票に現はれる批判は政略本位でなく國家本位であらねばならぬ。國家を形造るものは人物であるから人物本位ともいひ得られる。政治上の腐敗は道德上の腐敗に基礎を置いてゐるから、彼ら墮落坊主のお說敎にいひまくられて盲從する選擧民は悪い、墮落した代議士をもつ國民はそれ自身の墮落である。

彼らは政治の腐敗を、他の黨派になすり合つてゐるが罪は五分五分である。繩つきを双方から出してゐる。これを淨化するのには平凡な言葉だが、正しい人を選む外にはない。

議論は凡に落ちてくるが、選擧の本旨はむづかしいものではなくして平凡なものである。平凡なところに正しい常識がある、皆さん平凡な常識で正しい選擧を行つてください。と、私は紙上からお願ひいたします。選擧權のない婦人は、しつかりして下さい男性有權者にお願ひする。私はホノルゝの汎太平洋婦人會議に望み、またベルリンの萬國婦人參政權大會に臨み、親しく婦人參政のない國に明らかな政治のないことをみてきた、私は婦選によらぬ普選には光明のないことを知つてゐるが、今總選擧を眼の前に置いてそれは急場の問に合はぬ、これで筆を擱く。

15 小才子の標本

モダン・ボーイは小才子の標本である。

モ・ボは濛茫で、濛たり茫たり、意志の重點を失つて流行の支配するまゝに街頭をうろつく。輕薄な時代相が生きて動いてゐる。

映畫の藝題と女給の名を知つてゐるだけでモ・ボの基礎はできあがる。よくもあんな心持ちの惡い薄つぺらな生活ができたものだと思ふ。すべて女でも男でもモダン性を帶びたものは第一に頭によつて自己を表現しやうとする。衣服は粗末でも一圓の散髮料は支拂ふのだもの髮はテカ〳〵としてゐるのを怪しむなかれ、丹念にウエイブがしてあるから、風呂に入つたら湯氣で毛が伸びることを恐れて三日も入浴しないで、顏と手と頸とだけを洗つて胴體は垢だらけ、髮は長くとも美術家にあらず、大本敎にあらず、チツクに光るその中にはマルクスの原理が詰つてゐるといふわけではなく、頭の問題といつても思想に觸れない愚頭顱に過ぎない。

青春の元氣はどこにある。酒によつて眼はうるんでゐる。夜ふかしで體は弱い。暗い棕櫚の影でカクテルに醉つて砂漠の歌を唱つて、ジンの一杯に二時間も女給をとらへるのだもの、田舍から駈出した當座でない限り、少しでもカフエーずれしたものなら、女給でさへ鼻をつまむから、この頃の戀愛漁夫であるモ・ボも不景氣だといつてゐる。太いズボンが流行するからといつても學生型のオックス・フオードと、水夫用のセーラー・パンツと區別するだけの流行知識もなくして、たゞ裾が太かつたらそれで新式だと思つてゐたが、アメリカでは太いズボンも凋落の徵が見えたと聞いて、次にダブル・サツクを期待して、これで頽勢を挽回しようと考へてゐる。流行を追ふものは輕薄で、貧乏なのを原則とする。殺那の氣分に生きてゐるから失業したら首を縊りさうだ。ハイカラに金と智慧とはないらしい。

いつの時代でもこの種の青年はある。俠客の眞似をした時代も、政治家を氣取つた時代も、色男に

なり濟ました時代もある。今のモ・ボは足の尖で跳ね廻はるダンスが、よく彼等の魂を現はしてゐる拇指の先で辛うじて倒れない程度に、世を渡つて行かうとする人々に輕薄な世相はジャズの行進で調子よく浮かれさす。

親不幸は資格の一つ、宗教は面倒で道德は厄介で、ロシアから輸入した理窟も、アメリカから小包で送つてきた思想も、自分の便利のいゝところだけを取つて、そんなものを綜合して便利な道理をつける。誰れに敎はつたものかマルサスの人口論と避姙の講釋は上手、カフエーで原稿を書くやうになつてはキザのクライマックスに達する。

モ・ボを大量生産するものは中學校である。中堅敎育が技巧に走つて、模倣に長じてゐるものが創造の才を壓するから妙な人間が街頭に現はれるのだ。モ・ボよ、汝の罪ではない。

C社會短評

1 歐洲の流行界

一

ベルリンのかん〳〵に固いところから、柔軟性のあるゴムのやうなパリにくると自然に落ちついてゆつくり遊ぶ氣になる。

歐洲で贅澤の極致は東洋趣味と、古代傾向である。富豪の立派な客間は東洋式の飾りつけがある、高價なものは東洋の骨董で、しかも僞物である。支那の緞子、佛像、朝鮮の高麗燒、日本の錦織、錦畫、印度の香木、古錢など、それにエジプト、ギリシヤの古代のものを交ぜて、アメリカものは卑しまれてゐる。

ベルリンではフランスから軍事探偵が入りこみ、日本からは發明泥棒がくる、日本からは醫學研究よりも科學研究者が多くなつて、新發明をすつて歸らうとするから油斷ができないといつてゐる。それのやうにパリーでもロシアから共產スパイが入りこみ、日本からは流行探偵がくるといふ、パリーの流行を盜んで例の粗製摸造をつくることが恐ろしいといふのだ。

パリーのマガザン・ルーブルなどに並べてある美しいものは、大てい日本にきてゐるが、陳列が巧

みにできてゐるから品物が引き立つ、手に取つてみればさうでもないから土産として買はうとすれば却つて迷はされる。歐洲の百貨店員の三分の一は婦人であつて、ドイツ人は惡い癖があつてお客を睨みつけるがよく働く。イギリス婦人の氣が利かないことは驚く、釣錢に暇どり、荷造りに暇どる、フランス婦人は輕快で愛嬌がある。どれも戀してゐるやうな眼つきで品物を渡してくれる。日本の女店員は決して歐洲のそれに劣つてゐないが、たゞ營業時間中に店員同志が雜談をしてゐる、時としては男店員と話し込んでゐるなど遺憾な點がある。歐洲の百貨店には酒場がある、愉快さうに酒を飲んでゐるが、規律なく泥醉するのが東洋人の癖だから酒場だけはうつかりまねをしてはならないと思ふ。

パリーではケラベルの喜歌劇「フランス」ヴエーベルの「舞踏のすゝめ」などはやつてゐる。ワグネル、ベートヴエンなどのものは相變らず人氣がある。

喜劇でも言葉が通じなくとも、眼でみてわかるやうになつてゐるのが國際的として尊まれる、外國語のわからないものでも、ロシヤ歌劇團、イタリー歌劇團が日本へきて面白く感じさせるやうに、ヒツポトラム座でやつてゐた喜劇のごときはイタリー人も、フランス人も、ロシア人も、印度人も、屬領の黑い人達たちも笑ひこけて見物してゐた。ローマの喜劇團もロンドンへ出稼ぎにきてゐたが、イタリー語のわからない私にもよく理解はできた、歐洲のやうな人種が混交したところは言葉を超越した動作で意味を通じさせるやうなものが國際的に歡迎される、日本のフキルムもこの式でなくては外國へは輸出されまいと思ふ。ロンドンでは沙翁ものゝ焦げつきだ、いくら沙翁がいゝといつても同じものを二度も三度もみてゐるイギリス人の根氣よさを、忠臣藏を繰返してゐる日本人が笑ふ資格もあるまいか。婦人は斷髮が整容の中核をなしてゐる、すべての服裝は頭に似付くやうになつて、それを基調として出發する、ボツブの流行は決して廢るまい、一度髮を切つたら二度と長い髷を頭に載せるやうな重々しい氣分になれないからである。

二

歐洲の百貨店の品物はパリー第一、ロンドン第二、規模はアメリカ第一、ベルリン第二、實用的なのはドイツ第一、ロンドン第二、意氣なのはパリー第一、アメリカ第二、安いのはドイツ第一、アメリカ第二、こんな冒險的な概評を下しても、間ちがつて笑はれるのは私だけで讀誌はあづからぬ。私も以前には流行記者を稼いだこともあるが、今では本職でないから大擔なことをいつて笑はれても、これを載せた雜誌が笑はれるだけで私はあづからぬ。どうでもいゝ筆を次に運ばう。

人口五十萬の都市なら三越の三つや四つは養つて行けるだけの購買力がある、百貨店はまず〳〵盛んになる運命をもつてゐる。特に規模が大きければ大きいほど繁昌する傾向がある。

日本の百貨店は呉服屋の進化したもので、つい先だつてまでも「三越」が「三越呉服店」であつたやうに、呉服に主力があるが、歐米のそれは必ずしもさうではない。却つて專門の服裝店へ行つた方がいゝやうに思ふ。

モスコーの國立百貨店は田舍の何でも屋といつた調子で、實用品ばかりしか賣つてゐない上に店員は官吏であるから何となく角張つてゐるが、歐洲の百貨店は遊びながら買ふやうにできてゐる。

ベルリンのウエルトハイムでは度膽を拔かれた、たまげることは日本の國辱になると思つて魂消ないやうに、つとめて東洋式に感情を抑制してゐたが心の中ではあきれてしまつた。

ライプチツヒストラーセには、ウエルトハイムの外にテーツなどもある、これにはさすがのアメリカからも見學にくるといふが、その實はアメリカ式を模倣してドイツ式の研究を加へたものだといふ何でも店員は七千人で一日の賣り上げは百萬圓であると凄い法螺を吹かれたが、その半分としても大きい。

三越も今の十倍ぐらゐに擴張しても損をする心配はない、損をしても私の財布に響くわけでないから、尙更ら安神して三越に擴張をすゝめる。親切の到りだ。

パリーのルーブル、ボルマルセなどはその建築ではシカゴのマーシヤルフヰルドに及ばないと云ふが賣品の內容は優れてゐる。ロンドンのオツクスフオードにスワンエドガー、エバンス、ギヤラリーフアイエなど九つも十もの百貨店が續いてゐる。近くにセルフリツジがあり、少し離れてケンシントンにハロツズなどがある、ロンドンの百貨店は統一がないから各部が別々に間仕切りがせられて小賣店の雜居部屋である。

ユダヤ人の經營になるドイツの百貨店とアメリカ資本でやつてゐるロンドンのとは、どれも振つてゐる。

スキスの山の中に小規模の時計工場があり、イギリスの田舍に手織り式の羅紗工場があつて、そんな草深いところから精巧な品を造り出すやうに、パリーの流行もオペラから百貨店、百貨店から製造元、製造元から女工へと糸をつたつて調べてみれば、むさくるしい家庭工業によつて造り出されてゐるのは意外であつた、パリーでも新式といふのはアメリカの意匠を模倣してゐることもあるが、アメリカほど機械臭くない、手工的に藝術の芳香を放つてゐるのは、かうしたわけであらう。

花の都といつても花はない。パリー香水の原料花は遠くバルカン地方にも。オーストリーにも、チエツコにも咲いてゐる、パリーの夏はヤンキーの渦が卷いて、よつてたかつてパリーの繁榮をつくり工業のない都を花と咲かしてゐる。

2　ロンドンの支那料理屋

ロンドンで奇拔なことがあつた、だが奇拔といふことは水平性をもつてゐない、甲の珍らしいとするところのは必らずしも乙の珍らしいとすることではない。私の面白いとするところは讀者にとつて苦々しいことかも知れない、そんなことを顧慮してゐては原稿といふものは書けるものではない。何でも押强く書いてゐるうちにどれか珍らしいことに出逢ふであらう。

日本で支那料理を喰べた時にはお箸であつたが、パリーではフオイクとナイフであつた。日本では支那料理の食後にお漬物があつたが歐洲ではそれがコーヒとなつてゐる。どちらも純支那料理と銘うつてあるが純ではなくして國によつて不純物を交ぜるのだらう、長春で喰べた時は漬物もコーヒもなかつた。

そんなことはどうでもいゝ、大學の東洋科を出た人たちがピカデリーの支那料理で十八人のパーチーを開くことになつたが、そのうち一人が事故のために缺席することになつて九人一卓で一人の缺員は都合が悪いから補充として出席しないかと誘はれたから私は喜んで出席した。

支那のことなら本もの、支那人を除いたら日本漢學の繩張りだから、いくら東洋科を出た學士でも教授の博士でも何ほどのことやあるといふのが私の先入自大感であつたが、私の豫期に反して大に驚かされた彼らが詩を吟じることである。日本風の吟じ方とちがつて支那歌妓と一しょに旨く歌ふことである。

ロンドン大學では支那學を教へる時に、漢文を支那發音で棒讀みにするのだから詩は支那の音樂に合はせてよく歌ふ、李白の淸平調なんかは十八番である。この頃は明淸時代の楊白華などを歌ふ、これには面喰つた。私はぼんやりとしてそれを感心して聞いてゐたが私にも歌へといふのだ、困つたことには日本流に吟じては意味が通じない上に瑟琶にも胡弓にも合はない、むろん笛には合はない、彼らの吟じ方は瑟琶にも笛にもピアノにでも合はせて歌へるのだ。

日本では小學時代から漢文をお稽古してゐるはずだから、本國の支那よりも漢字をよく知つてゐるさうだ、歌へないはずはないといふのだ。私は日本の儒家の產れで文筆をもつて立つてゐる、婦人文筆家だといつて紹介されたものだから大に窮境に陷つた、そこで日本語で漢文を讀む說明をしたが十分に合點が行かない。そこに掛けてある聯の對句を英譯して聞かせたからそれで漸くこの女性は詩がわかるが口に出して發音のできないものであるといふ了解ができた、英語の媒介で漢詩を談ずるのは、つまり日本の漢學教育が實用とならないことを證明する。これは何とかせねばならぬと思つた。詩を

吟じられないが詩を作ることはできると說明したら、それでは何か卽興的なものをやつてくれといつて毛筆と書箋紙とを出したから、東風吹キ浪客ヲ。吹キ送ッテ到ニ英京。千里江湖ノ意。半宵管絃ノ聲。と厚かましいところをやつた、國土を離れると人間は大膽になり厚かましくなるものだ。

支那歌手が浪客といふ熟字がないといふから私が自ら稱して浪人といふ、人からは女浪人といふ、私が日本を出る時に讀賣新聞がその上に怪の字を付け加へて私の著書を批評したことを思ひ出し、英語と筆談を交ぜて日本特有の浪人談をやつた。

一團は聲を揃へて私の詩を吟じたが第三句（轉）の意といふ字が對句の聲といふ字に對して吟じにくいといつて二三度繰返してみたが、どうも調子が惡いらしい。私は歌へないから從つてそれに代へる長音の字を見出すことができない、それでは情と直してはどうかといふから、それは平字であるから尙更ら歌へないはずだと私がいつたら支那人の歌手はその通りだといつた。稀飯（シーファン）が最後に出た時に皆がスプーンで喰べたが、私は箸を出させて喰べた。外のものもこれに眞似してやつたお粥であるから旨く挿めない、私の箸の操縱法をまねてみたが、これだけは三歲の時から熟練してゐるだけに手際よくやつて詩吟の不體裁を回復した、

面白いと思つて書いたことが面白味がないからこれでよすが、たゞ日本でも漢文敎育を學校から除かない代りにイギリスのやうに實用的に敎へたならきつと役に立つと思ふ、支那を除外して日本の繁榮はあり得ないからである。

3　自由の女神

自由の女神の像の下でヨーロッパの埃を拂つてニューヨークの埠頭を驅けて、その脚で一わたり視察してきた。例の通り遽たゞしい旅である、できるだけ視察の能率を高めやうとする慾念で眼も頭も忙しいことだ。先づ眼から耳から頭へ刺戟するのは自動車の騷音と、無茶苦茶に電燈を使つてゐることである。電燈に限らず何でも歐洲のやうにケチ臭くない。

大金持ちと大貧乏人との幸福なところだ、第五街にはアメリカ製の三井も、岩崎も、住友も、何十軒か門を並べてゐる。その幸福さうなことは說明するまでもないが、大貧乏人の幸福はちよつと註釋を入れる必要がある。施療病院と、托兒所と、貧民兒童慰安所と產院と、貧兒クラブと、貧民長屋とをみれば、つくゞ〵羨ましくなる。金持ちの餘つた金でできてゐるのである、縣立刑務所をみて犯罪者の幸福を羨んだ同胞さへある、けちな日本人だ。

モスコーの蠅と、ローマの蚊と蚤とは實驗した、ハンブルグとマルセーユの南京虫は噂に聞いたが

面會はしなかつた、ニューヨークには昆虫はゐないが魔窟には人間の蛆が巣をしてゐるさうだ。大きな高いものが無遠慮に立つてゐる、二萬五千人を容れるエクイテーブル・ビルヂングを見たのを手始めとして、これからビルヂングの怪物探險に取りかゝるのだが、ロンドンのやうに落ついてゐられない、何だか忙がしくつて、ぢつとしてゐられない、今筆を投げて自動車に乘る。運轉手さん、どこへなりとも飛ばして頂戴。

4　婦人社交界

男が働くのは妻を社交界に推し出したい虛榮が手傳つてゐるかも知れない、男も女も何か仕事をしやうといふ眼つきで「元氣」を體に一ぱい詰め込んで動いてゐる。

男子に粗暴な行爲のないのは、婦人の柔かな感化を受けたもので、婦人に氣力のあるのは男子の剛健性を感受したものである。どちらも男女共學の賜であらう。

手荷物を持つのは男の役目であり、場所は讓つてくれる、エレベーターでは帽子をとつて敬禮してくれる。婦人は割增がついてゐる。私も婦人なるがゆゑに歐洲で大意張りに意張つてきた、まだアメリカで意張れるとはありがたい。日本に歸つてこの調子でやらうものなら頭に三つや四つの瘤はついてゐやう。

アメリカは皮相の黃金文明であるといふが、婦人を奴隷とみない點は立派に文明の精神に觸れてゐる。軍縮の提唱も平和の主張も、要するに婦人を尊敬すると同一の心理で、暴力を憎み平和を愛好する點に基礎を持つ。婦人の衣裳の美しさは虹と色彩を競ふ、ロンドンのやうに陰氣な服裝はしてゐない、同額の金を支拂つてもアメリカは色合や柄において明るいから着ものが引き立つてみえる。婦人だけではない市街全體がその調子である。

ニューヨークの美しいのは、歐洲のやうに稅金と寄附を惜まないからである、市の豫算が日本貨で十七億圓、東京市とは段がちがふ、公共事業は大てい寄附金でできてゐる。

兒童クラブなどは兒どもの樂園である、そこに備へてある玩具は日本とドイツとの混合である。ドイツの方が精巧だが毀れ易い、日本のは簡單で要領を得てゐるとはアメリカ人もお世辭がいゝ、水泳室から齒療室、音樂室、圖書室と並んで兒どもでなくとも半日ばかり遊んでゐたい。

男も、女も、兒ども老人まで、元氣一ぱいで、老人だつてロンドンのやうに樂隱居を考へてゐない氣もちのいゝ國である。

5 住宅設計

金持ちより家持ち、これは土地建物會社の標語であるが、これまで衣と食とに關することは婦人仲間で相當研究されたが、住居については等閑に付せられてゐた傾きがあつた。

衣については裁縫講習會があり、食について料理研究會はあつたが、住については何もない。この三つを兼ね備へて始めて家庭は成立するものである。にも拘らず、その構成要素の一つだけの智識が缺けてゐたことは、裁縫や料理のやうに簡單かつ廉價にできないためであつたであらうが、その必要は衣食に劣らぬ。

婦人のために家の必要を感じたといふ說によると、原始時代には穴居するものもあつたが多くは野に臥し山に寢てゐたもので、婦人の分娩に際して不便があつたのと不淨を避けるためと、羞恥を隱すためと、母子を保護するためとから產家を建てたのが家の始まりだといふ。そんなことはいづれにしても、衣食住ともに婦人に取つて男子よりも密接な關係がある。

近ごろ、どうしたら安價に住みよい家が得られるかといふ研究が婦人の讀ものとして新聞雜誌や單行本に現はれて、二千圓で住みよき家を建てる設計圖といつたやうな見出しで掲載され、この氣運に乘じて土地會社が家賃に相當するほどの月賦で、家が手に入る崩濟賣出しの宣傳をするから、これまで家を持つといふことは上流に限られてゐたが、それは必ずしも金持ちの道樂仕事ではなくして、中流以下の家庭に取つて却つて眞價にその必要を感じるのである。

住宅地の分讓廣告が、毎日の新聞案內欄を賑はしてゐるのもその傾向に當てこんだもので、多く郊外地であるから家屋の建築設計以外に注意すべき要件としては周圍の情況、近隣の住人、土地の乾濕水質の良否、交通の利便、兒童通學の利害、日用品の相場などを考慮に入れねばならぬ。

室內は通風採光はいふまでなく、明るく住み心地よく、永久に厭きのこないことが條件で、經濟問題としてはその家——成るべく地付きのものがいゝ、家は朽廢するが土地は値上りの樂みがある——の月賦支拂金又は金利と家賃との比較採算、それに土地家屋稅修繕費などを見つもつて決定せねばならぬ。

月賦支拂が未だ完濟しないうちに移轉したり、家屋を轉賣したりするのは極めて不利益である、それも止むことを得ない事情に基くのではなくして、當初に十分の注意を拂はなかつたのが原因となることが多い。すなはち主婦として住宅に關する智識が缺乏してゐたゝめの損害である。

不景氣の時には借家に住む方が利益で、景氣のいゝ時は自個の住宅を持つてゐる方が有利である。

人によつて氣分はちがふが、吾が家となれば土に對する執着と家に對する愛情は家庭に平和を持來すといふ、こんなことを書いても土地會社の宣傳に乘つたわけではない、家を持つて後悔してゐる人も多い。特に郊外地においてそれを聞く。

6 金利と家屋

金利がさがつた、それがどういふ風に家庭に響くか、冷やかな社會相はぢり〳〵と有閑婦人に迫つてくる。

家賃や貸金で生活してゐたものに對しては課税が不勞所得に重い、公債の利子も資本税を天引きされる、相續税はだん〳〵重くなるべき性質をもつ、そこへ銀行の預金の金利がさがり、三千圓以下の當座には利子を付けないやうになり、信託も利下げ、郵貯もこれに追隨しさうであるから、社會政策が遊んで喰べてゐるものゝ懷へ容赦なく喰ひこむ、この調子では社會主義者の唱へてゐる過激な手段が、却つてブルヂョア階級によつて實行されるのではないかと思はれる、主婦たるものこの現象を考へずに看過することができやうか。

社會施設は年とゝもに財産の價値を失はしめる。資本が廻轉數を減じるから利潤が減る、この頃は千圓の投下資本に對して平均年五百五十圓しか商品が製造されない、これを七分の利益ありとして三十八圓五十錢である、これでは資本を入れて勞働爭議に腦まされてゐるより定期預金して遊んでゐる方がましだと思はせたが、その銀行預金が突然の利下げである。だが、預金を引出して有價證券を買はうと思ふ頃にはそれも金利安證券高となつてゐるから利廻率は同じ採算となる、どちらにしても中等以上の收入は減じるに違ひはない、その收入の缺陷は直ちに主婦の懷と交渉なしには濟まない。

いつでも割の惡いのは中産階級である、預金利下げは上流ほど響きは大きいが、しかし生活に裕があるから持ちこたへられるにしても、中流どこに眞先に崩れさうである。中流は國の中堅である、中流なき國家はない。そこに婦人の支持を要する。

金利が安くなれば事業が起し易いはずであるが、今日の金利安は信用の破壞から財界の歩みが調子を狂はした變調現象であるから經濟の常道通りは進めない事業も起らない。

これまで二等の汽車に乘つてゐたものが三等にする、内地米を喰べてゐたものが朝鮮米にする、三人の女中を一人にする、一人の女中は暇を出して主婦自ら働く。又は主婦が街頭に立つて働く、内には經費の節約、外には職業の努力、この勇斷ができないやうでは主婦として落第である。

金利が安いといふことは金に値うちがなくなつたことである。反對に金利の高い時代もあるではあ

らうが、年々に生活が向上する上に社會政策が濃厚になるから、將來において決して徒食安居を許さない。自分より上の贅澤に追ひつかうとしないで生活の等級を一段さげることが必要である。虚榮外觀のためでなくして生活内容の充實ならば向上も望ましいが、日本の主婦はそれを誤解してカロリーや活力素の攝取を考慮に入れることなしに、節約といへばその鉾先を食物に向ける癖がある、日本では食物が粗惡すぎる、これは削る餘地は少い、要するに收入と支出とを堅く握手させることである。

もし預金利さげによつて内省的に婦人を自覺させることができたとすれば、私たちに取つて惡いことではなかつた。しかし、これは婦人内部の謙讓的なあきらめであつて、かやうな重大な結果を家庭に及ぼす變革について主婦の理解を求めることなしに、やつてのけた金融業者の協定に對しては私たちは異議ありと叫ばねばならぬ。

利下げでも金解禁でも消費經濟に大關係がある、それを男子の勝手にやられては、婦人たちはたまらぬ。

7　職業婦人の行進

婦人の職業進出は著るしい、その中で教員において特に顯著なことは私たちの意を强うするところである、明治卅四年には男教員に對する比率が二五であつたものが大正十年度には四八に進んでゐる本年度の統計はないが恐らくは非常の數に達してゐやう。

職業婦人の進出は現代の職業體系を混亂させた、家庭の傳統を搖がせた、それも過渡期の一時的現象であつて、やがて落付くところに落付くであらう、法律、制度、習慣が婦人に不利であるにかゝはらず、こゝまで進んだことは婦人に對して敬意を拂つてよからうと思ふ。

教員のみならず、あらゆる方面に家庭婦人が動員せられ、久しく男性に獨占せられてゐたカバーを破つて擡頭した、かくて職業婦人を先鋒とする行進の窮極が男女無差別の人格觀に到達するであらうことは少しの疑ひを容れぬところである。

8　眼がね

眼鏡が必らずしもなくてはならない程度の近眼でもない私が原稿を書く時だけはきつと眼鏡を掛ける、これは癖である。鼻眼鏡も後藤伯が逝かれてから權威を失つた。ロイドも俳優式に氣が張るから有りふれた緣なしの金つる眼鏡をかけてゐるが、何といつても細いつるで三上山の百足のやうに耳に卷いて鼻の先まで手を延ばしてゐるのだから時としてはバランスが狂つて、レンズが眼の正しい視方

を妨げることがある、さういふ時には原稿の調子が悪い。

新聞記者をやめて二年たらず浪人してゐた時代には、氣に向いた時には書きなぐつて新聞や雜誌へ賣つてゐた、著書も三つ四つ出した、みな頭が眼鏡を通して原稿紙に反映したものである。

ことしの一月廿五日から東京の新聞社へ聘せられて社說を擔任することになつた、浪人癖があつて野性を帶びてゐる私は定時に出社してパンクチユアリーに退出することは氣分を損じる。そこで自由勤務としてもらつたが、殊勝にも論說は一日も缺かさず書き續けてゐる。一月に二回ばかりは上京して編輯局に顏出しはするが、その他は大阪の家で浪人暮しをそのまゝ繼續してゐる。

毎朝眼をさまして一ばんに考へるのは、今日の論說である。半時間ばかり床でもがいて考へが浮んだ時に起きあがる。それから新聞に眼を通ほし社からの情報も聽く、これなら原稿紙三枚に過不足なしと分量を頭に組み立てたら眼鏡をかけて原稿紙に向うのだが、寢床で考へたことが急に覆つたり、更に緊急を要する事件が突發したりして折角の構想が無駄になつてしまふことが多い。原稿ができあがつてからゆつくり自由の體を風呂につける。

東京へ行く時は夜行であるから、田子の浦あたりで眼を覺して二日分の原稿を仕入れておく、東京へ着くなり働くことを避ける用意周到だ。社說以外のことは隨時に隨所で書く、書齋でも書く、汽車の待合でも、ホテルのライチングルームでも。

ところが、二月の中ごろに眼鏡のつるが歪んで藪睨みのやうになつた、丁度辯士席から活動寫眞をみてゐるやうに人の顏が細長くなつて原稿も書けない。帝國ホテルの一室で机に向つてゐたが氣が進まないから萬年筆を投げて銀座をぶらつき、松屋へ入つて眼鏡部で修繕させたら一個だけ玉を取換へた。この眼鏡は三年前に大阪で買つたものだが玉の一個はそのまゝ大阪のを使つてゐたから左眼は大阪を視、右眼は東京にくばり、丁度月の半を大阪で、あとの十五日を東京で暮してゐる私の生活狀態のやうである。

今でも大阪のある新聞に客員をしてゐるが、浪人の退屈まぎれに毎日隨筆を書いたこともあつたがそれは責任といふほどのものでもなかつた。社說となるとさうは氣樂に行かない。私のお友だちの中に私の筆が落ちたのではないかと心配してくれる人もあるが、勝手に原稿を書いてゐる時は氣まぐれの筆も飛ぶが、さて責任のある身となつては前後も顧慮する、社中の方針も考へるから、いくら氣隨の私でもさう勝手な氣焰も吐けない、穩健な議論は筆がさがつたやうに思はれる、物は見よう、眼鏡は掛けやう。

私が「婦人記者廢業記」を著したので、失業を憐んでくれた人が多かつたが、その實は月に四五回

は私を引つぱり出す勸誘があつた、新聞社からも、雜誌社からも、官廳からも、デパートからも、政黨からもあつたが、私の眼鏡に合はなかつた。私は失業してゐながら私のお友だちを十人ばかりもお世話して就職させた。そして私自身は相變らずの浪人であつたといふのは氣に合はない時に間に合はせの就職なんかできるものではない。いまの新聞社は社長の眼がねにかなつて、私の眼鏡にもかなつて入社することになつたが、それでも面倒な條件を出して社長を手こずらせた。その後は音なしく勤めて私は大阪の用事と東京の勤務とを片目づゝでみわけてゐる。

就職しても浪人病の保菌者として、ずいぶん氣儘に暮して行きたい、「女浪人行進曲」を二月出版した、名からして閑雲野鶴の趣がある。が、世間はどんな眼鏡でみてくれるやら。

就職によつて生活の眼鼻はついても眼鏡がゆがんでは前途の見通しがつかぬ、二年間といふものは私を就職させやうと口說いた人に氣まゝの條件を出して退却させたが、眼鏡なら耳にかけるが材能を鼻にかけたわけではなかつた。資本機構は人間を機械にする、それにちよつとした叛逆心をもつてゐただけである。人間としては就職するが機械になれなら。いつでも失業する、浪人する。眼鏡が損じたら買ひ換へるが人間が損じると、お粗末なものでもかけ換へがない。

9　男といふもの

1　女給

老人ほど持てる新案女釣り。

山出しの下女をつまんで三千圓の貞操蹂躙料を取られた百萬長者の御隱居さん、下女に懲りてカフエーへ泳ぎ出して女給釣り。いつもノーチップのけちんぼおやぢ。

懷から十萬圓の生命保險證券を出して

「俺が死んだら家内が受取人になるのだが、俺は無妻だ」

「では何人が受取るのです」

「その受取人がないので困つてゐるのだ、十萬圓だよ」

「まア、十萬圓！　いゝわね」

「俺の家内になつたら俺が死んだあとで受取れるのだ」

「貴君、いくつ？」

「六十だ」

「まだ達者だわね、血色もいゝわ」

「うむ、達者なものだ、毎朝冷水浴をやつてゐるから、冬だつて薄着してゐるが、風邪一つ引かないのだ。今の若いものに負けない精力があるよ」

「あらいやだわよ、六十ならまだ若いわ、もう五年も齢をとつてゐらつしたら妾は奥様を志願するわだけど、長くて十年だもの、一年の辛抱料が一萬圓なら……妾、やつぱり貴君の奥さまにしてくださいね」

2　輕便ホテル

商業學校中途退學といふ、藝が身を助けてホテルの帳簿方、輕便ホテルの情けなさは帳簿をつける暇に廊下の拜き掃除といふ兼職がある。

しつくひ洗ひの先に雑布を冠せて、板の間を流して行く。朝の四時から起きて、晩の二時まで、途中で三時間の晝寢は許されてゐるが、お客のこんだ時は、晝寢權を抛棄させられる。

七番に一人泊りの婦人客、顔の美しい上に二圓のチップは當節に珍らしい切れ方、このお客にサービスするつもりで、氣を利かせて朝のコーヒを持つて行つて、ドアをノックすれば中から出たのは十番の男客！

「いひ付けもしないものを持つてきやがつて、馬鹿ものめ！」

この野郎、うめいことをしやがつた。あの婦人客は怪しからぬと、悠氣にのぼせてマネージアーのところへ駈けつけて、そのことを注進したら

「お前は知らんでもいゝことを知つてゐる。そんなものには用事がない、今から解雇するから出て行つてもらひたい」

温いホテルから、緊縮の街頭へ追ひ出されて失業の群を追うて何處へ行く、

3　さん婆

「感心だね、電車の中でも勉強してゐる。」

若い娘の讀んでゐるのは、婦人雜誌ではない、クロース綴の單行本だ、それを覗きこんだおつさん。

「面白い繪がかいてある……」

「知りませんよ、默つてゐてください」

「默れなら默つてもゐるが、その本にはすばらしい繪があるね、この頃の娘さんは大膽なものだ、親の前で讀めないからこんなところで讀んでゐるのだ」

「妾は眞劍に勉強してゐるのです」

「もう年ごろだから初夜の豫備智識でもつけて置くかね、さう眞劍になつたら婿さんが喜ぶだらう」
「知りませんよ」
「知らなくつてもいゝ、さう知り過ぎたら相手が困るぞ」
「困つちまふわ」
「困らなくてもいゝぢやないか、貴女は中々開けてゐる」
「知りませんつてば」
婦人は少し亢奮した氣分で、生理學の本を閉ぢた、そして熟柿臭いおやぢの顔をみた。その充血した眼には涙があつた。
明朝！
明朝は產婆試驗が彼女の運命を決するのだ。

4　マネキン

犬も歩けば棒にあたることはあつても、心ぶらをやつてステッキにあたらない。調べてみればステッキガールてなものは實際の存在ではなくして、戀愛漁夫の空想だつた、その代りマネキンは確實に存在する。

ショーウヰンドや店頭で、消極的に客を呼ぶ時代は過ぎて、尖端を行く招ね金は街頭に潛航し始めた、軍縮でも裝甲艦より潛水艇を主張する日本だけある。
東京のマネキンクラブが引きあげて大阪は淋しくなつた、道頓堀から心齋橋を四五年も往來して一人のマネキンに行きあたらなかつた失望の歸り途で
「ちよいと、あなた、これを」
と、恥かしさうに手紙を出したのは流行づくめの着物をきた美しい美人——美人中の美人だから美しい美人といふのは活字の誤植ではない。
歩いて棒にあたつたのだ、犬がステッキにあたつたのだと、封を切つて見たら中から出たのは艶書ではなくして呉服屋の歳暮賣出しのビラ！
「馬鹿にしてゐらア」と女をみれば又た次の男に手紙を渡してゐた。

5　職業婦人

かうやつて彼女と心齋橋をブラついてゐると、行きちがふ人々が皆見かへるところ、いゝ夫婦だ。だが、彼女は虛榮ではち切れさうになつてゐる。、こんなものを家庭へ抱へ込んだら二人は枕を並べて餓ゑ死にだ、一人だけが辛うじて食つて行ける月給だから妻を飼ふなんか思ひも寄らぬ、表面の

體裁を飾つてちよつとシャンにみえるが、頭の帽子から中の洋服を通じて足の靴に到るまで、憚りながら皆月賦の未拂だ。

お前は職業婦人だから働いて勝手に着てくれ、俺は結婚しない程度でお前と情的關係に入つてゐるもの、、お前が結婚を迫つてきたら俺の月給を打あけて、あやまつたらお前は退却するだらう。

いよ〳〵切迫するまでは純な戀愛顔して引つばつて置くのが得だ、法螺三倍で、月給が二百のボーナスが二千五百とはちと吹き過ぎてあるが、今さら減俸でもあるまい……てなことを考へながら戀の行進、これみよの散歩。

「まア何を考へてゐらつしやつるの？」

「いや、なに……、貴女と結婚のことを考へてゐたんです」

6　三助

村で長者の筆頭であつたものが、情婦と手を引いて貞淑な女房を置きざりにして東京へ駈落ちしてから五年目。

金は使ひはたし、情婦には棄てられ今さら故郷へも歸る面白なく。三角關係が無角關係となつて、一人ぼつちで三助かせぎ。

女湯に下帶一筋の三助の徘徊するのは目ざはりと、婦人會から三助驅逐論が叫ばれて、江戸名物のながしも凋落して、大阪へ落ちた一人は南地で料理屋の風呂で、お客の脂を流してゐる、それが村の長者のなれの果て。

三番、水仙の間へ這入つた二人づれ、その女優らしい女が情婦とそつくり、さん〳〵金を使はせて男を棄てた人でなしめ、こゝで逢つたが、百年目。どうしてくれる拳を握つた時「三どん！　三番さん」といふ仲居の聲。

湯にほてつて上つてきた櫻色の皮膚の艶めかしい、肩の後から横顔を覗きこんで、似てはゐるが他人の空似、石鹸を背中に塗つて上から磨りおろして、又た横顔を。

これがあの女だつたら、と、思はず拳骨で横面をぴしやり。

「あら！　助けて！」

7　豫備教育

豫備教育を施してはいけないといつても、中學校の門には鬼が控へてゐる。地獄志願のものは六どうの辻の案内者を要する。

家庭教師に傭はれた美しい女先生は、坊つちやんの豫備のお相手に高女を卒業したての學力では少

し荷が重すぎる。

坊ちやんと向ひ合つて修身のおさらひ、品行を正しくすることが孝行の始めといふところ。

坊ちやんにはお母さんがない。お父さんは會社が退けたらいつも豫習に參加する。

「お父さんは先生と話しばかりするから、勉强の邪魔になる、あちらへ行つてゐて頂戴」

坊つちやんはさういつてお父さんを敬遠する。なぜなら先生とお父さんとの情話はまぜた坊つちやんの神經をいらだたせるに十分であつたからだ。

「お父さんが付いてゐて督勵してあげるのだ」

といふお父さんは先生とふざけてばかりゐる。

とう〳〵坊つちやんは怒り出した、怒るはずだ、テーブルの下ではお父さんの脚は先生の肉色の薄い絹靴下と交錯してゐるではないか。

8　廢　娼

政治シーズンがきた、廢娼運動の第一線に立つ女流政治家が、政黨本部へ押しかけて廢娼賛否の膝づめ談判に及ぶ。

「風紀上からみても、人類愛からみても、公娼といつたやうなものは文明國に存在せしめてはなりません、賛成人に署名してください」

本部に居合せた二代議士が不幸にして女政客に捉へられた、賛成しないといへば人氣にさはる。賛成すれば仲間に笑はれる。

「吾輩は婦人の立場に十分な理解をもつてゐるのである。賛成だ」

二人とも署名したので、女政客たちは鬼の首でも取つたやうに喜んで去つたあとで、

「いくらでも署名してやるさ、どうせ通過しないのだもの、よし通過しても貴族院で抑へてくれるから世話がない、署名どくだ」

「さうだ、婦人なんかはあんな舊式戰法で成功すると思つてゐるところがかあいいものだ」

「かあくゆいどころか、熊のやうな女と猿のやうな女ばかりぢやないか、あれでは公娼に賣つても買手があるまい、だから、てれ隠しに廢娼運動をやつてゐるのだ」

9　猛　犬

京阪ではダンスホールが許可されないとあつて、御苦勞にも兵庫縣まで出かけて踊る。

ダンサーの歸りには送り狼がつく、郊外地の淋しい家へ急ぐのが夜の一時。

停留所を降りてから三丁たらずの自宅には、失業した良人も、母も、兒も待つてゐるのだ、若づく

りをしてゐても齡は爭へない、それを二十の獨身もので通用させてゐるものゝ、お化粧に遺漏があつたらひのえうまの本性がばれる。

郊外の途は電燈が暗い。暗い中から聲がした、狼だ、送り狼だ。

「とし子さん、寒いですね、貴女のお宅まで送つてあげやう」

この狼はダンスホールで、チップの切味がいゝお客だ、いやな奴だと思つても疎略にもできない。斷つてもどこまでもついてくる、いゝことがある、送り狼を懲戒するために非常手段を要する。

家には獰猛な犬があるのだ、ちよつと合圖すれば咬みつくことは確實だ。

わざと足音を忍ばせて格子戸を開けたら、待つてましたとばかりブルドックが飛び出して送り狼の向ふ脛に咬みついた。

10　ひ　げ

安全剃刀を買つてきて、鼻下ひげの片つ方を剃り落した。彼はもう三十日たらずで四十歳の聲をきくのである。

四十が初老なら年内で青年期は終るのだ、道理で眼の周圍と鼻の兩側には時期の溝渠を劃した皺が現はれた。だが、ひげを剃つたら二三年は若返へるに違ひない、青年期の延長を計るためひげに告別するのだ、お剃刀は告別式である。

「あら！ひげを落して？」

後から覗き込んだ妻は、片方だけのひげが殘つてゐる滑稽な顏を笑ふ代りに、十年も大切にしてゐた愛着物を惜氣もなく、剃り落した重大な出來事に驚いた。

「なに、俺もすぐ四十だ、若いもの〻仲に交つて會社で仕事をしてゐると、齡が目立つから老朽で首になる危險を防ぐための快刀亂麻、一擧兩斷だ」

「では妾が剃つてあげましやう」

家庭圓滿。妻の手で剃つてもらつた顏をなでながら、心の中では……かうやつたところはまだ戀愛の餘地がある、俺だつて接吻する機會が突然に生じるかも知れないからその時の準備行爲だが、今夜はどこのバーへ出かけやうか知ら……。

11　連帶扶養

婦人ガ一人以上ノ男性ト關係シテ產ミタル兒ニシテ實際ノ父親ヲ認ムルコト能ハザルトキハ其關係シタル男性ハ子ノ扶養ニ對シテ連帶責任ヲ負フ、但連帶扶養ヲナシ能ハザルトキハ最モ資力アル者ガ法律上ノ父親ト認定セラル……ソビエットロシア民法ノ一條。

だれに飜譯してもらつたか知らないが、それを書いた紙を中に置いてモダン婦人が兒に乳を呑ませながら坐つてゐる。

その前に四人の男が心配さうに坐つてゐる。

この男らは關係人であつて今日は父親認定會議に招集されたのである、モダン婦人の敎示——

「貴郎がたは妾と關係のあつた內輪同志でありますが、お互に委讓し合つて、この兒の父親たることを承認されないから交渉が纏まりません、よつて本日は、ソビエツトロシアの法典によつて斷然父親を認定していたゞきたいのですが、皆さんは連帶責任を認められますか、さうでなくば但書によつて一ばん資力のある戀積氏に法律上の父親たることを强制承認していたゞきたいのです。皆さん投票は記名にしましやうか、無記名にしましやうか」

12　電話お話中

機械は失業者を製造する。

自働式になつてから何萬かの乙娘を失業させたが、手働式の殘壘を守つてゐる電話孃も失業が眼前に見えてゐるが、男とちがつて結婚によつて精算されるのだ。

だから結婚紹介所は電話孃に目をつけた、い、候補者として。

結婚の紹介は男の申込は多いが、女が少い、女さへあつたら商賣は繁昌するのだから、女の買出しに骨が折れる。

求婚探偵といふ商賣の男が、木に餅のなるやうない、話を娘に持ちかける、この商賣は男が女を口說くのだが、それも自分のものにするために働くのではなくして、他の男に組合せるために働くのだから、この男は交換手の役目をつとめるのだ。

電話局の裏門での話——

「私は、へえ、四海波會の社員ですが、貴女のお母さんとは懇意なもので、へえ、その、い、緣談があるのですが、その、なに、先方さんは金滿家で、男ぶりがよくて、どんなものでしやう」

「あら！いやよ、妾は今外に緣談があるのですわ」

「では、お話し中ですか、へえ」

13　勇壯活潑

二人で心ブラをやつて戎橋へきた時にモ・ガの方から突然——

「貴郎、こゝから歸つて頂戴」

「なぜでしやう、電話で呼出しておいて、まだ一丁しか歩いてゐないのに、なぜ貴女は僕を突離すや

うなことをいふのですか」

「何もいはないで歸つてよ」

「僕の言動が何かお氣にさはつたことでもありましたか」

「そのにやけた態度が氣にさはるわよ」

「でも、僕はわけを話してくださらなかつたら苦痛です」

「妾は刹那の感興に生きてゐるのよ、柔順猫のやうな貴郎が嫌ひになつて、獰猛虎のやうな男とお酒を飲んでみたくなつたのだわ、貴郎が惡いのぢやないが、拳闘家か撃劍家のやうな人に戀をしたくなつたの」

「僕は貴女の奴隷ですから、貴女の氣に入ることなら何でもしますよ、僕は勇壯活潑な性質なのだが貴女に愛されたいため柔順を裝つてゐたのです、よろしい、僕は勇者であることを貴女のお眼にかけることができます」

といつて四邊を見廻したところに平伏してゐる橋乞食があつた。

彼はステツキをふるつてその乞食の頭上に一撃を加へた。

14　クリスマスのまに合はぬ

「俺は本邸の外に、別莊が二ヶ所と、妾宅が三つもあるから自用自動車で驅け廻つてゐるが、廻り切れないのだ、俺は緊縮が嫌ひで、その代りに大に働き大にもうけてゐる。女給相手の法螺は氣の晴れるものらしい。脂切つた四十男はカクテルに陶然としてゐる。」

「まア偉大なお方だわ、男らしいわね」

「不景氣に萎縮するからいけないのだ、强氣で押し切つたら金は瀧のやうに流れ込んでくるよ」

「景氣がいゝのね、妾の店にクリスマスの催しがありますの、その切符を一人が十枚づゝ賣る責任を持たされて困つてゐるの、貴郎三枚買つて頂戴ね、クリスマスの晩には一現さんを斷つて切符を持つたお方だけの會をしますの」

「いくらだ」

「一枚三圓で定食付なのです」

「なに、三圓、三枚で九圓か、それで遊べるなら安いものだ、だが俺はある時にはどつさりあるが、ない時にはまるでないのだ、節季でなくては金がない、それまで待ちなさい」

「いつまで待つの？」

「大晦日には集金するからね」

15 獅子頭

里子預り所といふ看板が、東京では到るところに掛つてゐる。大阪では公然の營業者はないが、それでもこの商賣人は相當に多い。

それが大てい私通によつた因果の兒を、善處する機關に利用せられて、赤ちやん賣買が本業のやうになつてゐる。

一人の兒の處分料が、五十圓から百圓が相場で知らぬ他人にもらはれて行く、悲慘な世相！

女の兒で顏だちのいゝものは無料、却つて先方から金をくれる。

產れたばかりの女の兒をかゝへてきた一人の男――。

「この兒を賣りたいのですが」

「七十五圓にまけておきます」

「こちらから金を出すのですか」

「さうです、女の兒は望み手が多いのですが、何ぶんこの兒は出來が惡いやうですから、百圓といふところを七十五圓に勉强したのです。お嫌やならお持歸りください、何ぶんミルク代が高くつくので七十五圓では引合ひません、それに貴郎によく肖てゐますから尙更ら望みがありません」

「僕に肖てゐては惡いですか」

「どうも、それが、獅子鼻のところがそつくりですからね」

16 悲しい戀愛

「喫茶へ行かうぢやありませんか」

「僕は喫茶なんかよりこの方が好きです、カフエーなんかで味へない情味がありますからね」

カフエーより「この方」が好きだといふが、この極月の寒い風が吹く夜に川に圍まれた中之島公園の無料ベンチに腰かけて「この方」もあつたものではない。

「貴郎は哲人のやうですね」

「この方が靜かでいゝでしやう」

「靜かなはずです、浮浪人でも橋の下に隱れてゐますよ、明るい街を散步しましやうよ」

男を急き立てゝ堺筋へ出た。

「タクシーに乘りましやう」

「僕はブラ〳〵と步くのが好きです、貴女と散步してゐると寒いとも疲れたとも感じません」

その實は寒さと疲れとを痛感してゐるのだが、ポケットの蟇口には十錢銀貨一個の存在である。

「だつて妾は脚がだるいのですもの、どこかホテルへでも行つて溫まらうぢやありませんか」
愛人とホテルへ行く！　何といふ願はしいことであらう、だがそれは望めない、痩我慢の計略も盡きた、彼は默つて俯いた。
「あら！泣いてゐらつしやるの？」

17　ねぎま

郊外電車で通勤する人のお晩菜を目當てに、停留所で折詰を賣る。
ねぎまの折詰を買つて歸つた男、妻と兒と自分と三人前を買ふべきところを二人前に緊縮した。
「これ御覽、葱の上に鮪が三切れとは誂へ向きだ、小瓶にはだしがはいつてゐる、火をこしらへてくれ、俺は飲みながら煮てあげる」
「珍らしいことね、東京にゐた時分はよく銀座の花村でねぎまを喰べましたつけが、大阪へ轉勤になつてから五年も喰べたことがありません、坊やができてから始めてです、坊やは初つものですよ」
御亭主は猪口をなめながら小鍋でたいてゐる、水仕事を片付けた妻もこれに參加した。
そこへきた坊やが歸つてきた。
「坊やねぎまの御馳走よ」
「ねぎまつて何？」
「葱と鮪とをたいたものです」
「葱ばかりだ」
「お前が晩くまで遊んでゐるから、鮪は融けてしまつたのだ」
その實はお父さんが酒の肴に思はず坊やの領分を侵略して食つてしまつたのであつた。
鮪の一と切れはお父さんの胃の中で消化し切れないで躍つてゐる。

18　安息日

「熊さん、けふは日曜だ、さう働かないで教會へ行かうぢやないか」
「教會つて何があるのだ、活動か、萬歳か、入場料はいくらだ、半額券を持つてゐるか」
「金はいらない」
「たゞのところは俺は好きだ、すぐ出かけやう」
「それがいゝ、平日に働いて安息日には教會へ行くことだ」
「その安息つて何だ」
「安息といふのは休むことで、平日に働いて日曜はゆつくり安息するのだね、もうきた、これが教會

だ這入りなさい」

「それぢやこの洋館で安息するのだね、なるほど、これは温かくて安息にいゝ」

「さうだ、そして身のためになるお話を聽かせてもらふのだ」

「あの高いところに立つてゐる野郎は何だ、手品をやるらしい」

「野郎つてことがあるか、あれは牧師さんだ、十字架についてといふ題で說敎が始まつてゐるのだ」

「十字架つて何だ」

「默つて聞きなさい」

「何かいつてゐるね、なるほど安息日だ、みな居眠つてゐる」

19　銀バス青バス

「電車は込んでゐるからバスにしやう、青がいゝか、銀がいゝか」

「バスにも色分けがあるかね」

「大阪には青と銀とが競爭してゐるのだ」

「決勝點は梅田か」

「その競爭ぢやない、お客を取合つてゐるのだ」

「お正月氣分だね、お尻が羽根をついてゐるやうに飛びあがる」

「道普請中だ、大阪は道路を掘りづめだ」

「金の茶釜でも出るかね」

「金を棄てゝゐるのだ、水道が掘つたあとを電燈が掘るのだ」

「あすこでも掘りかへしてゐる」

「あれは電話工事だらう」

「運轉手さん氣張つてくれ、前のバスに勝つたら金盃をくれるのだ」

「大きな聲を出すな、みつともない」

「バスのお尻に金盃とかいてある」

「酒の廣告だ」

「サントリーとかいてあるのは？」

「それはウヰスキーの廣告だ」

「道理でふら〳〵に醉つてゐる、バスの千鳥脚だ」

20　有藝仲居

線香代なしの三味線の普遍化、有藝仲居相手のプロレタリ散財、場末へ行くと間口二間の小料理屋が有藝仲居の三人も仕込んで、食事もさせてないものとみえて仲居は飢ゑてゐる。

酒を三四杯も飲んだ頃には、前に置かれたお膳は仲居に荒らされて、肴の骨ばかゞ敗殘者のやうに倒れてゐる。

「有藝仲居さんはゐないのか」

「有藝ちゆのは妾だんべい」

「お前が有藝とは驚いた」

「びつくらすることねえでねえか」

「びつくりするに無理はない、人はみかけに寄らぬものだ、一つ彈いて聞かせてくれ」

「三味を貼替にやつたからなも」

「なも？お前は美濃か尾張か」

「ちがふばつてん」

「長崎ぢやあるまいね」

「どこでもえゝがのし、三味がねえからステ、コを踊るべい、カツボレがよか、鰌を掬はうか」

「こらへてくれ、願ひさけだ」

「踊りがいやなら、茶椀むしでも通さうかのう」

「俺はまだ何も食つて、ゐないのにお膳は空になつてしまつた、なるほど無藝大食仲居だ」

10　婦人と職業紹介所

職業紹介所は、官吏によつて經營せられてゐるものより、資本家によつてできてゐる方が効果的であり、資本家よりも、勞働團體でやつてゐるも尙善く、勞資共同でやつてゐるものが一ばん成績がよい。男子はどうでもいゝ主義で、義務だけを消極的に果して責任を拔けやうとするだけであるが、婦人を主事とするものは、心からの同情と積極的の献身とが相俟つて、失業に脅える人心のいらだたしさを鎭靜させる。

どの國でも職業紹介の始めは、下女下男の口入れから出發してゐる。婦人團體によつて組織された職業紹介所はベルギーが本家であつて、附屬の授産場でも「婦人道德に缺けてゐないもの」に限つて救護するのだが、最も救護を必要とするものは、必らず婦人道德に缺けたものである、特に浮浪者などに貞操調査をするのは救護の意義を爲さない。

イタリーは農業紹介所があつて、季節に應じて農夫を移動させてゐるが、これは割合に成績がいゝ。

フランスには、到るところに乞食收容所が婦人の手で經營されてゐる。裁判所から乞食罪で裁かれて職業に就きたいものを善導してゐる。フランスには南歐のやうに乞食が多くはない。

授産救助所では、體質や智能が劣つて普通人と並んで行けない者を、婦人の手で親切に導いてゐる。

イギリスでは、職業紹介所を社會事業又は救濟事業としないで、工業組織の一部と認めてゐるが、何といつても、百三十萬の失業者群を紹介するのは、できない相談である上に、イギリスの失業者は就職の條件に贅澤をならべる。遊んでゐても失業救濟金で食物に不足はないのだから、失業者といふより惰けものである。イギリスの失業者は喰ひづめものであるが、日本の失業者は喰ひつめられないものである。

アメリカの外の、文明國は海外市場次第で內地企業が盛衰を呈し、全く他力本願である。戰後のヨーロッパには購買力がなく、海外にはけ口を求めてゐるが世界的不景氣で、製品はできても品物が賣れない、その不平の向けどころは職業紹介所である。

一ばん有効なのは、歐洲各國で行はれてゐる保險金庫であるが、フランスでも補助金を十一萬から三十萬に增したが、それは炭酸水に過ぎない、水ぶくれは一時の後にお腹がへる。

原則として、市町村役場に紹介所を併置してあるが、これは營利紹介所よりも振はない。營利口入も成績は惡くない。少し餘裕のあるものはこの方を好む傾向がある、サービスがいゝからであらう。

資本行進の過程は、年ごとに失業者を增し、紹介所は職業を紹介することはできても、職業をつくることができないから、現在以上に手のつけやうがない、特に職業婦人の俸給が安く、生活に差支へることは風紀上の大問題とならうとしてゐる。

まじめな職業では生活できないから、喫茶店からカフエー、カフエーからダンス場、ダンス場から性業婦人へと一歩ごとに落ちて行く。その有樣を紹介所の窓から眺めて、眼前に墮落して行く同性を救護することのできないことは何といふ悲しいことであらう。

婦人小兒を救護しやうとしても、その疾患が社會の習慣や國家の法律に原因してゐるならば、その矯正は比較的に容易であるが、經濟組織からきてゐるものは、社會の地盤の下まで掘りかへすにあらざれば効果がないのだから、紹介所では手のつけやうがない。

11　婦人の願ひ

婦人參政權の要求——といつた言葉は、日本婦人に荒々しく響くかも知れないが。舊式な婦人が想

像するやうに、無斷で衆人稠座の中へ飛び込んで、いきなり劍舞をするやうな無茶なものではない。

婦人運動ほど世間から、誤解を受けてゐるものはない。男性から誤解されるのは或は止むことを得ないが、同性仲間の舊型婦人からさへも、あばれ者のやうに指彈されるのは心外の到りではあるが、現に日本婦人の惡る固まりに、舊道德に固められてゐる狀態をみては、止むに止められぬ私たちの運動がある。私はいまベルリンの萬國婦人參政權大會から歸つて、日本の婦人たちに奮起を願ひたいと思ふのは、決して洋行戻りの新智識を振り廻はす考へでも何でもない。ヨーロッパから故鄕の日本を顧みた時は、どんなに悲慘に私たち同性の生活が眼に映るかを想像してもらひたい。

この運動は少數の力ではなし遂げられない、人數が多くなればなるほど、幸福の分配が早くて多い多數婦人の諒解と賛助とを得て、働きたいのが婦人運動者の願ひである。この願ひは何の私心も挿まれてゐない。

婦人參政權を獲得しても、燒いても喰べられず床の飾ものにもならないものではあるが、婦人は家庭を淸くせねばならぬ。兒どもを愛撫せねばならぬ、老人を養ひ、良人を助けねばならぬ。だから參政權が必要である、その反對に家庭を打ちこはし、兒どもを川へ投げ込み、老人を山に捨てゝ顧みないといふ考へなら、參政權なんかを得て、身の煩累を增すことは詰らないことである。

參政權を得た國の婦人は、どんなことを考へてゐるか、それは後に述べるやうな平凡極まる題目であるから、過激どころか極めて保守的のものである、男子として保守的な行動でも、これを婦人の口から唱へられると過激とみられるのは、日本における不思議である。不思議とばかりでは濟まされぬ私は日本婦人のために悲む。

家庭生活が苦しければ、それを改善するために骨を折りたい、家庭生活が安樂ならば、苦しんでゐる他人の苦痛を減じるため力を盡したい、といふのが、婦人特有の公共心である。家庭のために、兒のために、親のために、すべての人類のために、私たちは働かねばならぬ、自分一人だけ滿足すればいゝといふことは婦人の美德に缺けてゐる、今日の私たち婦人の位置は滿足でないことは何人でも認めてゐる。そこに婦人生活の建てなほしを要するのである。世間に噂を立てられず生きてゐるのか死んでゐるのか存在を人に知られない婦人は、女らしい女ではあらうが、それは運動に効果はない。

平和を唱へるものが危險思想であり、戰爭を叫ぶものが愛國者であるといふことは、婦人の諒解できないところである。婦人の平和論は過激思想に根をおろしてゐるのではなくして、人類福祉のために戰爭を忌避するのである。忌避するについての手段方法によつて、或は危險思想となるかも知れないが、婦人はそんな過激な主義を持つてはゐない、たゞ戰爭はいやだといふ單純な平和愛好心から出

發して、世界の婦人と手を握つて男性の鬪爭心理を牽制しやうとする、この心が全日本の婦人たちに響かないといふのは、何といふ殘念なことであらう。私たちは戰爭の萠芽を刈り取つて子孫に禍根を殘してはならぬ。

奇を好む若い婦人の中には、ことさらに過激な言葉をもつて、高ぶつてゐるものもあるが、それは婦人運動の本筋からはづれてゐる。私たちとともに、ベルリンに集つた世界四十八國の代表者のいふところを要約すれば「平和と繁榮」戰爭を避けて文明を樂みたい。「家庭生活の負擔の輕減」物價の調節生活の合理化。「男女の政治的平等」婦人を含む普選の斷行世界的實現。「法律の性別撤廢」刑法民法などにおける男女平等。「住宅の改良」健康と清潔は家庭から。「廢娼」「教育の男女均等」「保健及び社會廓清」「婦人小兒保護」「政治の純眞」「消費節約」「寡婦及び老人の扶養」といつたやうな、人道上から何人も異議のない平凡な問題ばかりで、危險思想や過激手段が潜在する餘地のないものである。

婦人運動をもつて、婦人の權益を男子から奪ふものとする人もあるが、これも誤解である。社會は男女兩性の肩によつてかつがれてゐる、一方の弱いのは他方の苦みである。婦人の力强くなるのは男性の幸であり、兒どもの福である。

婦人の開放とは間ちがつた法律道德、まちがつた習慣風俗から離れて、正しい法律道德、正しい習慣風俗によつて統制されやうといふので、舊い家から新しい家に移轉するだけのことである。婦人解放を誤解して、婦人運動に參加することを躊躇する人もあるが、國際婦人運動はそんな秩序破壞者ではない。

日本の女性たちは早く奮起して、早く社會の不道德を掃除すべき役目がある。

洋行戻りの私の口から、どんな新らしい意見が飛び出して人を驚かすかと期待せられたお方に對して、こんな舊い意見を書いて皆さまを驚かした。けれども穩健な婦人運動は華やかではないが尊いものである。日本婦人は公共義務に向つて穩かな動きを續けていたゞきたい。

12　主婦と家庭

夫も妻も勞働に疲れて家に歸る。夫はそのまゝ寢轉んでしまふが、妻はそれからまだ一人前の仕事を持つ、繕ひ、食事、小供の世話、掃除など手に餘る。日光の見えないじめ〳〵した貧民長屋は家庭の住み心地が悪い、ロンドンでは國辱になるから、危險なといふのを理由として案内者がほんとうの貧民窟を見せないで、准貧民窟、すなはち貧民窟の入口だけしか見せてくれないが、イギリスは失業

者救濟金が十分なため、貧民といふより惰民が群がつて遊んで暮してゐる。アメリカではどこでも公開だ、ユダヤ人街、ロシヤ人街、それから等級が下つて黒人街、支那人街、イタリー人街になると眼もあてられない、鼻もあてられない、不潔と臭氣とが漂ふ。彼等の社交室は屋外である、夏はいふまでもなく冬でも狹い街頭に立つて話し合つてゐる。家の中には家庭はない、たゞ重なり合つて寢るだけである。アメリカ人が氣前よく貧民窟をみせてくれるのは、排日の必要を日本人にみせるためだと聞いて驚いた。

中等階級にも家庭がない。朝はパンと牛乳とコーヒと簡單な冷肉、午は主人不在で主婦は賣りにくるおかず屋の一皿で事が足る、夫婦暮しの家は相携へて晩食をとりに出かける。その方が却つて安くつく、音樂を聽きながら食事を濟ませて公園なんかを散歩して家はたゞ眠るばかりだから家庭ではなくしてベットである。

上流社會にも家庭はない、主人は企業熱にうかれて奔り廻つてゐる餘暇に、冬は避寒に、夏は避暑に、春や秋は音樂會やダンスなどで家をあけてうろついてゐる。その上に極端な旅行好きである。

すべての階級を通じて、家庭の味をしんみりと味つてゐる暇がない。夫が遊べば妻も遊ぶといふ競爭的になつてゐるが、日本では、もしも妻が夫と同樣の慰藉と休養とを求めるならば、その家庭は經濟的に苦しくなり、清潔を缺いで居心地が悪くなるから、夫は家を外にして酒で氣を晴らす、妻が休養することは夫の愛を家庭外に追出すものである。夫の外に家族といふ外國の家庭にない同居人がある、臺所は能率的でなく食事は白人のそれより三倍四倍の手數がかゝる、そんな中を泳いで暮して行く日本婦人のやうな、そんな犧牲的の生活をしてゐるものは、世界中に見たことのない、尊いものである。

13　ロンドンでみたこと

ロンドンは世界の人種が寄り合つてゐるから、イギリス人の個性が徹底してゐないが、ロンドンを離れるに從つて舊式のカン〳〵である。古い習慣なら何でも尊重する、新らしいものは何でも下品である。パリーやニューヨークの婦人は殆んど全部斷髮だがイギリスの田舍は束髮である、七三、耳隱しもある、スカートも長い、田舍の町の美容院ではお客に金盥を持たせて爪で頭をガリ〳〵と搔くといふ無茶なところもある。電燈が下品で石油ランプが上品で、電氣ストーブが下品で石炭を燒くのが上品で、今に石油と石炭とで家をいぶしてゐる。

ロンドンの人口七百五十萬として、日曜にきちんと敎會へ出かけるもの七十五萬人、あとの九割は

「日曜にきちんと教會へ出かけるものだ」と承知してゐるだけの人であるが、田舍へ行けば、そんなずるいことはない。

イギリスの田舍には自動車が少い代りに、アメリカでみられない自轉車がある、平家もある、馬車が交通機關の重大な役割を演じてゐる。馭者が長いひげを生やしてゐる、アメリカにはあんな長いひげはない。

ニューヨークの、白い磨いたピカ〳〵の都市では、日本人の皮膚の色が氣にかゝるが、ロンドンのやうな煤ぶつたところでは、むき出しの赤煉瓦の家の前で日本人の顏色が調和するから面白い、ハンカチが半日とは持たない、カラーも帽子も頸筋も肺臟の奥まで煤煙で染められる、主婦が洗濯に忙しいのは朝鮮とロンドンとであらう。

老人の服裝は恐ろしく汚ない、若い男の汚ない服を着てゐるのをみるが、若い女の流行おくれの服裝をしてゐるものはない。

バーでも、カフエーのお客は半分は女である、アメリカのやうには意張らないが、それでも若い女は男と同じ程度に遊ぶ、ちよつと暇があればポケツトからトランプを出して遊ぶ、競馬のかけ札を賣りにくる、婦人が爭つて買つてゐる。

14　パリーの母娘

娘に贈物しても、母親は知らん顏をしてゐる、禮もいはない。奥さんを招待しても良人は知らぬ顏だ、母と子と、夫と妻とは千切れ〳〵になつてゐるやうだが、個人主義としてはそれでも家庭に統一がある。

日本でも緊縮政策で、節儉をやかましくいひ出したが、眼のつけどころがちがふやうだ、節儉して生活の向上を妨げては文明人ではない。生活は程度をさげてはいけない。生活の向上と金錢の浪費とを區別する智識がなくては主婦としての資格がない。しまりやといはれるパリーの中流生活には生活費の無駄と思はれるやうなものは全くない、そこが野蠻と文明との分れ目である。

人口の減少はフランスだけの問題ではない、白人全體の問題である。白人より黄人、黄人より黑人と色の濃いほど兒を多く產む。アメリカは人口が增加するといつても、南歐人が移住するのと黑人が非常な勢で增加するので、純アメリカ人は却つて減少してゐる。黑人はたゞ衞生が行とゞいてゐないため死亡率も高いが、それでも差引き增加の勢はすばらしい。ロンドンでも白人自殺の聲が高まつた。智識が高くなり生活が向上すると兒を產まなくなる、その上に人工作用も、晚婚の風も副作用をなし

てゐる。

フランスの兒どもは氣の毒だ、電車の中でも兒どもは大人に席を讓つて、隅つこに小さくなつて立つてゐる。芝居や映畫にもお父さんとお母さんとが手を引き合つて行くが、兒どもは連れて行つてもらへない。

散歩などに連れて行くこともあるが、兩親が並んで面白さうに話して行くあとから、小俣走りについて行く。話の相手にもなつてもらへないから、お父さんやお母さんと一しよに行くより、近所のお友だちと遊んでゐる方が面白いといつて、家族づれの外出には兒どもは嫌やがる。

親よりも先生だ、校長も教員も婦人が多い、校長の月給は日本貨にして八百圓教員が五百圓、親とちがつて兒どもに親切だから、兒どもは學校を好く。小學校は家庭の延長だから、教員は婦人がいゝといふ。

夫人は外出に兒どもをつれないかはりに、犬をつれて行く。小さいのもあるが中にはロッキー山の狼のやうなのをつれてゐる。兒どもの面倒はみないが、犬の面倒はよくみる、犬の蚤まで取つてやるけれども兒どもの洗濯はしてやらぬ。

百貨店や、レストランの入口に犬を遠慮してくださいと書いた札がある。レデーたちが犬をつれてきて困るからだ、兒どもを遠慮してくださいとは書いてないが、それを書く必要はないのだ。なぜならば奥さんは、犬をつれてくるかも知れないが、兒どもをつれてくる氣づかひはないからである。

結婚しても、腕のない御亭主には何とか難癖をつけて離婚の訴を出す、弱者保護を精神とする法律の運用は妻の負ける氣づかひがない。勝つたら扶養料がつく、けれども自分の產んだ兒は離緣するわけにも行かず扶養料を支拂はせるわけにも行かないから便利が悪い。

15　軍人と婦人

兵隊は、廣告ビラや、樂隊入りの軍事宣傳で募集されてゐる。村にゐて村人から嫌はれたものも、不良青年も、無賴漢も交つてゐる。交つてゐるどころか、ある人の話では不良と無賴との集團であるといふ、けれどもそれが婦人にもてること非常なものだ。アメリカ娘の兵隊さんを好くこと不思議な心理である。

聯隊の近邊に集つてゐる若い女は、賣春婦かといふに、なか〳〵もつてレデーの群である。お芝居のはねに樂屋の裏口で、浮氣婦人が俳優の歸りを待ちうけて、素顏の美にうつとりとなつた時代もあつたが、アメリカでは男優なんか問題にならぬ、軍人だ、兵隊さんだ。

女優志願で、家出をしたヤンキー娘が少くなつて、兵隊さんの後を慕つて家庭を抜けて出た娘が多い。「祖國擁護」の聲が高く唱へられ、片寄つた愛國心を煽るから軍人は戰前のドイツほど持てる。カイゼルひげを生やして見すぼらしい、賣卜者のやうな姿をしてゐるのが、ドイツの除隊士官である。士族の商法に失敗して、皆零落してゐるから。

ドイツでは軍人が輕蔑せられてゐるが、お隣のフランスでは軍人が大持てゞ、日曜なんか兵隊さんで盛り場を交ぜかへしてゐる。それがアメリカへくれば數は少いが軍人さんは婦人に喜ばれる、街頭でも婦人の手を引いて散歩してゐる、行軍には婦人が先廻りして待つてゐると、そこへ列がくる、休息時間にはダンスをやる、接吻をする、レストランで禁止になつてゐるはずの酒も飲む。

歸りの汽車や汽船の中で、婦人が頭痛がするといひ出したら、軍人さんが二等席で親切に介抱してゐる。戰爭には弱さうだが戀愛に強さうな兵隊さんである。戰術は知らなくとも戀の駈引には通じてゐるらしい。三人四人の首級をあげるのは何でもない、その首級は、婦人の首級であること註釋を要せぬ。

いつ戰爭があるか知れたものでないから、兵隊になつたのだ、それが近く戰爭があると確定したら除隊願を出して逃げ出す弱虫でも、祖國のためだと戰爭の始まるまでは意張つてゐる、その意張りぶりがヤンキー娘に取つて、たまらない憧憬なのである

16　頭のあがる

出世する途に、東海道から下るのと、中仙道から下るのと積極、消極の二つが性格によつて、選擇の自由を與へられてゐる。

資本主義網の中に閉ぢこめられたサラリーマンは、手も足も出ないといふのは、弱者の退却であつて。現にそれを突破して出世してゐる勇者は、吾々の眼の前に大手を振つて實在を見せてゐる。

ボーナスを貯蓄するやうなものは、出世しないといふのは、下戸の建てた藏はないといふ古い標語をモダン化したもので、一理のあることであるが、それは餘り身の安全を考へないものゝいふことで身の安定は頭の安定である。

安定しない生活にはよい智惠は出ない。出世の根據は樂しい家庭にある。資本主義の窮極は、資本家が自らの資本を活用するには手に餘るから、その運用をサラリーマンに委托することにある。

一種の請負ひ仕事であるから、資本を旨く運用する智識のあるものが同僚を越えて進む。これは個人事業にも會社にも官衙にも當てはまる。

自分の擔任事務に趣味を持てば、疲勞もなく研究もできる。自己の管掌事務をより簡便にし、より經濟的にする研究を持たないものは出世を斷念することだ。

消極的に蓄財して獨立することも一法である。近代資本主義機構は小資本家の働く餘地がないやうであるが、資本が大きくなればなるほど缺け目がある。

その缺け目は、小資本家の乘ずるところである。アメリカでも缺け目をみつけるに上手なものはユダヤ人であるから、小資本で獨立して遂に大を成す。その反對は日本人で、いつまでも女中代りをして黑人並みに扱はれてゐる。

小賣業者でも、百貨店を一巡して、その缺陷を見つけ出せないやうなものは氣の毒ながら、破產代ものだ。

17 經濟時代

大阪には言論機關が少い、特に經濟雜誌の少いのは、實業都市に不似合なことである。雜誌はあるにはあつても、特殊な一派の宣傳化されてゐるから、嚴正な意味における言論機關とはいへない。私などの下手な論文はいつも東京の雜誌を通じてのみ發表される、大阪にゐながら東京を通じて大阪に呼びかけなければならないとは、何と不便な實業都市もあつたものである。私が大阪雜誌に書いたのはこれが始めてである。

大阪は實際經濟の都で、理論經濟の都でない。と、實際と理論とを切離して、學理だけを東京に委讓してゐる理由がわからないが、東京の學理論に對する大阪の實際論で東西相對立するも面白からう

政治も、社會も、思想も、經濟の基調の上に立つ今日であるから、經濟は總ての社會構成に滲透して範圍が廣く、どれを摘みあげてこの小論文の結末をつけていゝかに迷ふが、今失業に就いていへば東京では對策や調査に耽つてゐるが、そんな學者の閑事業はそれとして大阪では實行を始めるがいゝと思ふ。

ドイツの內閣も失業保險案で倒れた、英國も百數十萬の失業者を抱えてゐる弱味から、印度のガンヂーに對しても强硬に出ることもできないで、大英帝國も崩壞の兆を現はしてゐる。北米でさへ百萬の失業者があるといふから驚かされる。

產業合理化が徹底すると、三井、三菱、住友といつた財閥に小會社が附屬するから新鋭の機械で失業者の大量生產をやる、何よりも先づ失業者を除くのが腹心の病を去ることである。

櫻も咲いた、復興祭過ぎても東京は賑やかである。私は今、帝國ホテルの一室でこの文を書いてゐる。

女浪人隨筆

るが、窓からみると橋も道路も美しくなつたが、そこを通るのは失業者ではないか、明るく清き都會は橋も道路も美しくするより前に失業者を掃除せねばならぬ、道路の復興より財布の復興である。

D世界浪遊浪筆

1　日本よ、さらば

汎太平洋婦人會議に臨んで、ハワイから日本を顧みた時には、太平洋上に於ける日本の位置がはつきりと見えた。歐洲からみたら、世界の日本が明かに見られるであらうと思ふ。日本にゐて日本が見えないのは、富士に登つて富士が見えないと同じであらう。

私は婦人參政同盟から推されて、萬國婦人參政權大會に臨むべくベルリンへ赴くのである。そこから國際的の日本を握んで、評論の基礎を得たいと思ふ。革命不徹底といはれながら新憲法の精神によつて進んで行くドイツは偉大なる將來を持つ、ドイツ魂と大和魂とは幾分共通した點がある。ドイツ魂は戰敗の洗禮をうけて更生した。そこから日本國内の事情をみたら悲しい政情が涙なくして眼にうつらないであらうか。けれども私はたゞ悲しんでばかりはゐられない。世界の姉妹と提携してこれが對策を講じなければならぬ。

日本政府の婦人觀念は、極めて時代おくれであり、議會の婦人參政權の取扱ひぶりは甚だ嘲弄的であつた。普選又は婦選と大選擧區制とは理想として不可離のものである。制限選擧に小選擧區は附きものである。政府が小選擧區制に贊成して婦選に反對するのは譯がわかつてゐるが、小選擧區制に贊

成するものが適當な時期を待つて、政府案として婦人公民權案を提出するといふのは心にもない一時のがれの詭辨である。地方制度改正案から婦人公民權を拔いたのは自動車からタイヤを取り去つたやうなものである。それが正しい道を滑かに走るものとは思へない。

2　萬國婦人參政權大會へ

一

私は婦人參政同盟を代表して、ベルリンで開かれる萬國婦人參政權大會に臨み、さらにプラーグの國際平和自由婦人聯盟大會へ出掛けることになつた。これを書き殘して近く日本を離れる。

ロシアが共產國となつて賣込み先を失ひ、支那が列强並みに、自給自足を唱へ出したから商賣がしにくゝなつたが、この方がまだ買ひさうな見込があるといふので資本國があつかましく入り込んだ。ピストルでソロバンを彈く商人の常として、大砲の筒先を向けて貿易の繁昌を求めるから、物騷性が私たちの近くに濃厚になつた。覺醒しかけた支那婦人は、戰爭の舞臺に國土を無料で提供するのは困ると叫び出した。

外交官はダンスしながらスパイをやる。餘技としては條約を締結することが上手だが、それを破棄することは更に上手だ。不戰條約でも成立の討議には、時日を要するが、それを打ちこはすのは一片の紙で足る。いま喧嘩の可能性をもつてゐるのは、二大アングロサクソン國の對立である。

血は水より濃いといふのも外交の辭令になつてしまつた。同種同文といひながら出兵と排日とを交換してゐるのと外交に東西はない。

支那問題は日英米のジャンケンである。幸にあひこが續いてゐる。滿洲でも日露支の藤八拳である勝負がつかない間が陰性戰爭であるが、いまにどれかゞ勝つたなら、その時には陽性喧嘩が初まる。英國はシンガポールにたん瘤をつけた。米國は金メッキの裝飾軍艦をつくつた。英米の婦人たちは男性の向うみずを押へるに努力してゐる。貧乏多兵國に生れた私たちも默つてはゐられない。だが參政權がない。彼女らと提携して平和に盡くすことができない。婦人公民權でさへ、議會で皺くちやになつた。

汎太平洋婦人會議でも、强國の婦人たちが投票によつて太平洋の平和を確保しようと叫んだ。だが私たち日本代表だけは默つてうつむいてゐた。てれくさかつた。

フーヴァー氏を助けて、酒のみ黨に三斗の冷水を浴せたのはアメリカ婦人であつた。國外のことにのほせてゐる政黨を實生活に引きもどして、政綱を書き換へさせたのはイギリス婦人である。議會政

治の先進國である英國婦人が投票紙に、まさか再び上海へ出兵せよてな意思表示もすまい。

レーニンの「資本主義の階梯となる帝國主義」をプロマイドすれば戰爭の大寫しにあり〳〵と映る大戰爭近しと叫ぶものはある。けれども戰爭なしと斷言するものはない。暗夜に覆面の怪漢がそろそろ忍び寄つてくるといふ危惧がある。

何のために戰爭をするのか、金まうけのためか、ドイツも、フランスも、勝つた方も、負けた方も大損をしてゐる。愉快なためか、人を殺し人を殺されては鬼だつて澁面する。勝つても領土擴張はできない時代に何のために戰爭をするか、勢で戰爭する。はずみで戰爭する。取あへず戰爭する。そんな變な戰爭の仕方があるものですか。

軍國主義の國ほど、婦人に參政權を與へることを惜しむ、熱の不足とか、時機尙早とか、政治教育の不徹底といつたやうなことをもつて、參政權を拒否することは卑怯な男性の詭辨であつて、その眞意は別にある。

婦人には天賦の平和性があるから、彼女らに投票權を與へるにおいては、戰爭はできないと重工業資本家の欺瞞にかゝつて、狐につかれ、戰爭の亡靈に憑かれて、自給自足で關稅を高め、高價な生活をする。物價は高くなる。貿易は逆潮になる、失業は續出する、勞資が軋り合ふ、私たちは戰爭狂のためにこの過勞を引きうけさせられることに異議がある。生產と消費とのバランスを失ふから、海外の市場を爭奪してそこで戰爭がはじまる、今日の密偵外交は戰爭を手招きする。

男性のみの政治は、殺伐になつていつも假想敵國をつくつて、自己脅威に落ちてゐる。後期資本主義は人間を變質する。この男性心理は日本ばかりの特有ではない。近所にも遠いところにもある。科學の發達は物資を建設して精神を破壞する。このまゝに棄てゝおけないといふところに私たち婦人參政の熱望がある。

二

近代思潮の流れは、婦人のみをよけて流れなかつた。婦人參政の機運は刻々に近づいて、既成政黨もこれを阻止する口實に窮してきた。家庭に閉ぢられて剝製人形となつてゐた婦人も、生氣を吹き込まれて動き出した。その動きはイギリスにおける運動のやうに猛烈なものではないが、温和ながら力强きものである。

婦人を除外した普選で、國民總意の反映などとはいゝ氣なものだ。婦人を乞食や破產者と一とからげにして、車の外に投げ出して泥だらけの道を無見當に走つてゐる。それ衝突だ。それパンクだと。日本をどこへ持つて行かうといふのであらうか。そこは煉瓦塀だ、行き詰つてゐる。

近代立法觀念は、婦人に理解が深い。革命不徹底といはれるドイツの憲法でも、米、露、チエツコスロバキアその他における法律でも、決して男子の專制を許さない。イギリスの選擧法、アメリカ、ロシアの婚姻法のごとき、男子同等もしくはそれ以上の權利を婦人に與へてゐる。省みて日本の事情は舊態依然として、法律も、家庭も、習慣も、道德も、周圍の狀況すべて婦人に宜しからず。私たち日本婦人はこんな嫌な手かせ足かせを外すこともできないまゝ、不自由人の見本となつて、國際平和自由婦人聯盟の大會へ出かけて行くのである。

婦人公民權でさへ議會で翻弄され、欺かれ、辱しめられ、私たち婦人運動者にどれだけの失望を與へたことか。

私たちが肩身狹く出かけるについては、男性の專制が怨めしくなるのだが、今さら繰りかへしても婦人の愚痴に過ぎない。私は決然として行く。そして率直に討議する。

世界婦人の會合は、いつも「平和」が協議題である。私たちの希望は表裏がない。外交的駈引はない。縱斷的には日本の政治を實生活の軌道に載せ、橫斷的には萬國の婦人と手を握つて、男性の密偵外交を牽制する。たゞそれだけで平和を確保するに十分である。

平和を基礎として、消費經濟を料理して行くことは、日本婦人得意の壇場である。一家の經濟は一村一國の經濟に演繹せらるべきものである。もし日本に婦選が許されるならば、好戰國として誤解せられてゐる日本のスキツチを切つて、暗い極東の空から明るい外光の光を放つことができることを期待し得られる。憎惡と畏怖とから生ずる排日も、發生する濁水を失ふであらう。對米抗議も對支出兵もいらぬ。私たち女浪人は、漫畫子の材料になりながら漸次に地步を占めてきた。もう一ときばりである。

私たちは外交官の職業的外交には懲々した。資本國の外交折衝は無聲の砲彈交換である。外交と戰爭とは五十步五十步であつて、五十步百步ではない。國の外交は先づ純眞な人間に還元して、それから婦人を加へて更めて一步を踏み出す必要がある。

遠慮は常のこと、私はいま千里の旅に上らうとする。別れに際して謙讓を裝はなかつた失態の責は私の甘受するところである。

3　歐洲の婦人生活

日本の婦人は病人のやうだ、皮膚に色があるところへ、お白粉と頰紅とを濃く塗るから血色がいゝのか、惡いのかはわからぬが、默つて物に脅えるやうにしてゐるところは、どうしても病人だとは惡

る口が過ぎてゐるが、いやさうではない。歐洲人の皮膚の色は白銅だが日本人は黄金だ、貞淑でつゝましいから默つてゐるが、沈默は黄金だ、その擧動をみてゐると靜に大地を踏んで、伏目勝ちに歩いてゐるところに哲人の面影があるとは、少々買ひかぶつた嘆美である。

日本の女は恐ろしく無口である、一ケ月も口を利かない婦人があるといつて驚いた英人もあつたがそれは無いことでもない。東洋人の癖として、家庭やお友だちの前ではよくしやべるが公會の席上で意見を述べることをしない、意見がないかといふにさうでもない、白人の前へ出たら體の小さいのと皮膚の色の白くないのとに遠慮して、餘り口をきかない、英語が下手だからといふ謙遜もあらうが、日本人は謙遜過ぎて却つて無禮に近い。どうせ日本人だから、英國人のやうに英語を話せないのは分り切つてゐる。それを厚かましくしやべつてゐるうちに上手になる、その國人のやうに、その國語を話せないからといつて他國人は恥る必要はない。イギリス婦人なんかは笑ふどころではなく、汽車中でも親切に教へてくれる、それを恥るから一ケ月も默つてゐなければならぬ。從つて外國へ視察にきた目的を失つて能率が擧らない。こちらから話しかけたら喜んで話をする、時としては次のやうな氣焰を聞かされる。

智と力とは兩立しない、馬鹿の大力といふことはあつても、智者の大力といふことはない。婦人には力がない、その代り神が智を與へた、それが今まで力に掩はれて、埋藏されて、世に出る機會がなかつたが、今日では力の時代が行き詰つて、女の働きを要求する時代になつてきた。力の强い男性が權力を持つてゐるのは野蠻時代の惰力である、力の極致は人を殺すことであり、智の終局は人を幸福ならしめる理想鄕の建設にある。だから智者は力を卑む。

これは英國婦人の口癖である。けれども婦人時代に到着するには、まだ餘ほどの距離があるやうだ私は世界周遊中にみてきた歐洲の婦人狀態を少し書いてみやう。

イタリーにはファシスチ婦人團五萬の會員が、黑シャツで働いてゐる。たとひ反動にもせよ、政治的に主張があつて生々としてゐる、そんな婦人がある半面には、黑い布を頭からかぶつて昔の姿をしてゐる婦人を街頭にみかける、この守舊派は外觀からではあるが、智識が發達してゐるものとは見えない。

日本人ならむろん赤帽を傭ふであらうところを、汽車の昇降にもドイツ婦人は、大きな荷物を提げてゐる、ポーランドからドイツへ行く汽車の中から、鍬を持つて野良仕事をしてゐる婦人をみる。花壇のやうに美しい農園は彼女らの努力で作られてゐる。節儉と勤勉とはドイツ婦人の特徴であつて、都會では職業婦人が男子を壓する活躍をしてゐる。

ロシヤでは母子保護法、結婚法、婦人參政などの立法は行き屆いてゐるが、街頭で婦人の筋肉勞働者の痛々しい狀態をみることができる。髪は亂れ體は垢づき、性業婦人の外にお化粧してゐるものはない。裸足のまゝ年頃の娘が働いてゐるのは氣の毒だが、共產黨は支柱として三十萬の婦人團體を持つてゐる。彼女らは主義に忠實なること男子より以上だといはれた。

建物が詰つて庭がない上に、アパート又はアチツク生活が多いため、洗濯場も物干し場もないから中流以下の主婦は市營洗濯場へ出かけて洗濯をする。むづかしい洗濯は洗濯屋にいひ付けるが、イギリスでは女子は十歳から、家庭でも、學校でも、洗濯法を敎へる。セントラル・スクールでは最初の二年は普通學で（外國語はフランス語）三年と四年とで職業敎育を授けるが、女子はタイプライター科でも、染色科でも裁縫と洗濯とは必習科目とせられてゐる。清潔といふことをやかましくいふ習慣づけられてゐるから、洗濯はなか〳〵上手である。

洗濯場へは籠の中へ汚れた着ものを入れて集つてくる。使用料は一時間が日本貨で八錢となつてゐるが、設備がよくて快よい、洗濯したものは日光に干すのではなくして乾燥室へ入れて一休してゐるうちに乾いてしまふから、濡れたものを持つて歸へるには及ばない。

主婦はなか〳〵家庭經濟に敏感で、市場でも暴利を貪れば婦人團が承知しない。理由なくして値上げをすれば大騒動となる。ロンドンの物價の安いのは婦人團の力であるといはれてゐる。

英國の男は不活潑で、動きぶりも鈍いが、婦人は勢ひよく働く。オーケストラのバンドでも、官廳の事務でも、商店の販賣でも、學校の敎育でも、大てい女軍に占領せられてゐる。男よりは職務に對して注意が細心で責任感が强い。

ピカデリー・サーカスから、リゼント、オツクスフオードまで百貨店が十四五軒もある。それが殆んど婦人の力で經營されてゐる。

英國の百貨店は、靴下部とか、帽子部とかに室を仕切つて、そこでゆつくり買ものをするやうになつて日本のやうにアメリカ式ではない。日本の百貨店で少し垢ぬけのしたものは、ロンドンとか、パリーのマークがある。帽子でも、靴でも、香水ふきでも、化粧ケースでも歐洲へ行けばどんなに珍らしいものがあるであらうと思ふが、さて土產ものを搜してみれば中々見つからない。珍らしいと思ふものは大てい日本へ行つてゐる、けれども陳列が上手であるため買手の眼を眩惑する。パリーが一ばん華美で、ロンドンは實用的で、ベルリンは地味である。

ベルリンにゐる日本人は、留學生と研究家とが多いから、大ていは學士である、日本の秀才だといふので割合に尊敬せられて、下宿屋でも東洋人として毛嫌ひされない。色の白いユダヤ人よりは優待

されてゐる。日本留學生などが歐洲婦人と戀愛關係に入ると、ドイツ人は戀愛に對して眞劍であるから男の方から結婚を申し込むことを要求する。日本人の惡い癖として一時限りの慰藉物として誘惑したものは跡の仕末に當惑する。だませる限りだまして置いて、いよ〳〵の時に婚約不履行の訴を起されさうになつたら所持品を下宿屋に棄てたまゝ逃げて歸る。

さういふ不德行爲も、パリーあたりの性業婦人を相手なら笑つても濟むが、まじめなドイツ婦人に對して繰返されるから、日本男性の貞操上の信用を失つて、文明といつても日本は矢張りアジアの國だといふ冷罵をうける。

ベルンに萬國郵便條約の紀念碑があつて、四人の男女の像が萬國を代表してゐる、東洋を代表してゐるのは日本人であるのはうれしいが。下着に細帶のだらしない花魁姿である。この碑は古いものだが今日でも日本の婦人には智識が淺く、智識階級の人でも日本の淑女と藝者ガールとを混同してゐるやうな場合もある。

新聞の案内欄に、毎日何十となく踊子募集の廣告が出てゐるが、なぜそんなに澤山な踊子が入用なのかといふに、彼女らは結婚を促進させるため、男子と交際の機會を得やうとして踊子となる、愛の對照者を得たならば早速主婦となつて家庭へ引きさがる。その補充はダンス學校から大量製産されるがそれでも不足なのである。ダンス場における惡い風儀が家庭へ擴がつて行く、パリーなどは外國人を遊ばせるところで、夏になればアメリカ人の渦が卷く、南歐も、北歐も、東洋からも、アフリカからもくる。みな歡樂が目的であるから混血兒が多く、オペラ劇場一たいの歡樂境は婦人の墮落を基礎として建設されてゐる。

踊子の給料はその生活費の二割にも足らぬ、勢ひ日本の妾にもあるやうに月額いくらといふ手當を受けてゐるものが多い。自分の給料の六割を割いて踊子に貢いでゐる男もある。自分の生活を女のために犧牲として詰らないとも思はぬ男性心理には驚かされる。時としては番頭が主人の金を私消して刑務所に引かれることもある。踊子ばかりではない、性業婦人はいろ〳〵に姿を換へて風紀を亂してゐる。案内者、秘書、マッサーヂ、散髮屋の別室で男の美容をするものなどが活躍する。戰後の歐洲はかくして淫猥腐爛の國へ引きづられて行く。

4　パリー女

パリー女と見出しをつけて書き出せば、例の淫蕩な女を中心として、魔窟の神秘を棒大にして奇拔な嘘を交ぜて、男性意識の挑撥をたくらむものと先入感をもつて、この文を讀むお方には豫期を裏切

つて、お氣の毒ながらパリー女にあつて、日本女にないといふやうな珍らしいものは少い。何でも珍らしいものを讀みたいといふ感念が、何でも珍らしいものを書きたいといふ邪念と行き合つて欺まされる。要するに女の性格動作は世界共通であつて、たゞその姿態形式が國風によつて少しづゝちがふ位のものである。

これはパリーのことを書いたのではなくして、日本の女を書いたものではないかと思はれるほどこの文は僞つてゐない。パリー女は東京女とは距離のある特異性をもつてゐるものと思つたが、その實はよく似た點ばかりを發見する。日本の維新前とパリーの廿一世紀とを比較したやうな話が日本で話されてゐるが、日本が歐洲の眞似をすることが上手になつたから、從つてパリー東京兩都の女は相近づいてきたものと思ふ。

パリー婦人は教育の程度が高く、上流の家庭では極めて嚴格に仕込まれてゐる。お母さん監視の眼は一分間も未婚の娘から離れない。たとひ若い男とテニスをやつてゐる時でも、木陰のベンチに腰かけて注視してゐるお母さんがある。だから歐洲で處女を求めるならパリーに限る。中流どころでは下女がないから裁縫、洗濯、料理、市場への買ひ出し、妹や弟の世話に追はれてなか〳〵忙しい。家庭の組織にもよるであらうが、イギリス婦人の呑氣に暮してゐるのと對照して、フランス婦人の忙しく立働いてゐる姿が氣の毒に眺められる。

無產階級になれば、娘時代に朝から晩まで家庭で働きつめてゐるから、オペラを見たことのないものさへある。フランス婦人の勞銀は非常に安く、工場でこそ時間制はあるが家庭では家族に時間制がないから、身を粉にするところまで働いて、お化粧の暇さへない。青春時代を垢だらけに暮し、お嫁入りしてからも働き、働くためにこの世に生れてきたやうなものである。

フランスへきたら、婦人はモダンばかりかといふに、全くさうではない。シャンゼリゼーを散歩したり、オペラを觀に行く人だけは盛裝してゐるが、その外ではじみな世帶じみた姿である。

パリー女は娘時代には品行は正しい。イギリスよりも、ドイツよりも正しいが、放埒は結婚後に始まる、處女をさゝげた良人だけを守つてはゐない。フランス紳士は妻の外に親密な女の友だちを持つことを好む、フランスの男が兒を愛しない原因はこゝにあると思ふ。

けれどもそれは上流の家庭で、ドアを閉めたら絕對に秘密を守れる妻と、郊外のホテルへ自動車を横付けにする餘裕のある人に限られて、貧しい妻はそんな淫蕩なまねはできない。特に娘時代に性的遊戯に耽るといふやうなことは不良少女の外にあり得ない。

ロンドンの女は色が白くて、痩せぎすで、面長で、眼が濁つて、無口で、ホテルの女給仕（バーメード）でも紺サーヂの服に白いエプロンかけて、どことなく京都の女に似て美しくとも愛嬌に乏しい。パリーの女は意氣でスマートで、さつぱりとした點が東京ものに類してゐる。イギリス女は時としては怒るが、パリー女は絹靴下に泥をはねられた時の外は怒らない。

日本人の男が、パリー女を手に入れたといつて自慢してゐるものがある。その女は白人にちがひはなくとも純パリー女ではない。日本人の對照物となるものはきまつてユダヤ系の女である。純パリー女ときては同じ白人でも南歐人さへ差別をする、チェッコ・スロバキアもロシヤ人でさへ嫌ふ、まして印度、支那日本、黑人といつた肌ざわりの惡い有色人を好くはずはない。パリー女は高山植物のやうに高いところに美しく咲いてゐる。

日本人の脚は、馬のやうによく曲るからダンスをしてもくの字なりに脚がもつれる。爪の掃除が汚ないから握手しても氣持ちが惡い。ユダヤの男は財力においても、智力においても、傑出してゐるものがあつて、相當の社會的地位を得てゐるが、ユダヤの婦人は非常に擯斥されてゐる、東洋人の眼からは區別が付かなくとも、歐洲人からみれば、いくらパリー風をしてゐても一見してユダヤ人たることのと見別けがつく。差別つけられたジューの女とジャップの男とは、嫌がられ同志の情意投合は時としては、眼の玉の碧い日本人第二世を產む、その女は大てい下宿の女中であり、時としては踊り子もある。

二

ダンス學校の初等科を出て、ろくに脚なみも揃はないやうな、ワンステップ女史でも後援者は週に日本貨五十圓を惜まないが、ロンドンへ行けば、高等科出の上級踊子でもそれだけの手當で十分であるほど物價が安い。これは一般の貞操相場だが、彼女らは多くアパートに住んで、時としては故鄕の母親に送金するものもある。女事務員になつて一週二十圓だから收入としては惡い方ではないが、それでも一人の後援者を操守してゐるやうなものはないことは、日本の藝妓ガールより甚だしい。彼女らの墮落の逕路は珍らしい筋書があるのではない。彼女らの生娘時代に、時としてはオペラ街あたりを散步して、美しく飾つた性業婦人を見たであらう、リッチャ街のフォーリー・ベルゼールとかキャブュシネスのオリンピヤなどで、美しくお化粧した踊子が、多くの男性に圍まれて拍手と嘆美との間に生きてゐる話を聞いたであらう。らくして美しく暮してゐることを羨む心を起した時は、すでに墮落の谷へ一歩を踏み入れた時である。

ルイ・ド・ペイ街などで、贅澤なものを賣つてゐる飾窓の前に、物ほしさうに立つてゐる女は何時

でも、誘惑の巨口に飛びこんで行く素質をもつてゐる。ベルリン女は男を戀ふ、パリー女は金を戀ふ金を戀ふ女を誘惑して生活を立てゝゐる一團の男女があつて、巧みに機會を捉へて、彼女の側へ寄つて口說きつける、その人買ひの辯口を一蹴するだけの愚慮があれば、事はそれまでゞあるが、恐らくは若き娘は張られた網から脫け出すだけの大膽さはあるまい。網にかゝつたものは下等なら醜業婦、うまく行つて踊り子になるが、踊り子となつて假令ひ夕方から朝まで踊り拔いても、下宿の部屋代に過ぎない收入である、どうして生活するか、どうしても生活し得られる貸借對照表を持たないところが新らしい魔の狙ひどころである、かくて彼女らは、生活に窮すべきはずのものが、窮しないどころか彼女らは自用自動車をさへ持つてゐる。刺繍のある着物は毎日取替へられる。

服裝の變遷は妙なものだ、上古の人間はすべて裸體であつて、それから腰部にだけ葉とか布とかを纏つたものが、だん〳〵重くるしい着ものになつて、スカートの裾の周圍が三マイルといつたやうな廣いものが流行したことさへある。毛皮から木綿に、木綿から毛織に、絹ものに進んできて、長いものから短いものに、流行が轉々するたびに贅澤になつて今では又た昔の裸に退化した。パリーの踊りは裸である、一尺の布さへ纏はない自然美を現はしたのもある、時として美しい榮えた衣裳を着て舞臺に現はれることもあるが、それが却つて醜いものとされて、五萬フランの黃金ドレスよりも裸の方が美しいといはれては人工美の極度は、天然姿に征服されたものである。

モンマートルには、ボヘミヤ人の集團がある。そこの廣場には朝早くからボヘミヤ風俗をした後姿のいゝ若い婦人が、ベンチに腰かけて身體を露出して、夏などは殆んど衣服を着けないで何人かを待つてゐる。何を待つてゐるのか、彼女はモデルの女である、美術家がきてその中から氣に入つたものをつれて歸る、裸婦市場であること日本の勞働紹介所でみる光景である。

さうした女がパリーに渦卷いてゐるが、それはみな他國人であつて、パリー女ではない。「パリー女」と「パリーの女」とは「の」の字が一つ挿まつてゐるところに區別がある。「東京にゐる女」と「江戸ッ兒」との間に相違があるやうなもので、東京にも性業婦人は多いが、東京生れの女が少いやうに、パリーに女は多くともその中から「パリー女」をみつけ出すには骨が折れるといふのは、外國人が遊びに集る淫樂境には決してパリー女はゐない。けれども時代は少し變りかけてゐる。

パリーは淫蕩の巷といはれるが、それは性業機關の集つてゐる一區劃に過ぎない。ほんとうのパリー婦人はそんなところへ足踏みもしないで、家庭に煤ぼつて働いてゐるはずだが、この頃は生活難から働かねばならぬ。働くに職業がない、あつても收入が少いから婦人の職業として音樂と、舞踏とに進出して、外國人相手に性業に近い仕事に就くやうになり、淫蕩の風が普遍的になりかけた、これは

フランス婦人に取つて戰爭以上に恐ろしいものである。どうしても東洋からきた旅の女の眼から、フランス婦人がまじめだと思へないことは母性味のないことである。婦人のまじめは母性愛に立脚すべきはずではなかつたか。

5　踊子の支拂係

午後の百貨店（マガザン）に行けば、踊子が支拂ひ係をつれていろ〳〵の買物をしてゐるのを見るであらう。踊子には支拂係がある。どんな醜い踊子でも專屬の支拂係を、二人や三人は持つてゐる。さうでなくては生活費に足らぬ給料だけでは美しい衣裳や、光つた寶石がどうして彼女の身を飾ることができやう。今頸飾りを買つてゐる彼女の後に、嬉しさうに男が立つて支拂ひの時がくるのを待つてゐる。

ゆふべ彼女はシャンゼリゼーのマリニー座で、濃艶な肉體を露出して踊つたであらう。踊りが濟むのを待つて、アメリカからきた男も、イギリスからきた男も、彼女の部屋をたづねて。たゞ一言でも話しをすることを、この上もない榮譽と感じたであらう。その中でも自動車に同乘して彼女をカーノット通りの裏街の家に送りとゞけた幸福な男があつたにちがひない。

自動車は、磨かれた鏡のやうな途を、音もなく辷つて淋しい裏町のアパートへ、彼女と彼女を送る支拂係とを運んだであらう。そして車中で次のやうな話が出たにちがひない。

「明日はどこかへお伴をしたいのですが、御都合はいかゞでしやう」と男は恐る〳〵彼女の美しい横顔をみながら尋ねたであらう、次に彼女の口から出る承知か不承知か〳〵、男の運命を定める二つに一つの返事である。「頸飾りを買ひに行かうと思つてゐる」と答があつたら、男は「マガザン・デュ・ブランタンにいゝのがあります」とパリー第一の百貨店を卽座に引つぱり出して、すぐすかさず「では明朝の十時にお迎へにまゐりましやう」といつたであらう。「十時では早やすぎるから十三時にしてください」といつたであらう。十三時とは午後一時のことである。男はその幸福を感謝して、その晩は彼女の家の入口で別れを告げたであらう。

それで男は完全に、支拂係となつたのである。一流の踊子と懇意になるまでは千ドル使つて、支拂係になつてから五千ドルを使ひ、後援者となつてから、毎月二千ドルの手當を拂はねばならぬ。ヤンキーも田舍大盡として扱はれるだけで、パリーの踊子はアメリカ人を好かないお客と見さげてゐる。

約束の時間には一秒も違へず、踊る胸を撫でゝ、さするやうに女の部屋をノックするであらう。スターヂの華やかさに似合はないむさくろしいアパートの隅から、孔雀のやうな踊子が現はれるのである。

男は時を違へなくとも、女は必らず約束の時間を守らぬ。その時分にはまだ寢てゐるのである、燃え立つ緋色の羽根蒲團がベットに敷かれて、夜の女王は取り亂した姿で寢てゐるであらう光景を、板一重こちらで男は音を立てないやうに入口に待つであらう。一時間ばかりして女は眼覺め、それから二時間もかゝつてお化粧ができるまで、男は番犬のやうに戸口を守つて佇んでゐたであらう。

百貨店の頸飾り部で買ものをするまで容易ならぬ忍耐を嘗めた。

「これがいゝでしやうか」と女は眞珠の頸飾を取りあげた、それには二千フランと正札がついてゐるのだ。「それは高過ぎる」といつたが最後で、支拂係は免職となるのだ。心ではそれは高過ぎると思つてゐても口では「もつといゝものをお買ひなさい、そんなものが貴女の體につけられますか」といつて、女店員とともに口を合はせて、もつと上等のものをすゝめねばならぬ。「だつて、そんな高いものは氣の毒だわ」と女はいふであらうが、もうその時は、遲滯なく支拂係の手から札びらが女店員に支拂はれるのである。

「貴郎は親切です、妾は貴郎を愛します」といふ一言で、三千フランの買物と交換されるのである。歸りには又た自動車に同乘の榮を得た支拂係は、エスパノールのスペイン料理か、タルクのトルク料理を誘ふであらう。パリー料理では彼女が飽いてゐることを知つてゐるからである。レストランの入口では機敏に、女の外套を脫がせてやつて、化粧ケースを受取るであらう。女が好きな席に腰かけると男は女の好みを推量して、スタンドへ行つてパパーミントや、キュラソーのやうな旨い酒のカクテルのグラスを持つてきて女にすゝめる。次に自分の飲料であるウヰスキーの一杯を運ぶであらう。ここで女と語る一時が百貨店で支拂つた三千フランを償うて餘りがある。花やかな電燈の下でステーヂに立つた時こそ女は美しいが、近よつて晝の女の顏をみたら、別にさほどの美しさはないものである。有りふれた十人並み以下の容貌ではあるが、昨夜の美しさが眼について、今わが前に坐つてゐる女の醜い點を掩ひかくしてゐるのである。男は確に眼を誤らされてゐるのである。

やがて女は、肉づきの豐かな腕をさし延べるであらう、男は機轉よくその腕時計をみて、もうオペラへ出勤の時がきたことを覺つて、支拂を濟ませるとともにハイヤーを呼ぶであらう。

二人が乘りつけた時分には、シャンゼリゼーに灯がついて、オペラの前は華やかな夜の氣分が漂つてゐる。美しい踊子に陪乘した男は、得意になつて劇場の裏口に車を着けるであらう、そこには踊子の出勤をみやうとして群がつてゐる千人の男は、支拂係のヤンキーを羨むのである。

けれども「左樣なら」といつて、彼女が樂屋の入口に消えたあとの支拂係は、空になつた財布を押へて幻滅を感じるであらうが、氣を取りなほして、又た自動車に乘つて歸りを急ぐ、ホテルへ歸つて

正裝してから、再びオペラ見物に出かける爲であらう。

6　時計のロンドン

ロンドンは時計だらけの都市である。お寺の堵にも國會議事堂にも、役所にも、紀念碑にも、ビルヂングにも大時計が肩に擔はれてゐる。ポケットにも、腕にも、舊式の石炭ストーブのマントルピースにも、セキスピアとカーライルの全集をつめた書棚の上にもケチ〳〵やつてゐる。時計の針の刻む音に歩調を合せて人間が動いてゐる。執務も、遊戯も、食事も、休息も時計の命ずるまゝ一秒をもちがへず人間が時計に引きづられてゐる。

パリーは鏡だらけの都市である。百貨店でも、小賣店でも、レストランでも、どちらを向いても自分の姿がうつゝてゐる。店が廣くみえて、自分の分身が三つにも、四つにもなつて動く、めかしやのパリー人を引きつけるのは鏡を澤山につかふことである。お化粧部屋にも、机の上にも、ポケットにも、オペラバッグにも鏡がある。汽車の中にも自動車の中にもあるから移動中でも形と影とが相伴ふ

お役所でも、銀行會社でも、正午から二時まで休む。休み時間は入口をしめて六時まで事務を執る百貨店でも正午になればお客を追ひ出して、一時か一時半に又た店をあけるから、朝と晝との二回營業だ、しまひのベルが鳴つたらお客は飛び出す。始めのベルが鳴つたらお客が飛び込む、これでは時計は必要だ。

アメリカの買物は埒が早いが、フランス人は、帽子でも、カバンでも、衣服や顔との色彩調和を考へるから好みがとてもむづかしい。帽子を買うにしても、家にあるどのドレスと調和するか、パラソルを買うにもどの帽子を着た時にこの傘がよくうつるか、といふやうなことに頭を惱ます。自分一人で決斷のつかない時は友だちに相談する。これでは鏡が必要だ。

だから百貨店で、買戻しの多いのに困つてゐる。一たん買つて歸つたが、どうも調和が惡いから代へてくれとか、品物を買戻してくれとかいふので店員は困つてゐる。

時計の本場であるスキスは、小賣店でもお晝に二時間の休息をする。ベルリンには正午の休みのない店もあるるが、一般に食事の時間に店を閉ぢるから食堂は割に振はない。

勤務者の休日と、出勤時間とが商店の營業時間とかち合つてゐるから俸給生活者は買物に出かけるわけに行かない。だから買物は大抵婦人の手でなされる、男の姿は百貨店で殆んど見掛けない。

アメリカ式に、ショーウキンド戰が激しい、道路でさへ鏡のやうに磨かれてゐるところだ、飾窓は硝子の上質を藥品で拭き込んであるから、眼と商品との間に何の障壁をも感じない。ショーウキンド

は食物を要しない、給料を要しない、ストライキも、サボもやらないで、夜中でも休日でも勤務時間なく、休息時間なく、客を引いてくれる忠實な自動店員である。婦人はショーウヰンドを片つ端からのぞいて廻るのが道樂の一つで、それが都市景物の趣を添へてゐる。

小賣の先頭を切るものがショーウヰンドで、第二陣は女賣子である。無愛想といはれるベルリンの女賣子でも人をそらさぬ、迎へて「いらつしやい」賣つて「ありがたう」送つて「さようなら」をいつても舌先ばかりのお世辭のやうではない。眼をそらして、お題目のやうに唱へては、何の愛嬌を感じないが、心から響きが出るやうに思はせるところに、お世辭の價値がある。ホテルを出る時も、船に乘る時も、グッドラッキーをいふ給仕は何だか心の底から別れを惜む眞情があつて、さすらひの旅客の心臓に強く響く。

ロンドンの買物はとてもうるさい。朝ならお早うの挨拶から初めて「どうぞこれをください」と言葉數多くいつて歸りには「ありがたう」とお客からお世辭をいふ。これが禮儀なら、アメリカ人はなるほど禮儀を知らぬ。買う方がプリース、賣る方がサンキュー、プリースで金を出し、サンキューで品物を渡す。貿易交換挨拶取引である。

小賣店でも、暫く立つて品物をみてゐると女賣子がきて說明をする。ロンドンの商店は說明の必要があるのだ、といふのはアメリカ式に品物を店頭へ出さないで、紙函に入れて片付けてあるから、どんな品物がどれだけあるか說明を聞かないではわからない。

女賣子の給料は、一週日本貨十五圓だが、その外に歩合收入がある。叮嚀だが氣の利きがないロンドンから、パリーへ渡つた時に、女店員の愛嬌のあるのに驚く、ベルリンのは口數は少いが、言ふことがお客の思ふ壺に一々命中する。

ホテルや盛り場の贅澤さは、アメリカ人を筆頭として、各國から集つた人たちの濫費のために、花のパリーに花を咲かせてゐるが。ほんとうのパリー人ときたら、上品といふのかケチなといふのか、中流家庭は節儉を通り越して、あれでは生活の樂みがどこにあると思はれるほどの節約である。戰後は收入が少いから、支出も切りつめねばならぬであらうが、電燈でも一室に一燈をつけて、次の部屋でもその餘光で裁縫なんかをしてゐる。燃料でも粉炭や褐炭で間に合はせる。牛肉でも極めて惡いところを買つてきてコロッケや、ミンチボールなどにつくる。フランス婦人は料理が上手ならこそ喰べられるのだが、鷄肉は一週に一度ぐらい、洗濯は殆んど洗濯屋へ出さない、何でも支出することを避けて、しかも廢物をつかふから主婦の用事は非常に多い。從つてアメリカやドイツの主婦ほど讀書の時間をもたない。

バリーに花を咲かすのは性業婦人で、主婦は氣の毒なほど煤ぶつてゐる。

7　蕃女探險

一

話はトロ・ガールから始まる。

臺灣で汽車の通はぬところに、トロがある。トロの通はぬところは毒蛇が通ふ。蛇の通ふところなら蕃人も通ふ。どんな崖でも谷でも橋もいらねば路もいらぬ。

トロは臺灣で臺車といふ。女の纏足がとれてから、女性は職業に進出した。職業婦人はすくないが勞働婦人は三萬人といふ大數に達した。トロ・ガールもその數の中に入つてゐる。

覆ひもなく、手すりもない半坪ほどの臺の上へ、蓆を敷いてお客が坐はると、後からトロ・ガールが押してくれる。降り坂になると、力を出して一と押し押しておいて、ガール自身も身を翻してそれに飛び乘るのであるが、臺車は惰力で風を切つて、輕便レールの上を身振ひしながら飛んで行く。鐵線橋が千尺の谷にかゝつてゐる。その上を左に搖れ、右に搖れ上下搖れて走る時は、機械に故障のあるエレベータアを横に飛ばした氣持ちである。どんな氣持ちつて？何の痛快なことがありませう。恐怖を通り越して、觀念の眼をつむつて、臺にしがみついてゐるだけのことである。

レールの盡きたところに、警官屯所がある。そこで入山證をみせて、それから蕃地に入り込むのであるが、こゝは暗室の入口である。明治二十八年に臺灣が日本の領土になつてから、蕃人の首狩り（出草）のために頸を斬られたものが、内地人だけでも六千九百二十二人、それに同種族仲間で首の取りやりをした數を合せると、一萬二三千といふ首が蕃社に持ち歸られたことになる。恐ろしい首斬り種族の棲んでゐるところ、通事（通辯）の話では心配することはない、この頃は蕃人も温和しくなつて、めつたに首をほしがらない。この邊は東京の郊外より安全である。と。

東京郊外の强盜殺人事件は、誇張されてこの邊に傳はつてゐるらしい。安心せよといつても、これがどうして安心出來るものか。

これから先は、森の中へ沒入するのだが、森と云つても、上野や芝公園のそれを想像してはいけない。明治神宮の大華表の柱は臺灣產、向つて右の一本は樹齡千九百五年、他の一本は千九百三年、あんな怪樹が一杯に生えて根本から五十尺で初めて枝がある。その下には栂があり、栂の下には椰子や木瓜があり、バナ、があり、大きな果物がぶら下つてゐる。果物が有り餘つてゐるこの地では、食べる氣にもなれないほどで、賣つても買手のない醜い姿のものである。人間だつて然うであるが、果物

だつて美貌、醜貌が並べば醜貌が殘る。その乂下には木苺、龍舌蘭などがあり、それが二丈の茅で覆はれてゐるから、馬上鞭を擧げて鞭影を見ない。

二

內地旅行で、熱帶地から溫帶を通つて、寒帶へ行かうとすれば、臺灣から內地を經て、樺太へ拔けたらいゝが。そん平面旅行をしないで、直角的、立體的に、屛東から新高山へ登れば、平原は熱帶で中腹は溫帶で、山上は寒帶である。少し登れば涼しくなる。臺灣の流行歌である「蕃山の娘の杵歌がすゝり泣くよでしよんがいな、新高次高、ほれ冬だ」で勢ひをつけて歩いても、恐ろしくて、すゝり泣くよな聲になる。

臺灣全島の六割は蕃地で、十三萬の蕃人がゐる。一萬尺以上の高山が四十八座、濃霧は突として眼の前から起り、渦を卷いて太陽を遮る。十年も嘉義に住んでゐてさへ、まだ新高をみたことがない人もあるが、私は嘉義着のその日から、毎日新高山頂の雪を見飽いたほど滿喫した。

薩摩諸が海上に浮いてゐるやうな臺灣の姿、その背梁を形づくつてゐる山脈は、北の三貂角から南へ向つて走り、鷲鑾鼻で盡きる。その山の中で息するも苦しいほどの空氣の稀薄なところにも、蕃人は住んでゐる。

路窮まつたやうでも、進んで行けば細い逕がある。城壘の跡は、國性爺鄭成功が力々社に金坑を掘らうとして、こゝでパイワン族の抵抗に逢つて千人の卒を亡ひ、引返したところ。臼井尻餅峠といふのは總督府が蕃人を攻めた時に、森の中から突然蕃人に挾み擊ちされて、臼井といふ巡査が尻もちをついたところ。

上には、竹鷄が痞高い聲で鳴いてゐる。路ばたには魚藤といふ毒草が綺麗な紫の花を著けてゐる。猪猫群だ！　猪が三匹、いえ猪ではない豚だ。その豚が普通の豚の定義にあてはまらない。「山に飼ひ放してある豚は猪と交尾するから强い」といふ案內者の說明振ふ。身がぶる〳〵ふるふ。

豚の耳に穴をあけて紐を通して、その紐をもつた蕃婦がくる。手拭のやうなものを肩と背中に卷つけてゐるが、お臍の見えてゐるのは千慮一失か、腰に紐を結んで、前には丈二尺巾八寸ぐらいののうれんが垂れてはあるが、後は開放されてゐる。それでいゝのか知ら。

蕃婦は內地人の男を好く、これまで、隘勇線で蕃人を防いでいた巡査、山奧で樟腦をつくつてゐた腦丁などが蕃婦をなぶることがある。蕃婦は浮氣を知らぬ、生眞面目の一本調子であるから身も心も男に捧げつくすが、內地の男は歸國する時に棄てゝしまふ。一度結婚した女は決して再婚を許さないのが蕃社の掟であるから、氣の毒な女は一生獨身で暮さねばならぬ。

内地人が生蕃に捕へられた時など、人目忍んで食物をくれたり、夜陰に乘じて繩を解いて逃がしてくれたりするのは、内地男を愛する蕃婦の情けである。

蕃婦は二重瞼で、眼は切れが長く、後姿は小原女に似てゐる。檳榔樹の實を咬むから齒は黑く染つて、口の中は眞赤で、赤い痰をところ嫌はず吐き散らす、まるで肺病人の血反吐だ。

路で出合つた蕃婦は、眼たゝきもせず睨んでゐる。こちらも睨みかへす、横を向いた方が恭順の意を示したことになる。蕃婦が横を向いたからマッチ三個を與へると「こんちは」と愛嬌をいつた。蕃人は何よりも鹽とマッチを喜ぶ。この二つだけは自給自足ができないからである。

それをやり過ごすと、又一難、草むらの中に怪獸だ。水牛は水田にゐるものと思つてゐたら、蕃地の水牛は林の下に飼はれてゐるのだ。角は新月形で鋭く尖り、眼は三角で、その上に長い毛があり、鼻に皺があつて、胸廣く脚短く、腹膨れ尾が短く、灰黑色の皮膚に疊屋の針のやうな毛が立つてゐる見慣れぬ人には突つかゝつてくるといふ。水牛氏は恐らく内地のモ・ガを見たことはあるまいから向つてくるかも知れない、氣をお付けなさいといはれても、どう氣を付けていゝか分らぬ。お睨みなさい、蕃婦にやつたやうに水牛にも應用しなさいといふから、近視眼ながら眼鏡越しに十三度の視力だけ睨んだ、恐ろしい不景氣な睨み方だが、水牛は一歩を讓つて横を向いてくれた。やれ〳〵と冷汗が出る。

三

豚や水牛のゐることは、蕃社の近いことを示す。果して十戸ばかりの蕃社であつた。

家は大てい間口四間半、奥行二間ぐらいの長方形で、軒の高さは四尺しかないから、入口は腰を屈めて這入る。窓がないから薄暗い。内は土間で、その地下には胞衣も死體も埋めてある。隅に箱を置いて寢床を設け、一方が高くなつて枕いらずにして、そこに一組づつ夫婦がやすむのである。未婚者は村の公會堂で合宿させる。便所は豚小屋と共同で、豚が衞生掃除をしてくれる。豚と人と鷄と共同生活である。屋根はスレート葺とは驚いたが、この邊はスレートが澤山にあるからで柱は栴檀、壁は竹を編んだもの、藤簀が土間に敷いてある。大黑柱は神さまの宿るところで、男女の裸體像が刻んであり、こゝに書いたら風俗壞亂になる畫もある。パリジャンといふのはフランス語ではなく蕃語で、山の神といふ意味になり、サルオマンは機織の神で、婦人を支配する。

子供が隊を組んで遊んでゐる。面白さうだ。何の遊びかと聞いたら、首狩りごつこだといはれて頸が縮む。百尺の樹に登つてゐるのは猿ではない、兒が花嫁さんの見張りをしてゐるのだといふ。花嫁さまの御入來とはいゝ時に來合せたのだ。

けふの花嫁さんは、掠奪されて結婚して初めての里歸りである。掠奪も今では形式になつてゐるが婿さまが先頭に立つて、親類を引きつれ、女の家に行つて、花嫁の手を引つ張つて連れて歸らうとする。やるまいと女の家の親類が應戰する。力づくの爭ひとなつて、血を流すまでせり合ふ。血をみるのは家が繁昌する吉兆だ。

アミ族は女が相續する。離婚權は妻にある。パイワン族は男女に拘らず長子相續であるから女の酋長が七人もある。――こゝで勘平さんと雪子さんのお話を挿む――。

臺灣總督府は蕃人敎育を奬勵するが、平地で敎育を受けたものは、山へ歸るのを嫌がる。山へ歸つても婦人は山の男と結婚しない。結婚しても女權を擴張するから家庭が圓滿に行かない。だから婦人敎育は山で嫌はれる。そこで總督府の智慧のある役人がいゝ事を思ひついた。

結婚試驗として、男女四人の子供をつれてきて、行く〳〵は二組の模範夫婦をつくらうと新竹廳で花嫁花婿の候補者を養成したが、年頃になつて肝腎の時に、どうしたものか女が男を嫌つて結婚しやうとしない。

臺灣で總督府といへば、泣く兒も泣きやむといふほど官廳の威嚴は光るのだが、戀愛だけは別ものと見えて、頑として結婚を承知しない。結局は分れ〳〵になつて山へ歸つてしまつた。これは總督府が仲介結婚に手を燒いた失敗談ではあるが、なぜ、總督府が蕃人結婚に世話を燒かねばならぬかと云ふに、敎育の奬勵といふことも原因であるが、まだ他に社會的の理由がある。

蕃人は自分の村のものとは結婚するが、他の村のものとは決して結婚しないから、村の中に男が九十人に女が三十人のところがあり、その反對に婦人過剩のところもある。從つて配偶を求めるに窮して四十男が五歳の女と婚約して、氣永に成長を待つてゐるのもあれば、五十のお婆さんが十四五の男を良人に持つこともある。その偏見を打破して、劃時代的の結婚をやつた戀の勇者は、勘平さんと雪子さんであつた。

四

富樫勘平といつても、高雄州恒春郡クス〳〵村の生粹の生蕃、その花嫁となつた人は關野雪子さんと內地名を付けてあるが、これも角板山の蕃女だ。南蕃の男と、北蕃の女とが結婚するといふので總督府は大滿悅、理蕃課長が仲人となり、高雄驛長が花嫁の親代りとなつて、高雄神社で官民歡呼の裡に神前結婚をやつた。

お雪さんは看護婦をやめて世話女房になり、勘平さんは高雄町廳の自動車の運轉手をやつてゐる。講演會の合間をみて、私が訪ねた時には、今上御大典の時に賜つたといふラヂオが緋色のランプ・シ

エードの光に輝いてゐた。勘平さんが結婚苦心談を私に話してゐる時に、七三に結つてゐたマレー系の美人であるお雪さんは、良人の後に小さくなつて、色白の顔に少し紅味をつけて恥かしさうに聞いてゐた。そして生れたばかりの嬰兒がゐますので――と斷然、いゝマダムぶりをみせてゐた。

話は前に戻る――花嫁さまの里歸り、家では宴會の用意ができてゐる。酒は手製のもので、その造りかたは、婦人が粟をかんで十分に唾を交ぜて竹筒の中に吐き出し、竈の上に吊つて釀されたもので飲器は蓮續杯といつて三尺ばかりの木に杯の型を三つ彫りつけ、それに酒をついで三人が頭を抱へ合つて飲むのである。元日と婚禮とはいくら飲んでも喧嘩をしない、これはブサンニックといふ規則である。

御馳走はどこで手に入れたものか、石油罐があつてその中に山と盛つてある。チニブボボといふのは、粟の中に南京米と獸肉を交ぜて搗き、バカイヤサといふ草の葉で包んで蒸したもの、ムンミヤンとは豚の腸の鹽漬である。調味料といつては砂糖も醤油もなく鹽一點張りで加減し、指でつまんで食べるのである。

鹿が一匹繋いである。これが一ばんの御馳走で、先づ一聲の掛け聲でその頸を切り落とす。すると寄つてたかつて流れる血を吸ふ。次に腹を割き、腸を出して皮を剝ぎ、四足を切離して、それから小さく切るのだが、このコックは荒事師で荒療治を要する。

女は年頃になれば、入墨婆さんを傭つて耳から口へかけて入墨をする、男は二十錢から五十錢の入墨料、女は念を入れてやるから五六圓もかゝる。もちろん金錢のないところであるから、その金額に相當する物品で贈る。女の脚や手の甲に入墨してあるのはお家柄のいゝのを示す。老婦人が七八人で手足を押へて入墨をさせるのだが、施術後は顔は紫色に膨れあがる。耳朶に穴を明けるのは糸を通した針で貫き、その穴へ茅の莖をさし込んで、三日ほどしてから又一本をさし加へ、又三日して一本加へつひには二十本も莖をさし込むから一分丸大の穴ができる。その穴に耳環をはめるのであるが、耳環の端に耳かきのやうなものが下つてゐる。これが烟管の掃除用具とは脂くさいのも道理である。

毛をいやがることは非常なもので、男は鬚を毛抜きで抜き、マッチで顎の毛を燒いて火傷の跡を殘してゐるものもある。女は二本の糸を撚つて毛をはさみ、手ぎわよく抜き取つてしまふ。祭典とか婚禮の時など男も女も全身の毛を盡く抜いてしまふ。眼にみえるところも見えないところの毛も、みな抜いてしまふ。

五

花嫁さんが間もなく着くといふ、見張りの兒の知らせで、蕃社の人が集つてくる。裸の男が下帶一

つでくる。みな痞せてゐるから、下手な田舍相撲が始まりさうだ。蕃人には肥えたものがないから一向强さうにない。みな才槌頭でビリケンはなく、竹の根に人の顏が彫つてある煙管で、煙草を吹かしながら集まる。中には人の頭ほどの瘤を頸からぶら下げてゐるのがある。これは甲狀腺腫といふ蠻人特有の病氣で、わが首をもて餘してゐるところは、人の首狩りどころでなさゝうだ。

花嫁さんの齡がわからぬ、曆がないから元日でも、播種祭でも、結婚の年頃でも、村の老人が集つて相談して、日なり年なりをきめるのである。鷄肉を喰べないのに鷄を飼つてゐるのは時計代用に役立てるのである。

花嫁が見えた。正裝である。襟の付いてある一尺二寸丈の上衣、左の腋下でボタン止めになつて筒袖で、袖口には刺繍で花を現はして、腰には丈一尺二寸、幅八寸で下の方で廣がつてゐる布を前と後とに垂れてゐる。銀製の瓔珞のやうな花簪が光つてゐる。上に獸皮の帽子を着て、家柄を現はすため三本の鷹の羽根が挿してある。

胸飾、首飾、脚環は銀づくめ、これは熊の膽、鹿の角などを賣つて得た銀貨を鑄つぶしてつくつたもの、トンボ玉の高貴さを誇る首飾りは、二千年來の珍物である。トンボ玉は父祖傳來のもので、最も新しいものでも臺灣移住以前のパイワン族のものである以上は、數百年を經過してゐることは明白で最も古いものは、五六千年以前埃及の古墳から發掘せられたものと形式なり、古色なりが酷似してゐる作品であるといふ。蕃人は棕櫚の根から染料を取り、茶色に染めることしか知らないから、蕃布に織り込んだ赤青の毛絲は、貿易によつて臺灣の本島の人から手に入れたものである。後につゞいてゐる家柄低いものは、綿布の頭巾に芋の蔓で輪を卷きつけてゐる。みな脚絆、足袋、手袋をつけて練りながら女の家に入る。

六

家の中には、中央の棚に髑髏があり、その下には刀、槍、弓矢、楯、甲冑が飾つてある。宴會は大黑柱の前に髑髏を並べ——髑髏の數の多いほど名譽——その口に御馳走を詰め込んで首狩りの凱歌を唄ふ。私の譯した歌——

お前の前に酒がある　芋がある　おいしい豚の肉もある。
お前には眼はないが口がある　大きな口をあいてゐる。
口には芋を詰めてある　お前には食べ切れまい。
餘つたら父母に分けてやれ　この社はお前の住み家である。
死んだら面白いか　哭くな笑へ　笑つて酒を飲め。

主人の發聲で大ぜいのものが圓座になつて歌ふ。飲む、踊る、歌ふ、飲む、踊る。それを繰返して夜あけまで續ける。時としては三日も續く、宴會が今始まらうとしてお客が正裝で繰り込む。

蕃人には戸籍はないが、名前は付いてある。トユニといふのは松のことで、それが人名になつて、松さんといふ人がある。內地で松之助とか、松太郎とかいふやうなもの。デブスといふのは米のことで米といふ名前のあるのは、米藏とか、米太郎とかいふ類である。カムライとは蟬のこと、タウタザーとは豆のこと、ブツブトルは狸のこと、カルカライとは蟹のこと、バヽイは風のことで、みな人の名に付いてゐる。

痩せてゐる米さんがお客の名前を呼ぶと、聲に應じて順番に腰を屈めて低い入口から這入つて行く粟さん！酒さん！風さん！などはいゝが、蟬さん！狸さん！蟹さん！山猫さん！貉さん！土龍さん！猿さん！で、とう〳〵蕃女探檢家はふき出した。

笑ひ聲で氣がついて、怪しい女が手帳を出して何か書きつけてゐるから、追ひ出してしまへと、テプスさんが叫んだので蕃女探檢家は「米喰ひ奴」と罵られて放逐されてしまつた。米喰ひとは肥料のかゝつた不潔な米を喰べてゐる奴といふ意味である。蕃地には肥料がない。だからこの話は分配ができない！。

8 トランク

彼女の全財產として大なる存在である一個のトランク！

その「外觀」は？　黑の鞣皮にラベルがべた〳〵と斜めに貼られてあること、借家札とは形容がいゝ方で、惡い方では執達吏の差押へのやうに算を亂して貼つてある。ホノルヽ、モスクワ、ジユネイヴ、ロンドン、ヴェニスとかう地理書の目錄のやうに並べ立てゝも仕方はないが片面だけでもそれほど貼られてある。もう後備になつてもいゝ老齡だが、この老齡でも現役を勤めてゐるから痛々しい。

その「內容」は？割合に重いから强慾婆のつゞらのやうであるが、中からお化けが出るでない、何が出る、書籍と雜誌とが一ぱいで、これが重心を成してゐる。

このトランクをホテルへ持込むと、そら來たとボーイが緊張する、緊張する理由はチツブの多いお客さまなるが故ではない。このトランクの持主である女浪人はうるさい奴で、彼女は著書「情熱的論理」にも「女浪人行進曲」にも「表皮は動く」にも「新臺灣行進曲」にも、新聞にも旅行記を書く序でにホテルのことを書く「改造」にも長いものを書いてから形勢が更に一變したどこへ何を書くかも知れない、油斷をしてはいけないとマネージャーが戒嚴令を布いてゐるからだ。

東京なら帝國ホテルか、丸の内ホテルへ多く持ち込む。何を持ち込むかといへばトランク附けたり彼女である。トランクは形大にして彼女は形小なるが故にトランクは主體で彼女は從屬關係にあると思はれては彼女の權威にかゝはる。小なりといへども彼女は主人で、大なりといへどもトランクは無言の秘書である。

彼女は既往三年の半分はホテルで暮らした。ホテルが彼女の氣に入つたわけは、ドアを締め切つたら自分の靜かな城砦となり、ドアを開けたら外は賑やかな社交場となつてゐるからである。食堂や音樂室は國際的文化刺戟を感じるのがうれしい、だからホテル住ひはいゝといふのだ。

東京驛と、大阪驛との赤帽氏も顏なじみになつて、女浪人に隨伴するこのトランクの如何に重くして、チップのいかに輕きかを知つてゐる。列車ボーイも、寢臺ボーイも「今度は早くお歸りでした」とか「大さう永く御滯在でした」とか挨拶をしてくれる。名古屋驛、神戸驛にも二三の赤帽氏に知己を辱うしてゐる。汽車の食堂でもボーイが彼女の好きな菓物が何であるかを知つてゐる。彼女は箱乘りである。他人のものを盜んだ覺へはないが、ポケットマネーを掏られて辛うじて——二度の食事を拔いて——大阪へ歸つた經驗を有する薄のろ箱乘りである。

時間の經濟を考へるのと、ホテル賃の緊縮を策するため、汽車はいつも夜行である。いきなり寢臺へ潛つて枕許の豆電燈をつけて讀書してゐるうちに眠つてしまふ。起きたら目的地に着くといふ段取りが細かく計算してあるから、富士山も琵琶湖も久しく對面しない。

細長い日本を東西に走りつゞけてゐるから、スピードなら何でも歡迎する。飛行機にも、汽車にも汽船にも、自動車にも、横車にも、尻馬にも乘る。

早いばかりではない。速力の遲い時もある、銀ぶら、心ぶら、四條ぶら、廣ぶら、伊勢ぶら、元ぶらもやる。ぶらは速力の最も鈍いものである。足だけのぶらではない、手ぶらでうろつく、手ぶらの時はトランクはホテルのルームで休養を許される。

驛を降りると自動車の助手が先づトランクを引つたくる、將を射んと欲せば先づ馬を射よ、女浪人を圓タクに乘せやうとせば先づその大きなトランクを積め。トランクを持つて行かれたら、あとから女浪人がついてくるにきまつてゐる。トランクの引力は恐ろしいものである。トランクの引力ではない。助手のトリックの引力であるといふ學說もある。

トロックなら臺灣で乘つた、危い溪谷の釣橋の上を臺車(トロ)が走る、ゆら〳〵とくる、欄干(てすり)もない半坪ばかりの板の上だ、彼女はトランクにしがみついてゐる。かういふ時はトランクは重いほど安全だ、輕い彼女が飛ばされやうとする重鎭(おもり)となつてくれる。輕るかつたら彼女は淡水溪へ陷落したかも知れ

ない。

彼女に問ふ、お前はいつ迄浪人してうろついてゐるのだ。

彼女はいふ、自分でも分らぬ、トランクに問へ。

トランクは答へる、もつと〳〵いゝ材料を俺の腹中に詰めろ。

彼女も、トランクも傲語してゐるが、その實は大ぶん疲れてゐる。ゆつくり書齋に籠つて大著述に取りかゝるだけの種をトランクに塡めたいと、この頃は幾らか焦燥の念に驅られてゐるやうだ。

ホテルで今トランクの中から原稿紙を出して彼女はこんな「トランク」を書いてゐる。彼女はどこまでも氣まゝな女浪人である。野趣が拔けないから書くことが小づら憎い、だからいつまでも末流でちやぶついてゐる。「それも面白からう」「何が面白いことがあるものですか。」

9　上　海

南支那の港へ私たちを乘せた汽船が着いたら、眞先にニュースを催促される。ジヤナリストである私の口から景氣のいゝ話を聞くことを期待してゐる人々が多い。好景氣の法螺でも吹いて人意を强めたいのだが、材料がないから不景氣の愁嘆話をして歡迎の好意を裏切ることは、私に取つて息つまる苦みである。そのだん上海は通信に惠まれてゐるから私から、話す迄もなく私は却つて上海のお方から景氣のいゝお話を聞きたいと思ふ。

東京は復興が成つて、橋と道路とだけは立派になつたが、その上を行進するものは失業者の大群である。政府は產業の振興を計る代りに、生活の緊縮を說く、市民は不景氣を口にしながら、銀座のカフエーと、日本橋のダンスホールは賑ふ。小賣店は一年に千軒も沒落する代りに歡樂場は滿員である。何といふ調子の悪いことであらう。都市集中は新宿に、第二の銀座をつくり、百貨店は擴張と新流行の輸入に忙がしい。頤を突き上げる上海の流行服も、スカートを長くしたパリーの流行も、優秀快速船の速さより早く持ち込まれる。東京には定見がなく、流行の模倣に疲れてゐる。上海にあるといふ魔窟——上海ほど露骨ではないが——を輸入しやうとして警視廳と押し合つてゐるのは何といふ不心得であらう。上海には魔窟以外に輸入すべき好きものが澤山にあるはずである。

大阪は排日が濟んだら、幣原外交で倉庫にどさつてゐたストックが、綿糸も、綿布も、雜貨も支那に向つてさらはれてしまふやうに思つてゐたが、統計の上では少々の響きはあるさうだが、輸出の增加が生產の增加に追つかないため滯貨を抱いて困つてゐる。考へた揚句の思案が職工賃銀の値下げとなつた、何といふ智慧のないことであらう、生產資本主義の尖端が支那市場に集中してゐる今日に、

地の利を得てゐるだけに安心して、産業を全理化しなかつた罰が當つてゐるのである。支那貿易がどうあらうとも道頓堀の灯は赤く青く、不生産人であるモ・ガとモ・ボとは刹那の歡樂に耽つてゐる。離村した自由勞働者が都市に集り、都市で失業した熟練職工が歸村する。差引きして殘つた數が一年七萬の割で大阪を大きくする。

京都は、御大典に落ちた何億といふ餘惠の金がどこにか消えてしまつた。その時に入り込んだ千五百の自動車が今に殘つて供給過剰であてもなく走つてゐる。當時に新築增築した旅館、料理屋、カフェーが今に膨れたまゝ胃擴張の姿で殘つてゐる。横濱の生糸、神戸の船舶、門司の石炭、その地の生命である重要品が現在のやうな不振では、伊勢佐木町、榮町のショーウヰンドいよ〳〵美しくして商品いよ〳〵賣れない。

南支那は天から投下する陽光と、地から湧き起る生氣とで人も木も延び〳〵として、日本で細かい仕事を爭奪し合つてゐる修羅場に比べて惠みの天地が展開してゐる。櫻が觀られないといつたやうな贅澤はいはないがいゝと思ふ。

10 御馳走奇禍

A

パリーのホテル・セレクトの玄關前で、私が自動車に乘らうとするところを呼びとめたのは、ドイツ人である親友のU女史であつた。

「どちらへいらつしやる？」

これは親密な話しかけである。

日本では途中の出逢ひ頭に「どちらへ？」といふ言葉が無造作に、かつ無意味に用ひられる。實際はどちらへ行かうが何の關係もないことであるが、行く先を問ふのが作法のやうに心得てゐる人がある。

「ちよつとそこまで」

これほど要領を得ない、そして人をなめた返事はないのだが、それに滿足して

「あゝさうですか」

と、こちらも有合せの外交辭令でぼかしてしまふが、白人は「どちらへ？」といつたやうなことを尋ねるものがない、けれども今の「どちらへいらつしやる？」はジャパン製の挨拶ではなくして、Uさんは必要がつて私の行先を聞いたものらしい。これは極めて親密な間柄には有りうちのことである。

「私はK女史の晩餐會に招かれて出かけやうとしてゐるの」
「K女史つて、戰爭犧牲者會の幹事ぢやなくつて？」
「さうですわ」
Uさんは哄笑に破裂した。ドイツ人特有の胃の奥底からこみ出す革命的の大笑であつた。
突然ぱつと花の咲いたやうな笑ひかた、躊躇のない感情の表現、用意のない破顔は、パリー人とアメリカ娘とだけが持つ氣持ちのいゝものだが、ドイツ人の笑ひ方は理詰めが解けたといふ笑ひかたである。なか〳〵笑はない代りに笑つたら小さな笑ひではない。笑ひかたによつて何を思つてゐるかをさとることの出來る笑ひ方である。もつとも接客業者には商賣用のさゞ波笑ひといふものはあるが、これは別種に屬する。
「どうといふのです」
「Kさんの招待ならさん〳〵兒の自慢と、お料理の苦心談とを聞かせられますよ」
「それは面白いぢやないの、私は日本を出てから、ホテルと、レストランと、カフエーばかりで食事してゐるから家庭のお料理を戴いたことがないので、フランスの素人料理に大きな期待をもつてゐるのです」

「あなたは奇禍に逢つたのです」
「え、奇禍とは？」
「奇禍といへば少々手荒いかも知れませんが、貧乏な私なんかは決して招待してくれません、百フランばかり用意していらしやい」
「有料なんですか」
「まさかね、招待して料理代を取ることもないのですが、ブルと見たらすぐ招待するのですよ。あなたはブルと見込まれたのです」
「ブルとはドツグですか」
「ブルヂヨアでさアね」
「光榮に感ずるわ」
「まア行つていらしやい、苦しい驚きを感じるでしやう」
「そのわけを話して下さいな」
「いけません、あなたもK女史もどちらも私の親友なんだから、たゞ貴女に注意だけしてあげたら、それで私の友誼が立つわけなのです。では行つてゐらつしやい、さよなら」

U女史はホテルの中へ消えてしまつた。私は自動車に片足を掛けて躊躇した、しかし招待を承諾しておきながら今さら中止することも出來ない、どんな奇禍に逢ふのだらうといふ好奇心に、冒險趣味も手傳つて自動車に乘つた。話を聞いてゐた運轉手も笑つてゐた。

K女史のお宅は山手とでもいふ閑靜なところであつた。ベルを押すとKさんの良人であるRさんが現はれた。

けふ御招待をうけてありがたう、とお禮をいつたら、いや私が招待したのではない。妻が招待したのですとは、お禮を述べる人がまちがつてゐるといふフランス式とはいひながら、調子の悪い挨拶である。妻の招待なら夫に禮を述べる必要はないのだ。

今日はほんの家族的の晩食ですといふ觸出しで、Kさん夫婦の外に來年は中學へ入學するといふH少年も席に列つた。

H少年は頭髪がむやみに延びてゐる。これは中學へ入學する時には髪を分けてハイカラにするための準備だとあつた。

B

食堂に入ると、テーブルにはパンと果物とが中央に盛られてあつた。このメロンはロスアンゼルス産であるから、多分日本農園で出來たものだらうといつてゐた。パンは世界でも味のいゝのをもつて誇つてゐるパリーのH製である。これは勝手に取つて食べるので、そこが料理屋とちがう、先づ菓物を食べて食慾を引つぱり出しておいて、それからスープが出て、つぎに大きな陶器皿に羊の肉の腿が載せたものが出た。良人のRさんがそれを切つて、第一に主婦であるKさんにすゝめ、つぎにお客である私に、つぎに自分に、次にH少年に配當した。

私はそれをいたゞきながら、伏兵である奇禍がどんな形態をもつて、この席上に現はれるかの不安で、吭につまりさうな食物をタンサン水で嚥みこんだ。

ドイツのビール、フランスのワインは小學生でも飲む。ことし十四歳になる少年がコツプでワインを——ロシア人が茶を飲むやうに、アメリカ人がグレープジユースを飲むやうに——吭に水音を立てながら飲んでゐた。もつともアルコール分は極めて少いとは聞いてゐた。

お客側である私の外の皆は、ワインを飲んでいゝ氣分になつてゐた。

「私は雁のお料理が得手なんですが、どうです、今のコキールは？」

私はほめることを忘れてゐた。今喰べたのは雁だつたのか。

「今頃に雁は珍らしいですね」

「ノルウェーから來たのです、それからこれはオイスターベーの蠣です、セーヌではいゝ蠣が取れません」

二個の蠣を大切さうに、貝の付いたまゝ皿に盛つて私にすゝめた。家族たちの皿には一個づつしか盛つてなかつた。それほど蠣は歐洲で珍物となつてゐる。

「パゝさん、オイスタベーぢやないよ。ドニープナ産だつていつたぢやないか」

「默つていらつしやい」

廣島産といふ方が房州産より蠣の資格が高い、ロシヤ産のだと兒どもは正直に、樂屋を素破拔いてしまつた。

私は、日本から持つて來た武者姿の博多人形をその兒に與へたが、兒はお禮をいつても母親は知らぬ顏をしてゐる。例の招待狀に對する態度と同一の個人主義だと思つた。

「日本のお方は漬物がお好きだと思つて、漬物とライスを用意してあります、澤山に召しあがつてください」

なんと！　銀の大きな椀に一ぱいのお粥だ、私の前に置かれた時には、茶色の波がうつてゐる、お粥にシロップとソースをけたものだ、蛙のフライをてうだいしたあとで、これは御免だと胃袋が叫ぶ

せつかく好意だから二すくひ喰べて、匙を投げ出した。これは主人に失禮だが、こんなものを喰べては却つて失禮だ、なぜならば胃袋が早速それを返却するといふのだもの。

「時にマドマゼル・北村……」

と話が改まつた、「時に」といふ一轉語は油斷がならぬ。いひにくいことをいひ出す時の前提になる前哨語である。

果然奇禍が押寄せてきた、と私は直覺した。果然といふ二字を使はねばならぬほど、私は心待ちに待つてゐたのだつた。

「歐洲大戰では、わが勇敢なフランス軍人は死をもつて祖國を護りました、資本主義爛熟の結果だから致しかたのない慘事としても」

と、無產派のいふやうな句調で述べてきて

「けれども」

といふ一轉語を又こゝに挿んで

「廢兵と遺族が氣の毒でならないのです」

それから遺族の悲慘な狀態を、くど〳〵と述べるから折角の御馳走もまづく感じかけてきた。

これでは奇禍ではないらしい、果然といふ二字を取消さうとしたが、それは本論に入る冒頭であつて奇禍が近づいてゐることは確實らしい。前提の話が恐ろしく陰氣くさい。

主人はぼんやりと天井をながめてゐる。兒どもは居眠りを始めたが、私はお客たる不仕合せからこんな話を謹聽せねばならぬ、これも奇禍の玄關である。

とう〳〵話は中核に觸れた。

「私は戰爭犧牲者會へ五千フランの寄附を紹介したいのです。五千フランの寄附をするか、又は寄附者を紹介したら終身會員になれるのですから、貴女は勇敢な戰死者に同情して、私を終身會員にするために百フランだけ寄附してください」

と語尾を押へつけて命令するやうに結論をまとめた。

一たい白人は、公共のため寄附金を勸誘するのに熱心を通り過して物凄いやうだ、花を賣る、メダルを賣る、通行人を擁して離さない。ドイツの廢兵デー、イギリスの貧しい母デーには、乞食もおもらひがないといふくらい貴婦人が乞食あらしをやる。

ニウユヨークで孤兒デーをみた。自動車を降りる紳士をめがけて、婦人が飛びかゝつて車道で强要する、交通巡査が婦人を保護するため交通を止める、通行の流れを止められて停滯した男たちが氣短かに騷ぎ出す。ビー、クワイエツト、ザ、ホスピタルと婦人が男子をたしなめる。と喧騷が一時に靜まる。

葬式に逢つたら脫帽して敬意を表する。病院前では靜かに歩む、無作法なアメリカ人も死と病とには殊勝な心掛けを持つ。けれども、この場合は病院前でもなんでもなかつた、さういつて男子どもをおどかしたゞけだつた。

「早く寄附しなさい、さうでなくては交通の妨害になる、けちなひとだ」

ショーファーたちが運轉臺から紳士を罵るから、とう〳〵紳士は十ドルを拂つて、マークを受取つた。こんな目に逢つた男は奇禍である。

いま私は逃れ難い網の中に入つてゐる。何といつても、奇禍夫人のお手料理をいたゞいたことが弱身なのだ。

私は喰べたものを吐き出して差引き精算をしたくなつた。

ピストルでも出したら、フオークで受ける用意もあつたが、これは又た飛んでもない經濟問題である。歐洲は彈丸の戰爭から經濟戰に移つたといふのはこれだ。

先の長い旅人に取つては、金を出すことは領土を割讓するよりつらい。だが仕方がない、結局は私

のポケットから、それだけの金は引き出されたのであつた。

11 世界一土地成金

大西洋からきた大きな船でも、咽喉につまることなくニューヨークの河口に呑込まれてしまふ。ノース・イースとの二つの川に狹まれてマンハツタンがある。

混合酒の名に知られたミリオンダラーも、マンハツタンも禁酒國のアメリカにある。

マンハツタン半島は、ニューヨークの最も繁昌した一區を成してゐる。船が今、自由女神の下を通つて棧橋に着かうとする時、又してもアメリカ婦人の世界一の高漫話が始まる。

ビルチングが世界一、道路が世界一、世界一を二十ばかり列べた中に、マンハツタン區全部の持主が世界一の土地成金だといふのが耳にさはつた。

「誰がマンハツタンの地主ですか」

と、イギリス人が眼に角を立てゝ問うた。ジョンブルはヤンキイの世界一を濫用するのが癪になるのだ。

「ミニユエツトですよ」

と答へがあつた。

「原價二十四ドルのものが、いまでは地價百ドルを下りませんからね」

と追加してヤンキイは吹き始めた。

これは丸の内の三菱ケ原とは桁がちがふ、と貧乏地震國の婦人は感心してゐる中に、アメリカ婦人とイギリス紳士との話はつゞく。

「一六二六年、ミニユエツトがアメリカン・インデアンから買つた毒蟲の巣が、こんなに世界の繁昌地になつたのです」

「そして今でもミニユエツトの子孫が持つてゐるのですか」

「いゝえ、イギリスでないから遺産を傳へなかつたのでせう、もし、ミニユエツトが生きてゐたらといふのです」

「では假定ですね」

「まア、さうです」

「もし、ミニユエツト又はその子孫が生きてゐたらといふのですか、假想の事柄まで持ち出して世界一の數を殖やさうとするほどアメリカには世界一が缺乏してゐるのだ」

といつてジョンブルは得意さうに怒る。ヤンキィを尻目にかけて甲板から客室へ降りて行つた。

禮儀正しく、謙讓の美德に躾けられて、育つてきたイギリス紳士でも、世界一を鼻の先に振り廻はされると眞劍に腹を立てる。婦人の前でも癇癪を立てるのだ。ニューヨークが世界金融の中心であるなどいはしむるものなら、イギリス人は爆發するのである。

12　ロンドンの看護婦

忙しい、とても忙しい。四十四ケ國から一千人の代表が集つて、川口愛子女史が遲着のため日本からは私一人の萬國婦人參政權大會出席者だつた。日本を出てから十回もドイツ語と、英語とで演說もし放送もした。だれもつれないほんの一人旅だ、それに原稿の用事もある。ホテルでも呼ばない限りは給仕がこない、それも晝のうちにチツプをやつて置かなくては、時間外にいくらベルを鳴らしてもきてくれない。給仕がきてくれるのはチツプをやるといふ前提があつて、始めてベルの効果が現はれるのだ。ロンドンでは巡査に金をつかますだけチツプ使用法に熟達してきたが、日本を出てからもう三百圓ばかりチツプだけにつかつた。ツェ伯飛行船の乘船券に二千ドルを拂つたから、これからはチツプも緊縮せねばならぬ、何でも自分で始末をする必要が起つた、貧乏はこれでかなん。

かなんとは、大阪語であることを註釋せねば東京人にはわかるまい、大阪語ならドイツ語より上手だが、さて大阪語で演說せよといはれると、ドイツ語よりやりにくい。それほど大阪語は大衆語ではない。

家庭でつかつた下女のありがた味がしみ〴〵と身にこたへるが、慣れてくると自分で自分のことを始末するのが却つて氣樂になる。

給仕をつかはないで、給仕がお客をつかふことが現代式だからたまらない。カフエ・テリアでも給仕は監督するだけで、お客は機械に向つて金を支拂つて、勝手に食器を運ぶ、オートマットも自動食堂になつて給仕の影もない、これからは人間が人間を使ふことがなくなつて、人間が機械を使ふ。オートマットでは機械が人間をつかふ、機械はお腹がへらぬから強いが、人間はお腹がすくといふ弱點がある。

歐洲は朝寢坊のお揃ひだから、市民の起きる前に一と運動ができる。朝のセーヌ河の日の出、ウェストミンスター橋上の朝霧なんかは、フランス人でも、イギリス人でも、紙屑拾ひと、パン配達と、牛乳屋とを除いては私ほど、朝景色を滿腹させたものは少からう。それから歸つて原稿の三十枚も書いた時分に朝御飯ができるのだ、だから私が書いた五百枚の原稿と五百頁の單行本二冊——近日出版

するから買つてください――とは朝飯前の仕事であつた。

ホテルのボーイは「貴女ほどの活動家は見たことがない」と感心してくれたが、日本人はこせついてゐるから精力家にみえるのか、たゞしはチップの効果であつたか。

フランスのホテルは、場所の餘裕があつてアメリカ式より氣分はいゝが、私がパリーへ二度目に訪問した時は革命紀念祭（キャトリジュリエ）で、全市がえらいやつちやで踊り拔いてゐる。ホテルの明き室がないため、出迎へてくださつた藤田嗣治畫伯の客となつて一晝夜を過ごした。

アメリカのホテルは、何でも人手を借りないで處置できるやうに設備ができてゐる。電報の御用はありませんか、と毎日三回づつ尋ねてくるやさしい少女があつた。これは電信會社の外交員である。

ベットは西洋人向きだから、私なんかは長さにおいて半分にも足らない位だが、西洋人なら脚を延ばせば一ぱいにならう。

本國にゐたら、病氣の部に入らぬほどの僅かな熱でも、これから長途の旅をする身には醫師にかゝつたほど用心深かつた。ちよつとしたことでも看護婦を傭はねばならぬ。看護婦といつても女醫以上に堂々たるレデーさんである。上衣を脱いで白衣のカバーを着かえて始めて看病人らしくなつた。

いきなり華氏の檢温器を吭へ突つこむ、その刹那に患者は氣を利かせて舌で卷くのだが、舌の卷き方が下手なので「貴女は乳を呑んだ時のことを忘れたか、乳房をくわへるやうに卷くのだ」といつて「貴女は幾歳か」と附け加へた。

ベルリンで私は十六七歳の少女と間ちがへられた。日本代表は小娘だといはれた。それほど背丈の低い私だからこの看護婦は乳を離れた小犢だとでも思つたものか。

「忘れた、乳房なんか十五年前に忘れてしまつた、母乳は十歳限りだつたから」

「おや〳〵二十五！　では舌が發達してゐない？」

「ぢやうだんぢやない、舌は一人前です」

タンシチューを好くイギリス人からみれば、日本人の舌は牛より短いかも知れないといつて、看護婦を笑はせた。

温度を計つて

「この病人さんに寢ずの看護は勞力の浪費だ」

といつて、隣のベットにくるりと横向いて寢てしまつた。

六尺を切つた大女で、體重は二十三四貫もあらう、その重味は主としてお臀にある、牛が臥てゐるやうだ。

恐ろしい高い鼾だ、いびきの合間に何か寢ごとをいふ、英語の寢ごとは初耳だ、自由貿易がよくて保護貿易が惡いといつてゐる。異人の寢ごとは珍なものだ。

醫藥分業だから、醫者は診てくれたが藥をくれない。看護婦は藥のことを聞かないで寢てしまつた變な調子だ、處方箋でもあれば、ボーイを呼んで買はせるのだが、枕許をさがしても何もない、西洋の病氣は調子が變だ。こんなところで病氣をしたのが心得ちがひだつた。

朝は九時まで一直線に寢てしまつた。起きてからお化粧をするのに十時までかゝつた。それから檢温して、これでいゝといつて歸つてしまふ。歸りがけに看護料として邦貨三十五圓を持つて、さつさと消えてしまふ。

病人のやうであり、病人でないやうでもある。起きあがつて、萬國婦人參政同盟本部を訪問することにした。これより前に木村毅氏が勞働大學へ紹介して入學させてくれたが、入學した翌日官憲がきて閉鎖を命じた。危險思想の巣窟へ知らないで入つてゐたのであつた。木村氏は大阪から代議士候補に出るさうだが、無茶なとこへ私をほり込んだものだ。

廊下へ出たら、さいぜんの看護婦が女給仕を相手にしてまだ政論を闘はせてゐた。聞いてみればこの看護婦さんは勞働黨の第一線に立つてゐる勇者だつたといふ。選擧戰の巧拙と、その政策の批判はちよつと面白く聞かせられた。

總選擧の濟んだ直後であつたから、板塀なんかにポスターが殘つてゐるのを、紀念のためほぐして歸つた、リーフレットなどもホテルの抽斗の隅に殘つてゐた。そんなものを澤山に集めて歸つた、婦人候補者のものはできるだけ多く蒐集した。

その中で代表的な文句を拾いてみやう。

「トラスト、カルテルによつて、人爲的に物價を高めることに服從することはできない。寡婦の扶助金、兒童の特別教育、住宅改良は國民の懷の豐かな時よりも、今日のやうな不景氣な時に一層の必要がある。婦人有權者は子供の將來を思つて、一掃的に新時代を劃する目的の下に、新婦人代議士を議會に送られたい。私はその任に堪へられる」

「母と小兒とを飢えしめておきながら、國民の體力と品性とを高めやうとするのは無理である。この方面に豫算を惜むのは國家の自殺である」

「軍備の大縮少を行ひ、平和の軌道に國家を乘せない限りは、いかなる政策を公開してもそれは欺瞞である」

文化の思想を、男子と平等に受け入れることができないで、片隅に小さくなつておづ〳〵としては

ゐられない。男子と自由競爭をして負けるものではないといふ意旨をはつきりと知らしめて、婦人運動に敵意をもつ異性を征服、又は排擊して進まねばならぬといふ熱辯は婦人ばかりを集めた演說會で高調された。

イギリスでは婦人問題と失業者問題、アメリカでは婦人問題と黑人問題が議論の中心をなしてゐた明らかに共產主義と名乘つて、打つて出た候補者の宣言書などは、イギリスでいかに言論の取締が寬裕であるかの一例としてこゝに引用したら、その雜誌は發禁は受合ひである。モスクワで得たものとゝもにそんな文獻は汽車の窓から棄てゝしまつた。

砂糖、茶の課稅、下層社會の群居狀態を改良する住宅、衣食の不當な價格釣上げ、失業の簇出、子女の敎育、產婦保護等は婦人候補者の旗印である。

婦人運動は仲間に議論ばかり多くて、それをまとめて實行に取かゝることがむづかしい。婦人運動の初期は理窟整理時代である。イギリスはその時代を過ぎて實行猛進時代に入つて、何にしても私たちより、半世紀ばかり先頭を切つてゐる。

歐洲戰爭で冷水の洗禮をうけた僚邦は、あまり從順にしてゐてはどんな無茶な戰爭に引つぱり込まれるか知れない。といふ心配から國防と外交とに割込んできたから、イギリス外交は男女と七屬邦とで二分八裂となつて政界は面白くなつてきた。

歐米では婦人の意旨を政策に加へない政黨はない、婦人の理解と同情を失つた內閣はすぐ倒れる。顧みて日本のことを考へてみると亢奮しないでゐられないが、ロンドンで亢奮したつて始まらない、まだ熱もある。

熱があつても外出は差支へはないでしやうか、と問うと、看護婦は責任は持たないが外出は差支へないといつた。差支へなしに責任のないとは何だと思つた。お粥に梅干が喰べたいがと心の中で思ひながら、食物は何がよろしからうと問うたら、ビフステキとカツレツトだとは驚いた。病人がそんなもの喰べられるかと、オートミルで我慢をした。パリーで吉屋信子氏から漬物製造法を傳授された。パンをビールに溶解して造るのだが、久米正雄氏夫妻も聞いてゐたから、實行していらつしやるだらう、私は今としては急場の間に合はない。この看護婦は政戰の尖端に立つだけあつて、いふことも手荒い。

アメリカではさうでないが、歐洲では服裝と、整容とがやかましいから、氣分の惡い時には外出するにおつくうだ。アメリカからきた日本紳士がオペラの一等切符を買つて、禮服を着ないで出かけたから入場を斷はられた。三等席なら略義差支なしといふから三等席へ入らうとしても入れてくれない。

一等切符は三等へ通用しないといふのだ。チップをやつたら一等へ入れてくれた、中にはメリケンが縞のセビロで澤山にゐる。

お化粧だつて顔だけでは濟まない。帽子を冠るから頭の方は心配はないが、靴下から靴がうるさい靴磨きが箱に道具を入れて廻つてくる、文書室で原稿を書いてゐるまに靴を磨いてくれる。

このごろの整容は、首から上だけで濟まない。指の先から足の先までに及ぶからことが面倒だ、從つて寫眞でも半身より全身ものが流行する形勢がある。

部屋へ歸つて休んでゐると、先の看護婦がロンドンタイムズをさげてきた。病氣の見舞もいはないで、いきなり政治談に入る。

これ御覽なさい、田中內閣例れて民政が代つた、婦人參政の實現のために心からお祝ひをするといつて私を苦笑させた。

日本はイギリスとちがつて、執擁に婦人を抑壓する國だから、內閣が幾度變つても私たちは依然たる私たちである。依然として被抑壓者であることをイギリス人は知らぬ、そんなことを說明するのも恥かしい。

この女は、政治を話したら幾時間でも遊んでゐるが、一たび病氣の話に及んだら、さつそく新聞をたゝんでグーバアイ。

13　生蕃の歌

ベルリンから歸るなり旅裝も解かないで、いきなり臺灣の蕃地へ飛び込んだから、頭の調子が少々變であるが、島の流行唄の

蕃山娘の杵歌が　すゝり泣くよで
しよんがいな、　新高次高　ほれ冬だ

を聞いてゐる神經の尖端が太く鈍くなつて、婦人運動業者でも詩を作りたくなる。

蕃人を十人ばかり傭つてきて、文化講演會に行つた私のために生蕃踊りをみせてくれた臺灣の有志家たちに感謝しながら、首斬り蕃國へ探險して、太古の影を聽いた、それは馘首戰の凱歌で、北海道のアイヌ熊祭りのやうなものである。アイヌ探險には首の臺の飛ぶ心配はないが、蕃地侵入には首の賭けをしてゐるやうなものだ、生首へ薯を詰めて——生首の代用として髑髏を用ゐる——圓座に座つて、蒸した粟を婦人が口でかんで唾液とゝもに醱酵させた酒を飲みながら、胡弓のやうな樂器と四ツ竹のやうなものとに合はせて歌うのだつた、私の譯した歌は——

お前の前に魚がある　薯(いも)がある
おいしい豚の肉もある。　お前には眼はないが口は開いてゐる
大きな口をあいてゐる　口には薯を詰めてある。
前には喰べ切れないほどもある　父や母にも分けてやれ。
お前には罪がない　われにも罪はない
怨むな。　俺の村はお前の住家である
お互に同胞とならう　殺されたものは弱いのだ
殺したものは強いのだ　死んだら面白いか
だれだつて死ぬるのだ　泣くな笑へ
笑つて酒を飲め。

山を降りて臺北の茶會で作つた漢詩一つ。

臺灣冬暖坐駐車。　蘭友相逢笑試茶。
痴態還忘老將到。　茶莉頭飾是狂花。

14　理窟料理

南歐東露の農民たちの中には、牧畜を兼ねてゐるものもあるが、肉や乳はこれを富んだ人に供給して金に換へねばならぬから、自分は薯ばかり餘儀なく菜食主義を取つてゐるものもある。北海の漁民の中で兩魚と海藻とで暮してゐるものもあれば、蕃人の狩獵者は獸肉と木の芽で生活してゐるのもある。

菜食がいゝか、肉食がいゝかと討論してゐるものは、恵まれた土地に住んで選り取りする資力のある結構な身の上の人で、貧乏人や風土に恵まれないものは好き嫌ひする資格がない。

肉食主義は、動物愛護の精神に背く、アメリカの屠殺場をみたものはその慘酷さに驚く。人間の本質は菜食にあるといふ道徳論をするものは、女性か、女性タイプ男子の賛成を得るやうである。菜食ばかりで人間は暮して行けることは確かであるが、もし人間が獸肉を食べなかつたら、獸類はだん〳〵繁殖して山野に滿ち、食餌に困るところから、草食獸は人間の耕作した蔬菜穀物を食ひ盡し、肉食獸は文字通りの弱肉强食時代を現出し、つひには人間にも喰ひつき、人類は絶滅してしまふであらうから、廢物で家畜を飼つて肉以外に、その皮、その骨、その卵、その乳を利用するのは賢い生活である。

なぜならば、蛋白質の腐敗作用は含水炭素によつて救はれるから、偏食は體質の弱い文明人には適しない。文明人の舌ほど厄介なものはない、調理が單純ではすぐ飽きる上に贅澤な嬌味料を要求する。

昔ヨーロッパの山野には狼が多くて、住民は困らせられた、ある時、ある王さんが……といへばお伽噺かと思ふ人もあるがさうではない。王さんがこれに困つて一策として、狼の生肝を食つたものは強くなると宣傳させた、強くなることは婦人の愛を惹く手段であるから、若い勇士は強くならうとして狼の生肝を食ふことが流行した。

生肝を食べるにはどうしても狼を殺さねばならぬ、おかげで狼は著しく減したが、不思議なことには出たら目の王の宣傳が中つて、生肝を食つたものは實際に強くなつた。強いからこそ狼を退治ることができたのかも知れない、生肝を食つたから強くなつたのかも知れない、因果關係はどうであらうとも精力劑であつたことは確められた。何でも肝臓は血球增殖作用を持つのであるから、狼に限らず強壯補劑として、猿、狐、牛、兎などの肝は用ゐられる。鰻の肝が眼によく獺の肝が肺にいゝといふが、そのいふ通り確に間接的効果はあるらしく、臺灣の蕃人が熊の膽を最大な貴重物とし支那人が人間の生膽を起死の良劑と信ずると同樣である。

狼ばかりではない、一たいに野獸は世界的に減少した。從つて狩獵生活者は牧畜業者に變つたが、牧畜の利益もだん〳〵減少する傾向がある。

ヨーロッパは、マルサス時代から百二十五年の間に、人口が二億から五億に增し、米國（カナダを含んで）は同年間に六百萬から一億二千五百萬に上つた。これは必らずしも產兒の增加ばかりではなく食物の改良による死亡率の減少であるが、この激增した食料の供給が困難となりかけてゐるところへ、農民が耕作、牧畜をいやがつて、爭つて都會に走る結果は、田園は荒廢して食料は漸次に不足をする。これだけは間違ひのない近代傾向であるが、この傾向が急激にならば都會で食料をつくらねばならぬ、都會で食料をつくるといつても空地がないから、理化物學室で製造せねばならぬ。これは可能性のあることである。

酵母から食料を製造すれば、その收獲は僅に半日で足る。これを農作物が二ヶ月も半年も時日を要するに比して非常に有利であるが、たゞ食物をつくるだけで食味としては何もない。

ヴイタミンにABCDの四種がある。これにEの一種が發明追加せられたら、生活は安全である。お膳立をしたり炊事をしたりするに及ばない。ポケットに小さな函を入れ、その中には小瓶が五個あつてABCDEの五種の合計一匁を攝取すれば、活力素が體內に滿ちて十六時間の勞働に堪へられ、胃袋も小さなもので事が足るから收縮し、便所の必要がなく、臺所から出る不潔物はなくなり。本當

の美しい都市ができるであらう。その上に百五十年以上に長命するとは藥の効能を超越した吹き方である。

だが、そんなことにならば、人間の本能である美食に飽くことができなくなつて、生活が淋しくなるであらう――といふ懸念はいらぬ。美味を感じるのは胃に食慾液があるからで、味は食物にはない餓えた時や樂しい時は旨く、飽いた時や悲しい時はまづいといふのは、食物液が精神に支配されて分泌するからである。食物液の分量で旨くもまづくもなる。匕加減でどんなものでも旨く食べられるのだ

澤庵、海苔など滋養價の有無は疑はれるが、好きなものには食慾價があるから、嗜好物は食慾增進物質として消化を助ける。いくら滋養價のあるものでも、毎日同じものを續けて食べると、食慾不振から食物嫌忌症を起すに到る。

體内に攝取された食物は、口腔、胃、小腸などの面倒な過程を經て消化液と酵素との作用で分解と吸收とを漸く仕上げるのであるが、それには咀嚼といふ口腔勞働を經なければならぬ。一口に含んだ食物は、平均八十回の頤の運轉が必要であるといふが、文明人は時間が惜くてスピード時代には鵜呑みが流行する、塊のまゝ吭を通つてきた食物は、消化液が表面だけしか溶解力が及ばないから、食物は滓となつて大腸へ入る。この殘滓は身體に取つて無駄な勞働を要求する上に、味覺に何の交渉もなく通つたものである。文明人は大てい胃腸機能に慢性な病的障害があるから本當の味覺はない。

榮養は食物の中に含まれる分量だけでは、人體に益を與へる程度がわからぬ。よく咀嚼しても不消化となつて人體に益しない分量は肉が二・五であり、米や薯が二・〇から二・五である。その益のない滓を人體に通過させる必要はない。牙が發達してゐるものは下等動物で調理が進歩すれは齒は弱くなる、しまひには齒の必要がなくなる。といふのは咀嚼するやうな食物は食べなくなるからである。

煮て食べるより、生のまゝで食べる方がいゝ、生で食べるなら無菌のものでなければならぬが、無菌といふ條件に適ふものが少いから、煮て食べるが安全といふことになる。料理をしたものより調理をしない自然のまゝがいゝのであるが、食味感が發達した文化人の舌は、原始のまゝでは食物を受け付けないから、調理をせねばならぬが、調理をする以上は食慾を刺戟するだけの巧みさを要する。

煮沸といふことも賴りないものであつて、牛乳でいへば鍋でたいても、煮えかへつた時に七八十度で、九十度には達しないから理想の殺菌度（百度）には距離が殘つてゐる。百度に達しても二時間も鍋をおろしておけば、次の細菌が繁殖を始めてゐるから油斷がならぬ。菌を恐れるより胃腸を强健にして外敵防禦の任を盡させるが必要であらう。

いづれにしても、理窟は理窟であつて、人間は理窟で腹をふくらせたら、博士になるより持つて行

きどころがないから、相當なところで衞生談を打切らねばならぬが。口に衞生を說くものは必らず瘠せてゐる、衞生なんかを顧慮しないものに健康體があるといふのは、餘り神經を働かせると胃腸の消化を妨げるからである。

コップの中へ蠅が飛び込んでも、蠅の屍體をビールとゝもに口に注いで、ペッ〳〵と吐き出すだけの度胆がなくて人間は肥らぬ。

化學者の夢も、一部は實現するであらうが、肉が野菜の消化を助け、野菜も肉の消化を助けるから現在の程度では、動物質と植物質との調和食が、人間の理想的食物であるといふ平凡な蛇尾に落ちるなら、何を苦んで狼の肝なんかを引いて紙面を潰したかと怒るまでもない、婦人といふものは無効果なことを書き立てる癖がある。だから女の書いたものは讀んでゐられないと、こゝまで讀まされてから後悔が先に立たぬ。なるほど理窟料理を一ぱい食はされたといふもの。

15　パリーの朝の蝶・夜の蝶

こんな嫌やな問題に觸れるのも、筆が汚がれるやうに思ふが、パリへきて賣春婦のことを感じないものは歐洲の文化に觸れないものとさへいはれる。文化の最高階段に達してゐる國には、賣春婦は常備軍だけの人數を要するものだといふから、フランスには七十萬の賣春隊がゐるはずだが、事實は接客業者を加へて七萬、パリだけで四萬といふから話は半分といふより、この話に限つて一割とみるのが妥當である。それにしても四萬の女軍は淫蕩の氣分を世界に卸す大きな問屋都市である。

婦人過剩――これが淫蕩の原因といふが、歐洲の女は長生きをするから寡婦が多いのであつて、妙齡の婦人は過少である。出生兒ば男子が多くて五十以上になると婦人の方が多い、女はなか〳〵死なゝいものであることが統計の上に現はれてゐる。

性業婦人は白晝に凋れてゐるが、夜になれば勇敢に咲く毒花である。ピカデリーなんかはなか〳〵足もとへも立寄れないほど、お盛んな發展ぶりである。社會政策として不卽不離の極めてデリケートの取扱ひをしてゐる。

文明になるほど結婚がおくれて、パリの平均年齡が男子三〇、三八を示してゐる。結婚は相對のものであるから婦人もこれに追隨しておくれる。獨身ものゝ多いのは社會的に面白くない資料を提供する。その材料はパリに積まれてある。

16　水　牛

臺灣で退屈してゐるものがある。水牛と白鷺とが、それである。

女浪人は忙しい中を割いて、臺南へドライブする。臺南には何の用事もないのだが、曾遊の臺南を見なほすためと、何となく私の生地の京都へ歸つたやうな親みとをもつて、私を引き付けるためとである。

睡眠不足の眼の前には、例の水牛氏が閑さうに立つてゐる。人間といふものは何といふ氣せわしい動物だらう、脚で走つて足らないから車をつくつた、もちろん人間は片輪である。前世の惡業で脚が二本しかない、その代りに手が二本あるといふが、上からさがつてゐるところは榕樹の根のやうだ。手はさがつてゐるが歩く時の間に合はない、二本しかない脚で——俺の半分しかない脚で歩いてゐるのは不便だらう。だから自動車といふ怪獸のやうなものを作つたのだらうが、こんな科學頭の持主である人間といふものに使役せられるのだから水牛の迷惑は推察してもらひたい。スピード時代に生れたのが俺の災難だと、そんなことを考へてゐる哲人のやうな姿で、私の自動車を目送しながら棕櫚の陰に臥してゐる。

南國の棕櫚は、近代人の感興をそゝるもので、銀座のカフエーでも、テーブルの間に棕櫚を立てゝ南國氣分を味つてゐる。赤い灯、青い灯の下にある棕櫚は勢ひが萎びてゐる、その棕櫚に引かれてモボもマボもエボも集る、モボはわかつてゐるが、マボはマルクスボーイであり、エボはエングルスボーイである。棕櫚の葉かげで南國の强激な太陽をよけてゐる、水牛氏はモカである、モカとはモダンカウのことである。

その上に白鷺がとまる、妾は保護鳥ですから人間が手を出したら人間に叱られるよ、人間といふものは妙なもので、同じ人間でありながら人を束縛する法律を作るものと、作られた法律に縛られるものとの二種類がある。妾は人間の法律で安全地帶にゐます。妾を捕獲したい人間が、人間の法律で手を出せないとは面白い。笑つてあげる。

白鷺が群れてゐるのは、淺草觀音さまの境内で、鳩をみてゐるやうである。鳥は人に狎れたいのだが人に平和思想がなく、殘虐精神があるから近づけないのである。ヴエニスの寺院でも、ロンドンの寺院でも鳩がゐること大阪の天王寺に似てゐる。蠅の多いこともイタリーは臺灣に似てゐる。蠅には親みはないが鷺とは親みたい。

鷺は詩仙のやうであり、列子のやうであるが、水牛はモカだから危險思想の持主である。勞働者は突かないが有閑階級に向つてはあの鋭い角で突くのである。敏感に人間の生活狀態を嗅ぎ分けて突きわけること××主義に似てゐるのである。

水牛は肉がまづいのと、島人が牛肉を食べないのとによつて助かつてゐる。もし肉が旨かつたら人間は殘忍な槌を眉間に與へるにちがひない。だが水牛にいはせると、勞力は賣つても肉は賣らない、モダンガールは勞力を賣らない。が時としては肉を賣る、肉が旨いからである。これは水牛に恥づべきことである。

ハリウッドの鰐は兒どもを背中に乘せて眠つてゐる、三百年も經た大鰐は半年に一度しか動かないといふ。水牛の背中も兒どもによき遊戯場である。臺灣には馬がないから町の兒どもは神社の狛犬の背に馬乘りをして遊んで、田舍の兒は水牛の上に乘る。水牛は鰐のやうに鈍く動いて兒どもの友となつてやる。

櫻、土筆、菜の花、たんぽゝのない國、檳榔、相思、林投樹の繁る國、地から生氣のいきり立つ國私のすきな國、とりわけ好きな舊都の南京、いま自動車は綠に包まれたあこがれの都に入るのである、さらば！驚よ、水牛よ、いつまでも自然につゝまれて危險思想なんかを抱くでないよ。

17　秋の日本ライン

上

「雨が降りさうだ」

と私は空を見あげた。

いま迄晴れ渡つてゐた空が、急に陰鬱になつてきた。山峽の秋は天氣が變り易い、雲といふものは變節改論の常習者である。

「さうですね、ことによつたら雨かも知れません」

船頭は纜（もや）つてある舟の繩を解きながら

「雨ふり前には猿が遊びにきます、今日あたりはきつとエテ公が、觀音の瀨あたりの岩で日和ぼつこをしてゐるでしやう」

そんな話をしてゐるところへ、下流から空舟を牽きながら上つてきた船頭が、船頭特有の大聲で話しかけた。

「お猿が出たよ、けふは二十匹ばかりもゐる」

「どこに」

「遊　仙ケ島の上に」

動物園で見た外は、山猿を見たことのない私に取つては、聞き流せない耳寄りの話である。紅葉の

中に遊ぶ猿の自由行動を見たかつたのである。

「早く舟を出してください」

と、心では「猿よ、いま行く、待つてゐてくれ」と祈りながら船頭を急ぎ立てた。

舟はずぐ碧水の狂ふ峽中に流れ込んだ。

この谿谷には楓が少い、櫻や蔦や櫨などが紅葉してゐるから、秋らしい氣分もするが、常盤樹が多いから、氣候が景色と伴つて推移しない。たゞ秋に入つて水が澄み渡つてゐるのと、嵐氣が身にしみ込むことだけが冬の近きを思はせる。

ライオン岩、新赤壁、乙女瀧、浣華溪、おとみ岩といふやうな名を列べると、こゝは日本だけか支那だかアメリカだか分らない。この駄名は整理する必要があると思ひながら、氣持よく水の流れに任せ、船の上に坐つて刻々に變化する兩岸の景色に順應して、首を左右に振りながら降る。

「あれが小波岩、岩の皺が小波のやうになつてゐるでしやう」「なるほど巖谷小波だ、上に紅葉もあり、下に水蔭もある、硯友社のやうだ」

船を操つる技巧は、聞きしに劣る、薄い舟板で歩めばビョ〳〵する船底を暗礁の上に辷らせて、兩縁から水沫を浴びなから、血路を開いて行く保津川を十べんも上下した私の眼からは、こんな舟行は技術を要しない平凡なものだが、風景の豪壯なことは河川としては日本一であるからと思つた。

いゝ時に來合はせたものだ、めがね岩に二匹半も猿がゐる、二匹半といふのは二匹の猿と、一匹の子を負つた猿がゐたことである。大きなものは毛が銀の針を刺したやうに秋の陽に光つてゐた、彼奴は七八貫もあるだらうと船頭はいつた。

ことしの夏に、若槻禮次郎氏が來遊した時には、猿が五六十も群れてゐて民政黨顧問を悅ばせた、同伴するはずの濱口氏は所用があつて來られなかつた、「濱口さんが來たら猿は見えないだらう、なぜつて、猿はライオンを恐れるからね」

見張りの猿が高い樹の上に立つてゐた。

このあたりの景色は畫のやうだ、紀行文を書いて畫のやうだと、片付けてしまふのは卑怯な文人である。筆が十分に描寫し難いところを畫工に托してしまふのだ、文學で書き現はせない景色なら、畫でも畫き現はせないはずである。文が畫より劣つてゐるとは信ぜられない以上は、畫のやうだと畫工に責任轉嫁をやるのは、文の未惑を發表するものである。拙堂がそれをやつてから誰れも彼れもそれを見倣ふ。この風景を述べた處を今の青年の氣持に合ふ筆を見たことはない、新刊雜誌を買つたり又た新聞でもこの處が載つてゐる欄を讀む人は、大てい甘五歳から四十五歳の人に多いといはれてゐ

る。現代の教育ぶりを見ないで古い筆で風流を說くものは、自己幻滅である、幻滅の幻といふ字を走り書きすると幼の字になつて困る、幼の字は使ひつけてゐるが幻の字は使ひ方が少いから活字でも、幼の字より幻の字が磨滅が少い、惰勢によつて、いらぬところにノの一かくをつける。いま若い人たちの待望してゐる風景描寫は幻のやうな新しい神稀境である。紀行文範から、老いた熟字を引つぱり出して惰性の風景を描くのは、犬山をして猫山たらしめるものである、日本ラインも新しい筆を待つてゐる。

流れが早いから觀音の瀧、おとみ岩、與曾松岩、富士瀨と、船頭さんはフキルムを早く廻轉するから眼がチヲ〳〵してゐるうちに、犬山城が、山と山との峽間に浮いてきた。この景色を詳細に說くことは老人の文士にでも賴んで私は猿を見たことを話の種にすればそれでいゝのだ。

これでしまひ?。なに、まだあるつて、何を書くのです。

下

舟の動きが緩漫になつた、船頭が怠業を始めたのかと思つたが、サボタージュをやつてゐるのは船頭でなくして水流であつた。犬山橋が見えてからは流れが緩くなつて、まア一服しなさいと水がさゝやく、橋づめの茶床からもさういつてくれる。

筏の間へ舟を突き入れて、危うい腰つきで堤へあがる。堤の楓樹は紅葉しないで、葉が縮みあがつてゐる、地味が楓に適しないらしい、その代りに櫻が狂花を着けて行人の眼を悅ばせてくれる。

近ごろは風流の調子が變つてきた、月を觀るよりも、青い灯赤い灯を好み、峰の紅葉を觀るよりも温室の西洋草花を好む、紫式部が百貨店で奉仕品を搜し、詩人李白がカフエーでカクテルに醉う時代には、犬山城下に鐵橋がかゝり、木曾山峽谷に高山線に煤煙を噴いてトンネルに入る。やがて水力電氣の堰堤でもできて、福澤桃介さんが株式を募集するやうになるから、私も犬山ホテルで、血のしたゝるビフステキを喰べて、ガラカーサンのツウ・ステップを蓄音機で聽きながら、秋の日本ラインを書かうとするのだもの、趣味の急轉墮落で、風流な紀行文はこの時に斷念した。

犬山城の五層は見晴しがいゝ。南には小牧山が見える、名古屋城が見える。秋色は澄き切つてゐる猿が雨ふり前に出るといつた船頭の天氣豫報は外れて、私には仕合せであつた。四方とも風景はいゝが、東の方が優れてゐた、惠那山が見える。谷間から急いで流れてきた木曾川が、こゝで停滯してゐる。停滯してゐるのが水の心理か、急に走つてゐるのが水の本能か、こんなところで落付いてゐるくらゐなら何も慌てゝ岩に突き當つてまで、流れてこなくても好かりさうなものだと私は思つた。常にはなまけてゐて、編輯の締切前に遽てゝ筆を走らせる記者は、日本ラインを逆に行くものである。

城といふものは殺戮の舞臺である。各城には殘忍の記錄が殘されてゐる。けれども、今日の戰爭には城の必要がないから、藝術的遺物として私たちはこれを風景の一部に取入れて、何の矛盾もなく自然との大調和を意識する。この犬山城も白帝城などと唐樣に改名するまでもなく、江陵の趣がある、下から見ても上へ登つても、氣持ちのいゝお城である。風景は詩人だけでの獨占ではなく、誰れに見せても通用するものでなくてはならぬ。犬山城の眺望は金貨のやうだ、どこへ持つて行つても通用する。

白帆が、橋が、木の葉のやうな舟が、蟻のやうな人が、見える、見える。

夕暮富士は何といふいゝ容色だらう、駿河の富士は別として、近江富士、薩摩富士、伯耆富士、尾張富士といつたやうに、到るところに富士を僭稱するものがある。てうど醫學士の上に何々と地名を冠せたやうだ、火山國の常として富士名の形をもつてゐる山は、日本にバラ撒かれてゐるが、この富士だけは小さいながらも本家の富士よりも出來がいゝやうに思はれる。

今年の二月に松江の天主閣に登つた時に、五階の番人が寒さにふるえてゐた。壁は隙だらけで大山おろしが吹きさがり宍道湖からは風が吹きあげる。高閣もために搖ぎ出す、火の用心のために喫煙さへ許されてゐないところに、火鉢はあるはずもない、番人は老人だ。老人は寒さを恐れる、寒い淋しい、浮世はなれた雲上人の心は高いが悲しい。その松江の話をそのまゝに、犬山に持つてきて、よく當てはまるから犬山のことは書くに及ばない。

自動車で歸り途に就くと、運轉手の話では、日本一桃太郎の誕生地がこの向うの山間にあつて、十一月の廿五日に發表式を擧げるといふから、そこへやつてくれと急に針路を捻ち變へさせた、車は畫なほ暗い怪しい道を走る、森の着きたところは雉が棚といふところ、桑畑の中に、日本一桃太郎誕生地の木標が建つてゐる。この邊には人家がない、桃太郎の祠は雉の棚山の中腹にあるといふから運轉手につれられて自動車を乘りすてゝ細い阪路を登つて行く。

なか〳〵急阪で女の脚子は苦しかつた、四五丁も行つたがそれらしいものはない、この運轉手は出齒鰮ではないか知ら、こんな淋しいところへ連れてきてどうするつもりかと、細身のステッキを握り締めながら、いざといへば一擊をくれるつもりで後からついて行つたが、この運轉手は美男で、女に不自由してゐないからお前のやうな醜婦は心配無用といふ態度でさつ〳〵と先に立つて登る。

庵寺があつてその横に小さな祠があり、その中に桃太郎さんを祭つてある。お圖子がある、人もゐない、運轉手がそれを明けて見ると、中には割れた桃の中から飛び出した、桃太郎さんの五月人形があつた。

秋の日本ラインは、猿に始まつて、犬山を經て、雉ケ棚を過ぎ桃太郎に終る。

18　鴈次郎と仁左衛門

枯れ切つた仁左衛門と、艶のある鴈次郎とは、東西を代表する名人俳優である。これは舞臺の上だけではなく、私生活においても皮肉な仁左と、如才のない雁との對照は、東京と大阪との趣味を代表してゐる。以前は大阪で兩優が相對峙して、降らなかつたが痔癪持ちの仁左は、大阪に愛想をつかして東京へ去つた。上方人はこの爭覇戰に鴈を支持したが、芝居通の中では、あの大きな鼻の持主を失つて劇壇の寂寥を感じてゐた。

今度一世一代の觸れ込みで、仁左は大文字屋をさげて關西に仁左自身の眞價を訴へた、鴈次郎一派の濃艶なものに食傷してゐる大阪人は、心から仁左の澁味を味はうと期待した、だから中座の雁仁合併は彌生興行の花を咲かした。松竹に梅の花が咲いた。

紙仕立兩面鏡（だいもんじや）は、仁左が義理堅い助右衛門と、茶番化した番頭權八との二役を勤めて、如月興行に幸四郎と勘彌とが活躍したあとの舞臺一ぱいに老骨を働かしてゐた。

この大文字屋といふ劇は操から歌舞伎化したもので萬屋（仁左）の悴助六は大文字屋からお松（魁車）といふ嫁を迎へた身でありながら、遊女揚巻と深くなつて番頭傳九郎（千代之助）の奸策で親から勘當される。兄榮三郎（延雀）が妹のお松に身を賣らせて、揚巻身受の金子を調達されるといふ筋書きで先代津太夫の得意のものであつたのを、義太夫を生命とする松島屋が、苦心してこれを歌舞伎化して片岡十二集の中に加へたほど自信のあるもので、仁左父子は一世一代と打出しただけあつて秘藝の奥までさらけ出した。

けれども、私たちは仁左に氣の毒に思ふことは、脚本そのものが餘りに現代ばなれがして、今日の道律標準に合つてゐないから、看客をして人情の極致を味はしめるについて、骨の折れる割合に涙線にこたへない點である。今の青年には親類の義理のために身賣りをするとか、夫の放蕩のために一生を犧牲にする場面は、餘ほどの註釋を加へなくては、理解せしめ難い。三角關係でも一般的となつて、民法の姦通罪でさへ改正せられやうとして貞操更改時代になつてゐる、たゞし、これはいゝことゝいふのではないが、藝術として勞多くして功が少いのが損であるといふだけである。特に婦人としては人格蹂躙の餘りにひどいため、獸類に追ひ込まれたやうな感じが先に立つて涙が後廻しになる。

歌舞伎座をして、日本劇のお名殘として存在せしめるといふ消極的な考へならそれでもいゝが、これを活きた藝術として青年に呼びかけるには餘りに感激に乏しいと思ふ。

もし、仁左の至藝がなかつたら、大文字屋は何の妙味もない氣拔けのした芝居である、氣拔けのした芝居に生氣を吸き込んだのは仁左の名人たるゆえんであつて、仁左の沒後には大文字屋は消滅するであらうと思つて記念としてこの一文を書き附けた。

19　銀座・心齋橋・四條

東京の銀座でも、大阪の心齋橋でも、京都の四條でも、横濱の伊勢佐木町でも、名古屋の廣小路でも、ブラ道には橋がある。申合せたやうに二つある、けれども池はない、淺草には池がある。上野にも池がある、この二つを地下鐵が結び合せて田舍ものを送迎する。東京上りの地方人は鮒のやうで池から池へ泳ぐのだ。

青い灯、赤い灯が道頓堀情調をそゝるやうに、夜の淺草風情は池にあつても、道頓堀川にもやつてある蠣船はまた味がちがふ。京都の新京極でも、大阪の千日前でも、名古屋の大須でも、神戸の新開地でもいはゆる盛り場には池はない、その代りに寺がある。

淺草の觀音、新京極の誓願寺、千日前の法善寺、大須の觀音、みなそれ〳〵檀寺である。盛り場に寺の必要はないが、必要はなくとも寺のないのは胴の中に臍のないほど中心點を失ふ氣もちがする。

この寺を重點として周圍に低級な渦を卷くのだが、渦をつくつてゐるのは都會人と地方人との交ぜ合せで、淺草では東北訛り、京都では山陰訛り、千日前では中國、九州訛りが耳につく、お上りさんの多いのは淺草が第一で、この頃のお客はポストと間ちがへられるやうな赤毛布を被つたものは少いが、舊式のトンビに重い荷物を擔いで、老妻をいたはりながら舊婚旅行をやつてゐる、田舍ものに限つて若いものはない、みな老人ばかりだ。若いものでも老けた風體をしてゐるから、さう見えるのかも知れない。

御大典で田舍もの、洪水は、東の京から西の京へ移動した、巡環乘合で博覽會の三會場を廻つたあとの歸りは、きまつたやうに新京極で自動車を降りる、博覽會は六時に閉まるが、新京極の歡樂境はその時分から蓋をあけるからである。

陰氣で暗かつた京の街も、この冬こそは電燈を倍加して面目を一新した。三條のタラ〳〵降りてから四條の御旅所へかけて、南北僅か四丁に足らぬ一筋路であるから、そこに詰め切れない興行物と飲食店とは、東横に喰み出して、第二新京極をつくつて更に溢れて、その附近の墓地に小路を設けてカフェーが並び、寺町はジャズと木魚との音が相交響する、つひに河原町まで八千代座が突き出した。どの盛場でも活動本位で、それも西洋もの文藝ものではなくして劍戟と俠客とが受ける、維新もの

白虎隊、鼠小僧などの外に高山彦九郎も、近藤勇も、西郷南洲も、梅田雲濱も御大典を機として地底から引つぱり出されて看板に上つた。

千日前に喜劇の一馬（かずま）が陣取つてゐる如く、淺草には新派の明石潮が控へてゐて、卑俗的なところは共通した技倆をもつてゐる。俳優の落伍者で頓才のあるものは新喜劇團を組織して、五郎や五九郎の眞似ごとをやるが、これは都會人にも受けないし、田舍ものは滑稽劇より悲劇の方を好むから、旗あげをしてもすぐつぶれる。

萬歳は大阪が全盛で、一時は道頓堀の檜舞臺を占領した、もしこれが東京であつて帝劇や、歌舞伎座で萬歳をうつたとしたら江戸兒は默つてはゐまいと思ふが、松竹でさへ萬歳部を設けて、低級なものとして見られてゐた萬歳は浪花節の領域に侵入してきた、太夫と才藏との俄か造りに女道樂や輕口師から引き拔いて不慣れな手つきで皷をたゝかせてゐるが、本職の萬歳が高給を貪るため俳優が不平をいひ出して、松竹も内輪もめがしたといふ噂があつたほどで、一時は下火になつたやうだが、盛り場ではまだ火勢は猛烈である。カルモチン自殺から更生した正岡蓉さんが筆を投げて、淺草でモダン萬歳を始めそれから地方に巡業してゐると聞いたが成績の良否は知らぬ。

南地の大火で、千日前につゞく難波新地の大半が飛田へ移され、大須でも遊廓移轉で幾らか淋れた淺草も千束町といふ私設遊廓が玉の井や、龜井戸へ移つてから、淺草情緒を稀薄ならしめたが、これを補充するものにカフエーがある。

大阪でも、フキリツピンの樂隊を傭ふことが競爭になつて、フキリツピンの上に純正といふ二字をつけてゐることを思へば、純正でないフキリツピン人もあるものと想像できる。行進曲についてモンパリ、それにつゞいてラ・ソレラなんかゞ流行するにつれて、こんなものは鮮かにやるが「青空」はまだ手に入らない、「梅田驛から東京まで」の歌を歌はせて舌の廻らぬところをお愛嬌に歡迎されてゐる、どの歌をやつても行進曲ほどに拍手のあるものは今のところではない。

カフエーでも、盛り場ではヂヤズは蓄音機で事を足し、色氣と喰ひ氣とが主となつて、女給にしても接客數は銀座の三倍で、チツプの揚り高は却つて少いが、その代り服裝費の支出が少い上に、行動の自由といふ有利な條件がある。

大阪では、府會に提案した女給稅を引つこめるらしい形勢だが、これまでにも私稅はある、遲刻が五十錢缺席が二圓といふのである。ダンスが禁ぜられてから、大阪のカフエーは意氣銷沈してボックスをつくつてステージダンスで滿足しなければならぬ。僅か十錢の電車賃で尼崎のダンスホールへ出かける。これは兵庫縣に屬する餘慶である。

銀座の繩のうれんを、京阪へ持つてきて試みたものは、みな損をして逃げ出した、立喰ひは名古屋以西には行はれぬ。東京の握りずしは上方で全盛だが、あんな不潔なものが趣味に投じたのは不思議の外はない、大阪の箱ずし——東京でいふ大阪ずし——が東京へ進出したが、東京人は喰べかたを知らないで握り壽司にするやうに逆さに反(か)へして御飯を上にして、喰ひつくから御飯粒がこぼれて立ち喰ひに適しない。

東京の麵類屋は蕎麥を主とするに反して、京阪ではうどんが重心となつてゐる。盛り場には大きな麵類屋と、肉すき屋とがある。東京の肉屋は肉を本位とするが、京阪では葱や豆腐や、その他のあしらひが十幾種もついて出るからどちらが本位だか、どちらが附屬物だか體系がわからぬ。

小料理屋が食堂に壓せられて、そこの仲居が牛肉屋へ落ちてくる、上品な料理屋に勤めるよりは働きはつらひが、數でこなすからこの方が割がいゝ。喫茶店を出して損をした例しがないといはれたのは過去になつて、今では一杯の紅茶に陶醉して二時間も居据はる書生ッぽがあるから、とてもたまらぬといふ。

輸出品のハネを擴げて賣るメリヤス屋と、船の下積で蒸せたバナ、を賣る叩き屋は、どの盛り場にも必らずある、安いやつだがこのバナ、は翌日まで置けば黑く腐つてくる、金は腐るものではないが宵越しのバナ、は腐る、腐らない金の宵越しを厭うて、腐るバナ、を買ふ江戸ッ兒の氣が知れない。

内臓を露出した人形を立てゝ、肺病藥を賣り、山椒魚を桶に生けて精分の藥を賣る。香具師も大膽だが、それを買つて飲む人の勇氣にも感心する。高島易斷の看板の下に乾下坤上を並べて横に建てゝある筮竹が五十本しかないのもある。

千日前に、名物の娘淨瑠璃がなくなり。新京極尾半(をはんと)小半(はん)の二輪加が絶へ、淺草には江川一座と、花屋敷は殘つてゐるが樣式が變つてしまつた、大阪の吉本が東京へ進出して、寄席を統一する雄圖が現はれて、猫八は大須から新京極へ鳴き渡り、今では千日前の紅梅亭に本據を据えてゐる、しん橋がゐなくなつてから淺草參りの東京落語も久しく聽けない。

盛り場の中で、淺草と、大須とが割合に低級なやうだ。それは銀座や、廣小路などに離れてゐるからではあるまいか、千日前は道頓堀につゞき、新京極は四條につゞくため、田舍ものもゐるにはゐるが粹(いき)な市人も交る。新開地や伊勢佐木町には開港場の常として田舍ものは少い、少い代りに移民と世界的の田舍ものがゐる、印度も、ペルシヤも、シヤムも混血もうろつく。

ホノルゝのワイキキ・ビーチでは、夏は海水着のまゝで男女が手を組んで歩いてゐる。冬はハッピーコートが婦人間に全盛だ、日本の法被(はっぴ)でオーバーの代用にするもので、ハッピを幸福(ハッピー)と引いて御幣

をかつぐアメリカ人は、幸福外套と稱して、紺メクの背中に大きな漢字を大篆（てん）に現はし、衿には小頭とか、建築受負とか赤字に染め抜いたのを、花も恥らふ美人が着て得意がつてゐるのは、いさゝか恐縮する。

アメリカ婦人より、東京の方がお白粉が濃い、東京から西へだん〳〵濃度を加へて京都においてクライマックスに達し。お化粧といふよりも扮裝といふ方が適當なぐらゐに塗り立てる、髪の油の濃いのが眼につく、ウエーブした洋髪にさへ油をたくさんつける、大阪から西へだん〳〵薄くなり、神戸で濃度を減じ、廣島から福岡へ渡れば東京式に還元する。

同じ東京、どうしても、銀座と淺草とは化粧法が違ふ、銀座の方が淡彩である、帝劇でみるのと淺草劇場でみるのと婦人の顔がちがふ。銀座ブラのモ・ガの目的は賢母良妻ではないが、タイガーの前でよく注意してみれば。ブラモガの常連は年々に新陳代謝してゐる、新加入のモ・ガは女學校から送り出され、脱退した常連は家庭に潜伏する、銀座の光景は變らなくともその上を行き交ふ人は代る、代り代つて年は過ぎ、かくして今年の冬も暮れる。

20　アメリカ罵倒

悪る口をいふものが弱者で、悪くいはれる方が強者で、蔭げ口をたゝくものは泣き虫で、たゝかれるものが日當りがいゝ……といふことが、うるさい人間を統制する原則であるならば、ヨーロッパ人はアメリカの悪る口をいふから、アメリカは風通しのいゝ國だと思ふ。

フランス人や、イギリス人をしやべらさうとすれば、アメリカ人の無作法なこと、高慢ちきなことを話題にすれば乘氣になつて椅子を前へ寄せる。

滿洲では、アメリカの評判はいゝが、シベリアで少々悪くなりモスコーで大ぶん悪化する。チエッコで少し持ちなほし、ドイツで又た悪くなりフランスでどつと落ち、イングランドが悪口の終點だから、こゝでは思ひ切つてヤンキーとジューとをこき下して痛快がつてゐる。

あの陰鬱な空の下で、煤烟を噴く舊式石炭ストーブの前では、他國人の蔭口をいふにさふはしい。霧の日は尙更ら悪る口が耳に落つく。

百三十萬の失業者を養ひ切れないで、これを船に積み込んで、屬領へ島流しにせねば失業問題の解決がつかない。大イングランドの面目はどこにある。

癪にさはるのはアメリカの繁榮だ。むかつくに無理はない。

イギリス人の悪る口の假聲（こはいろ）をつかつて、日本の女浪人は悪る口の後について又た悪る口を書く。

『焦熱地獄ていのはニューヨークの夏だ。アメリカの夏ときたら、さア何といつたらいゝか――と罵倒の極端な警句を考へながら――太陽の光線が投げ槍のやうに人を刺すのだ。貴女は硝子工場を御存じでしやう、なに、知らない。それは困つた、砂と曹達灰とを交ぜ合せて耐火煉瓦の窯(かま)の下にガスの炎が渦巻いてゐるところへそれを投げ込む、すると砂が燃ゑて融けて光つた飴が流れ出す。ニューヨークの夏はガラス工場の窯の前だ。

傭が百四十二街を通つた時の話だが、かあいい、だが貧しいらしい小娘が卵を籠に盛つたまゝ車道を小走りに横切つた、と、フルスピードの自動車が、危い。

小娘は身をかはしたが、卵は身をかはし損ねて地上に落ちた。一二三四五、合せて五個、そのうち二個は自動車のタイアにかけられて潰れてしまつた。あとの三個だが、それは貧しい小娘に取つて貴重なものだ、それでも拾つて歸らなければ彼女の繼母がどんなに恐ろしい顔で、公設市場から歸つてくる彼女を迎へるであらう……とこれは想像だが……小娘は狂氣のやうになつて、自動車の連鎖行列の中をくゞつてその一個を辛うじて拾ひあげた。僕も小娘を助けて一個を拾つてやつたら交通巡査の笛の聲に交つて、彼女の莟のやうな唇からサンクユーとイギリス流の挨拶を洩らした。アメリカにも禮儀を知つてゐる娘があるのだ。

そんなことはどうでもいゝ、炎天の下で地獄の底で、危急存亡の時に娘の美しい顔を賞美したり、かはいい聲を嘆美するだけののどかさは、實際になかつたはずだが、それが僕の印象に殘つてゐるから妙だ、妙だといつて、簡易に片付けねば話がだれる。

このアクシデントは、僕がニューヨークの暑さを説明するに適當な證據を殘した、何といつても確乎たる甲第一號證だ。なんと、一個の卵が鋪道の上に擢けて半熟となつてゐるではないか。

日光が燒きつけて、道路がフライ鍋のやうに熱してゐるから卵だつて煮ゑるのだ。

かういつてイギリスは得意になつて四邊をみ廻した、日本婦人のK子が横合から

「だつて、半熟だなんて、その卵といふのは莢抜き玉子で始めから半熟だつたのでしやう、それはきつと五分間卵だわよ」

自分からアメリカ罵倒の糸口を引いておいて、イギリスの證據を臺なしにしたK子は、永らく浪人してゐるだけに、女ながら謙讓の美德がない。

イギリスは舊式のひげを撚りながら、拔からぬ顔で

「或はさうだつたかも知れない」

といつたが、すぐ元氣を回復して夏から冬に飛んだ。これで名聲を回復するつもりだらう。

「ニューヨークの冬ときたら、全市を擧げて一大冷藏屋だ、こゝの冬はひげから氷柱がさがる、だからアメリカは髭を剃るのだ。

あの無技巧なビルヂングが、マンハツタンに立つてゐると、大西洋から吹きあげる北風がハドソンとイーストとの二川を傳つて、兩方から挾み擊ちするからたまらない、摩天樓のセメントに寒さが滲透するとビルヂングが人とゝもに氷結してしまふ。道路はまるでスケート場だ」。

「ではブロードウェーに牛が通つたらすべるでしやう」

「牛？　そんなものは通らないよ、あの自動殺人車が引つ切りなしに通つてゐる道路に、牛のやうなのつそりしたものが通つたらすぐ衝突するからね」

「だが牛が通つたら」

「通らないといふに……法律で禁じてあるはずだ」

「でも規則を犯して通つたとしたら」

「貴女は熱心に牛を通さうとしていらつしやる、では一歩を讓り貴說に從つて、あの凍てついた道路に牛が通ることゝしたら……」

「コールドビーフが生きて動くといふのです」

「そんなしやれは粗製だ……ニューヨークから、八マイルばかりにコネーアイランドといふ遊び場がある、猶太人などの俗惡な興行ものが並んでゐる。そこへ行けばヤンキーの趣味の低級さを知ることができる

黑ん坊が幕の破れから顏を出してゐる、それを目がけて球を投げる、球はかなり固いから顏へあたると黑ん坊は痛いといふ表情をする、アメリカは、婦人でも兒どもでも、殘忍な點はよく訓練ができてゐるから私刑のつもりで球投げをやる、五球十仙なら安いものださうな。

距離は八フキートばかりのところだから、誰れが投げたつて命中するのだ、僕の投げた球は五つに四つ命中して賞品をもらつた。」

「おや、貴君もやりましたね」

「僕もいさゝか黑人の顏に敬意を表した……僕の次へきたのが大變な男で、これは何でも野球の有名な投手だつたといふだけあつて、球を握つた右の手を高く差しあげ左の脚を右へ浮かせて、はつしと投げたら、黑ん坊の鼻柱から火花を出して球は戛然として十フキートばかり宙に飛んだ。

黑ん坊も面の皮が厚いが、その顏に球を投げるアメリカ人の面皮の厚さは人面獸心だ、人種憎惡の力は恐ろしいもので、黑ん坊はつひに鼻柱を折られたといふのに、ヤンキー娘たちは痛快がつて拍手

を送つてゐたよ」

21　いま亞細亞を離れる

一

晴曇六日の旅、私はいまマンチュリーに着いた。三時間の停車は私をして過程を回顧して感想を書きつけしめるに十分な餘裕である、私の體は前へ北へ、この郵便は後へ南へ、倒叙的に書いた原稿は私の體とは異なつた方向へ運ばれるのである。

私を載せてきた鐵道は、ロシヤ侵略主義の殘した形見である。主義は惡くとも便利なものを思ひ切つて敷いてくれたものだ、勞農國ではとてもやり得ない大規模のものを、のたくらせたのは帝國專制苛斂誅求の賜ものである。私は昔の侵略鐵道に乘つて今の萬國婦人參政權大會に臨むのである。

これから先はうつかと原稿も書けない、極左と極右とは相等し、今度の旅行で檢閲の最しいのはロシヤとイタリーとである。白い印刷物を持つてゐたら入國拒絶に逢ふさうだが、頭の中の檢閲法は西瓜や鷄卵のやうに見すかしがつくまい。シベリヤ鐵道は評判ほどの危險がない代りに、寢食の不便がある、不便利の方は辛抱するが馬賊の危險なんかは願ひさげだ。

こんな鐵道を敷いて、日本をふるひあがらせたロシヤ舊帝國も、今のは東歐諸國と條約を締結してアメリカの提唱の不戰案より一足先に失敬した、正直な人間でも外交官となれば欺瞞に無感覺となつて、國家のためといふ五字で不正を掩はれてしまふ。ロシヤの簡單率直な提議は、紆餘曲折の多いアメリカの案より埒が早やかつた、こんな競爭はいくら早くとも、いくら重複しても厭はぬ。

東歐不戰條約で、ライヴィアなんかのやうな戰爭不能國も加はつてゐる、軍縮會議にもキューバのやうな國は何を縮めるのであらう、何でもいゝ、多いほど人氣がある、ロシヤの軍備撤廢の原則は實行できなくとも針で刺戟したほどの効はある、けれども眞先に反對した日本は馬鹿だ、日本をしやべらせて默つてゐる英國は狡い。

ハルピンの散歩に、名物の樹氷はみなかつたが、赤い夕陽は國際競馬場の廣物を貫いて、敎令の尖塔を彩つてゐた。日露協會學校の制服をつけた日本の學生が、プラトークを冠つたロシヤ娘と荷馬車の上で何か語らひながら、支那馬に曳かれて白樺の林を行くところ、個人的には赤も白もあつたものではないが、ロシヤ人はダツタン人を前衞として南下する。日本は火水田經營の妙を得た鮮人を先に立てゝ北進する、支那の內亂は漢人を驅つて東漸せしめる、三角形の焦點はハルピンである、三角關係は兎角調子が合ひにくい、モスコー政府には第三インターナショナルといふ裏があり。國民政府に

は國民黨といふ拔け道があつて、正面では宣傳をしないといつて、裏では赤い粉をふり撒き、表門は親日で裏口は排日をやる、思想と物質の挾み擊ちは、日本を神經衰弱にする。

青年たちは、父祖の苦心して開拓した豆の土と豚の村とを棄てゝハルピンに集まる。泥と草とで建てた家は青春の魂を容れにくいとあつて、歐洲文化のにほひのするダンスホールで踊りぬく、離村は日本人の惡い癖である。眞面目なるべき少壯開拓者が競つて滿州ゴロを志願する、安いものに需要が集注して、强烈なロシヤ酒と香の高い紅茶とを滿喫し、彼等は胃袋に波うたせながら、國際的の戀を追ふ。

鴨綠江から奉天までは、山河重疊して島國の氣分が失せないが、そこから大陸的氣分が橫溢する、チ、ハルから、禾本科植物の曠原をつきぬけて、落葉松繁る興安嶺へぶつゝかる時は、又た氣分が變る。

山でも落ちついてゐる、野も落ちついてゐる。汽車も落ちついてゐる、汽車の落ちついてゐるといふのは窓外の景色に變化がないから走つてゐるのに氣がつかないからである。汽笛響きなくして山の遠きを知る、何となく心細くなる、旅の心は落つかない。

落ついても、あせつても、人生五十年、ベルリンまで十五日、大悟した氣分になつて落ちつきを餘儀なくせられてゐると氣分が伸びて、熱を加へた餅のやうに身體の膨脹を感じる、ロシヤ人の體の伸びてゐるのは餅は餅屋、のんき黨の本場は爭はれない。

滿鐵を純民營に移す計畫は、次の民政內閣へ利權を與へまいとする不統の動機から出たといふ邪推をやめて考へたら甚だいゝことである、鐵道線に沿うて國威が伸びるものなら蛇のやうな國威で、私たちはそんな國威は嫌ひだ、半官半民といつても總理、外務、鐵道、大藏の各相が監督權を握り廻はすから株主は言議を挿む餘地がない。

官權をレールに錆付かせるから、國際的には餘計な疑ひをかけられ、國內的には政黨に利用せられる。增配はよろしくないが百圓株を五十圓額面にしたのは大衆化で甚だいゝ、滿人をも鮮人をも株主に抱擁するには十圓の額面がよからう。

發車時間がきた、筆を投げて西進の途に上る。

二

日本人が多いから、京城までは內地旅行とちがはなかつたが、京城からめ始て朝鮮氣分になつた。內地でみた鮮人と、朝鮮にゐる鮮人とは質がちがふ、こんな純眞な原始人を統治しにくいといふのは德をもつてすることを忘れて、法律で縛らうとするからである。

鮮人を、舊日本の型にはめ込まうとするところに、內鮮の軋りができる。日本人だつて內地型をいゝものとは思はない、まして習慣を異にする鮮人が快く思はないのは當然の超當然である。

朝鮮は官位の賣買が行はれてゐるといふのは嘘であらねばならぬ、昔にあつたことで現代にそんなことがあつては大變だ、そんな嫌やな噂は何人かの不德の致すところであらう。朝鮮へ臨む官吏は有德の人を選んでほしい。

家旅制度を破壞することは、內地でも反動的異議はある。朝鮮でも思想をかき亂す、拓殖省を設けて朝鮮を、政爭の渦中に卷き込まうとするのは、噂だけでも鮮人は氣を惡くしてゐる。

朝鮮に敎育網を張つて不逞人の溫床をつくるのと、支那留學生を優遇して排日の幹部を養成するのと、大學を增加して社會科學の實行を奬勵するのと、この三つは日本敎育の特徵である、國帑をつかつて國家の方針に背いたものを仕上げる。方針が惡いか敎育が惡いか妙な制度である。

朝鮮を併合したのは國境防備の必要と、內地に咽ぶ人口のはけ口を求めるためではなかつたか。航空機の發達は國境防備の必要を稀薄ならしめた。この見渡す限り禿げた山と荒れた野とをそのまゝにして、內地人は來らず、鮮人は去る、去つて內地に移住する、內地勞働界、ために賃銀の脅威をうける上に失業率の二割を加へた、船會社の競爭は十一圓の船賃を三圓にまけて鮮人を滿載して內地へ運ぶ、失業放浪の人が內地に行き渡る。

東拓が漸く二萬戸の移住民を朝鮮へ送つた間に、向うさんからはすでに五倍するお客を內地に送つた。鮮人の內地へきたのは十七萬一千人といふのは公稱であつて實數は三十萬といはれ、全くの文盲が四割を占め、八割は未婚の壯年男子で、性の惱みをコカインに訴へ、變質者となつて、內地を徘徊する。

內地から渡鮮したものは懷手の時間が多くて、働くことを厭ひ、搾取を圖り、遊んでゐてもうかる方法ばかりを考へて鮮人にいやがられる。

戰後の生活苦は、アメリカを除いては世界的、普遍的であるに拘らず、鮮人はこれをもつて日本政府の施設が惡いために鮮人が苦しんでゐるのだと思ふ。意思が疎通しないからお互に困る。

河邊の荒蕪地、山麓の傾斜地、もつたいないほど棄てられてある。鮮人二百萬、その八割は農民ではないか、農政は朝鮮統治の全部である、けれども日本の米穀法に矛盾がある。鮮米增收で內地の農家が苦められ、鮮米減收で內地の俸給生活者が困る。

朝鮮農民の九割は小作で、米の消費者であるから關稅を高めても、米を買上げても喜ぶものは一割に過ぎない、支那には常平倉といふ米價調節の制度があつて、朝鮮にも行はれた時代もあつたが、そ

れは外國貿易のない過去の善收であつて、現在では困るものゝ方が多い。

目に觸れる景象は、島國日本でもなければ、大陸支那でもなく、半島朝鮮の風物を搖るがせて白衣寬袖の人が徂徠する。關釜聯絡船が内鮮百マイルを繫ぎ、鴨綠の鐵橋が鮮支三千フキートを握手せしめる、亞細亞を疎通する交通はできても、人情が切れ〳〵になつて相排擊し合ふ、シベリヤ出兵よりはましたが、三億の事業費を注ぎ込んでも鮮人は喜ばない同化しない。

鴨綠江は航運河としての價値は乏しいが、來月は名物筏の盛期で、今はぼつ〳〵流れてゐる、内鮮は合流しない、雪や氷にとぢられて同化政策は新義州に着きかねる。

ロシヤは十年計畫で、百萬の移民をシベリアに送るさうだ、シベリア移民の中心地はハルピンである、キタヤスカヤ街はハルピンの銀座だといふが、支露日英米佛白の順位に國際人がブラつく、支那人十八萬、ロシヤ十六萬、日本四千で、市がきてゐる。流通貨幣も露貨と支貨との國際的馳逐である。

北滿ホテル横丁には、カフエーと活動寫眞とが並んでゐる、今夜は舞踏があり、オーゲストラの上等がモスコーからきてゐるから一泊いかゞと勸められたが、チウリンと杉浦との二大百貨店をのぞいたばかりで慌たゞしい旅に上つた。

殘つた印象はと問はれたら、日本人の神經の細いことゝ、ロシヤ人の鈍くして太い線をもつてゐることゝを答へて置かう。それは月並だとはいはれても、それ以外に印象の持ち合せがない、旅行中は斷片的感想にとゞめて、綜合した批判は歸つてからゆつくり書齋で書かうと思ふ。

22 魚

戰爭中に肉の節約で魚食を奬勵したが、魚類といつても、海老や、鰯や、鱒などは平素から喰べ盡されてゐるから捕りにくい、捕りよくて澤山にゐるものを物色して舌鋒は鋭く鰻に向けられた、鰻はどこでも捕れる、テームスでも、セエヌでも、ラインでも、下流の海でも、上流の河でも捕れる。田舍の小川へ行けば蛭や水虫のやうに群がつてゐる。

江戸前なら、頭にボンと目打ちを打ちこんで、堺の庖丁でベリ〳〵と首尾一貫して開くのだから縱斷でするが、歐洲では輪切にするのだから横斷である。

瓦斯ストーブの上に、アルミニューム板を載せて、油を引いてその上に鰻を轉がすのだ、もつとも西洋の魚料理やは、籠にいろ〳〵の生きた魚を入れてお客にみせる。海老、鱒、鰈、蠣、蛤なんかの生きてゐる中を、鰻が潛行してのたくるのだ。鯛や鰹なんかは食べないから魚の種類は極めて少い、定食の時を除く外、魚料理屋では生きた見本をみせなければ白人は決して魚を喰べないのだ。

籠をのぞき込んだお客が鰻を指さした、指さゝれは鰻は死刑を宣告されたのである、けち臭いお客だ、蠣や海老は高くつくから不景氣の當節がら、一番値がさの低い俺を選み出したのに違ひない。お客がそんな根性なら、思ひ切りまづいものを喰べさせて、以後決して鰻なんかを喰べるものではないといふ觀念を人間に與へるために、俺は殉敎的な死に方をしてやらうと、コックが不器用な手つきで鰻の頭をつかむとゝもに、尾は向上してコックの腕にからみついた。

ロンドンには東洋軒、ときわ、湖月などの日本料理の外に、魚料理屋が五軒ある。精進料理屋はセヌト・ヂョーヂ・ケーフ、ユーステース・マイルスその外二軒ある。パリーではブルニールの外に三軒の魚料理がある、イギリスでは一般に魚を食べ始めてから、二三年にしかならないのだから、コックは鰻の扱方を知らない、頭さへ押へつけたら大丈夫と思つたのが油斷で、鰻のやうに尾が一かどの働きをする。尾で捲かれてコックが思はず手を緩めるとともに、鰻は死刑因が法廷で暴れる棄身の力をもつて漆喰の上をのたり廻るのだ、コックは助手の加勢を求めて下水の流し口で危く押へつけた、尾が腕に巻き上るのを物ともせず、頭をつかんで力一ぱいに煉瓦の上にたゝきつけた、鰻も氣絶して體を延ばしてるるところを、漸く押へつけた時分はもう脂が抜けて、その代り人間の手の油が鰻にうつてまづいものになつてゐる。

注文したお客が、三べんも欠伸してゐる時分は、鰻が漸く金版の上に置かれた時で、鰻は衆寡敵せず幡隨院のやうに、どうなつと勝手にしろと。運命に身を任せてゐるものゝ、瓦斯ストーブに火が入つて油がじい〳〵と音を立てると、饅も刺戟に感じて生氣を回復した、元來が俠客でないだけに命が惜しいから、最後の跳躍をなして金版の上から飛んで降りた。

又た三四人で押へるのだが、鰻にしても生命の瀬戸際だから秘術を盡して渡り合つた、が完全に弄り殺しになつて熱い油の上に轉がされた。鰻香といつて蒲燒の香ひはいゝものだがこの油は、オムスクのバターをスイス式に製したものだから、魚と混じて煮るとまるで屍體を火葬してゐるやうな臭ひがする。

コックは尾を持つて吊るしながら、皮をむくと白い肉が出る。それを俎の上で輪切りにして骨を抜いて、鹽でまぶすのだ。骨抜き機械があつたら皮をむかない先に骨を抜くのだが、このコック室にはその機械がないから輪切りにしてから骨を抜く。

注文したお客も、鰻を食べるのが始めてなら、コックもそれを料理するのが始めてだ。新任のパリーからきたシエフ(料理主任)はイギリス流のテキは上手にやる。何でもテームスの上流にある田舍都市で二ヶ月ばかり鱒料理屋にゐたことがあるといふので、魚をこなすことが自慢であるが、鰻は不得

手だ。不得手どころが今度が始めなのだ、戰後のパリーは、イギリスでみくびられてゐるが、料理にかけてはアメリカのホテルでも、フランス語でメニューを書くほど、食物については權威がある。パリーで鳴らした料理主任の腕前をみやうとコックたちは手並みを見學してゐる。主任たるものが鰻料理を知らないとあつては、權威にかゝはると思つて、蛙の脚と同じやうに皿に盛つて、クラッカーと人蔘とをあしらつたのだが、さてお客さんが旨さうに喰べるのであらうか、どんなものだらうと自信のない眼を料理場の小窓から窺がせてゐる。

注文してから、四十分を經過したから、さすが落ちついたイギリス紳士も、いさゝか待遠しくなつたにちがひない。アメリカ人ならもう今ごろは、自動車で次のレストランで食事をしてゐる時分だ、日本人なら氣が短いから、痰を吐いて去つてゐたであらうが、イギリスは紳士國だからいつまでも待つてゐる。有閑紳士といふものは時間を厭はない點から養成されるのだ。

お客は、自分の前に置かれた鰻――白い五寸ほどの圓體二個――をフオークで押へた、別に力を入れて押へなくとも、もう鰻は死んで魂は天國か、又はウエストミンスター寺院の登壇に上つてゐるから逃げる心配はないのだが、しつかと押へてこわ〳〵ナイフで三つに切つた。その一と切れを口に投げ込むなり、顏面神系が作用して顏が少々歪んだ。けれどもイギリス紳士には禮儀がある。まづいものでもおいしいやうに喰べるのが他のお客に對する禮儀である、それを知つてゐるが、とてもその禮儀を守れないほど妙なものを口に入れたのに驚いた。他のお客に氣づかれないやうに、ポケットからハンカチーフを出してその中に吐いた。これは革命的な味だと思つたらしい。

のぞいてゐた料理主任は全身に冷汗を流した、うろたへて鰻にシロップをかけたことに氣がついた

「ボーイ、あの三番の鰻にジンジヤを掛けろ」

氣の利いたボーイ壜をもつて走り出した。

「これを掛けるのを忘れてゐました」

味覺をごまかすため、辛いしようがの濃汁をふりかけた、紳士は小聲でサンキュトーいつた、何がサンサユーなことがあるものかとボーイは恐縮した。

イギリス人は決して怒らない、足をふまれても微聲でサンキューをやる、夕刊を買うにも金とサンキューとを同時に支拂ふ。その食卓の前には、アメリカ婦人がゐたから尙さら怒らない、尙さら丁寧で特別に禮儀が正しい。イギリス人だつて婦人を尊敬するにはするが、何ぶん妻君を毆る常習者のカーライルの子孫だから、アメリカ人ほどにはレデーを尊ばない、アメリカレデーときては歐洲でも恐れを成してゐるほど權威が強い。

鰻や鯰は、歐洲では食用にしなかつたから、それを漁獲するものがない。だから自然に人を恐れない、深い岩穴の中に窒居して、時々鼻先だけを出して天下の形勢を窺つてゐるやうな、日和見主義を知らないで、水の表面を公然と浮遊してゐる。捕へられることがないから人を畏れないのは、前科のない聖人が探偵を恐れないやうなもので、歐洲は鰻に取つては安全地帶だつたが、歐洲大戰といふ人間に取つては大事件が勃發した、それが鰻に取つては更に大事件であつた。

戰時の食料節約から公園をつぶし甜菜を植えたところもある。

「多く食ふものはカイゼルの味方なり、少く喰つて大英帝國のキングに忠誠なれ」

「食料の節約は、神のため、王のため、國のため」

といつたやうなポスターができた、お腹が減つてもひもじさをこらへるが、國のため、王のためであらうが、神のためとはちとをかしい。

「肉を食ふな魚を食へ」

といふポスターが、このレストランに殘つてゐる。これは何とかいふ有名な畫工の筆になつた畫にロイドジョヂの健筆で書かれた標語であるといふので、ロイドジョーヂ崇拜家であるこの家のマスターが大切に保存してゐるのは、ロイドジョーヂ崇拜ばかりでなく、この魚料理屋に通した文句なのだから、十何年も前のポスターガ額に入られて大切に保存されてゐる、その掛額の下でイギリス紳士が戰時の苦みを思ひ出すかのやうに鰻を食べてゐる、それがまづいといつたならロイドジョーヂに濟まないとでも思ひゐるかも知れない。

戰後は、魚好きの南歐人はいふまでもなく、魚ぎらひのフランスも、イギリスも魚族を食べるやうになり、食料制限のない今日でも、魚食を奬勵して緩急の時に備へてゐる。

先祖代々のん氣に暮してゐた鰻族は、急に戒嚴令を布いて警戒したが、習慣といふものは恐ろしいもので日本鰻なら身を縱にして、尾から先に網目を拔ける忍術を心得てゐるが歐洲鰻は長い體を横にするから容易に綱で掬ひあげられる、日本鰻は押へつけてもぬる〳〵と掌の横からすべり、指の俣から拔けること、舊式の外交官のやうに、圓轉滑脫の妙を極めるが、歐洲ものは身をかはす術を知らないが、日本人は柔術を知つてゐるから、鰻だつて日本ものはボクシングの手つきでは中々押へられぬ。

日本鰻は箸にも棒にもかゝらぬが。西洋鰻は針にも網にもかゝる、鰻に手管がないから餌をみたら正直に呑みこむ、釣りあげられても、テグスに卷きついて釣手を苦しめることも知らないで、のらりと長く音なしく糸瓜のやうにぶらさがつてゐる。

鰻料理は有色人種の外に、南歐人と、鷲鼻の人とのみが好んで喰べるが、ニューヨークのイタリー

街へ行けば生の鰻を骨抜きにして輪切りで賣つてゐる、それをフライにしてソースをかけて食べる、日本流の蒲燒の味を知らない、と歐洲人を笑ふわけに行かない。といふのは手近いところで京都の鱧料理のおいしいのを東京人が知らないやうなものだ。

アメリカの河は田舍へ行つても、コンクリートで底から岸まで固めてあるから鰻の生息に適しないが、イギリスの小川は原始的で芦なんかも生えてゐるし、石垣もあるから鰻はかなり安全の地を得てゐる。

イギリス人はボートをこぐことの外は、河に何の趣味をも持たないが、テームス川は並木の堤に沿うて遡ると、流れがだん〳〵細くなつて水がいよ〳〵清くなる、牛乳を運ぶ馬車の歸り途に便乘させてもらつて田舍へ行けば、背廣を着て中折帽をあみだに冠つてゐる太公望がある。

挽き肉を川の中へまいて置いて、牛肉の切端を餌にして釣るのだが、西洋の魚は洋食に慣れてゐるとみえて牛肉で釣られる、恐ろしく異人くさい魚である。

釣つた魚は大ていフライにする、しかしおいしいと思つて喰べるものがないのは、料理が下手なからだ、魚料理屋はショーウキンドに生洲をつくつて、河と海との魚を養つてゐるが。蛸と鯰とは道行く婦人に身ぶるひさせる。

鰻の旨さをアメリカ人に宣傳しやうと、日本のコックが蒲燒をもつてすゝめたら

「アメリカ人を誤解すな、懲役だつてそんなものを喰ふものか」

これは本當である、アメリカの囚徒は贅澤である。

「日本の種喰ひ奴!!」

「たね喰ひとは?」

「さうぢやないか、お前たちは稻の種を一粒づゝ齒でかみ碎いて喰つてゐるぢやないか」

「アメリカ人だつて麥の種を喰べるでしやう」

「喰べられるやうにして喰つてゐるのだ。種をパンといふ食物にしてから食べるのだ、ヂャップときたら種のまゝ喰つて鰻の生を喰つてゐる、だから生意氣だ」

「鰻の生なんだ食べるものですか」

「俺はよく知つてゐる、ヨコヒヤマ、サクラ、シヤヨナラ、ヨシユワラ、コンニチユワ、とうだ、よく知つてゐるだらう、生きた鰻をさしゆみにするのだ」

「それは鯛です、鰻の刺身はありません」

「隱すな、ヨコヒヤマ、シヤヨナラ、ゲイシヤ、よく知つてゐるのだ、日本人はコックに化けて鰻ば

かり食つてぬらくらとしてゐるが、生れながらにして軍事探偵だ、軍用犬だ、日米戰爭の準備をしておかげでアメリカ國民は、一人當り三ドルの軍事費を負擔させられてゐるのだ、この鰻くひめ！」

「何だ三ドルが惜しいのか、牛ばかり食べてゐるから向う行きが強く、突つかゝつてくるのだ、角を引きぬいて豚に還元させてやるぞ……」

といひかけたが、ちよつと待てと心がさゝやく。

春の草が堤に萠えかけた時は強いが、秋の木の葉が落ちる時分には弱い、これは職業上の關係である、煽風機を片付けたら、次に失業の風が吹く。

ふりあげた握り拳を解いて頭を搔いた、覺へてゐろ、春になつたら、汝の頭上に與へるサムシングがあるぞ、と鰻から國際問題を惹き起しさうなところだつたが、不戰條約の精神を守つて握拳を片付けて軍縮をやつた。

歐洲人はアメリカ人ほど鰻に憎惡心をもつて居らぬ。

妙な料理を食べさせられたが、アメリカレデーの前だから禮儀正しく食べやうとしたが、ジンジャが辛くてとてもテーブルマンナーが守れない、妙な顏つきで、フオークを倒して皿を少し前に突き出した。

待つてましたとボーイは飛んで出て、皿を取り戻した、お次に何を？と一品係りのボーイが尋ねたら、それに返辭もしないで、勘定場で鰻一皿の代金を拂つて、

「魚料理は僕の舌に合はない」

とつぶやきながら出つた。この味は過激思想を含むと思つたにちがひない。

ボーイがその後を見送つたら、ピカデリーサーカスの角の支那料理へ這入つた、チャプスイで口なほしをやつてゐるのだと料理主任は笑つてゐた。

昭和五年九月五日印刷
昭和五年九月十一日發行

定價金五十錢

地球一蹴

著者　北村兼子
發行者　瀧本恭治郎　大阪市西區阿波座下通二丁目三六
印刷所　桃谷印刷株式會社　大阪市東成區鶴橋南之町一丁目

不許複製

發賣所　東京市神田區錦町一ノ二
大阪市西區阿波座下通二ノ三六
改善社
電話新町一六二五番
振替大阪七五九三九番

609
49

60
40

609
49

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black